



大雪山から育まれる文献書誌集

～豊かな自然・さまざまな生命・歴史文化の記録～

北海道・東川町

ふるさとの山、大雪山の文献書誌

東川町のエリアに大雪山国立公園の主峰・旭岳がすっぽり入っています。ふるさとの山、大雪山は、アイヌの人々がカムイミンタラ（神々が遊ぶ庭の意味）と呼んでいた特別な山です。豊かな自然はさまざまな野生の命を育み、町から眺める姿は雄大で美しく、日本を代表する名山のひとつです。

自然が豊かな山であると同時に、さまざまな人がかかわり、多くの本や研究が残されてきた大雪山です。人とのかかわりを視点にすると、日本一の「文化の宝庫」ともいえます。北海道が蝦夷地と呼ばれていたころから多くの探検家が歴史的な紀行文を残し、明治時代の文士が名文を残して、大雪山は徐々に全国に知られていきました。

高山植物、動物、昆虫、地質、火山、気象、雪の結晶などそれぞれの分野の研究者が登り、研究成果を発表しています。登山、縦走、冬山、スキーなど登山記やガイドブックは古典的な名著が多く、そして最新版としてこれからも発行され続けていくことでしょう。優れた写真家たちが心血を注いだ素晴らしい写真集にも恵まれています。そして、これからも写真家たちは大雪山を撮り続けることでしょう。

大雪山の文献書誌を東川に集め、多くの人に読み、親しんでいただき、「文化の宝庫」を全国に発信していきたい。そのような目的で、どのような本が東川にはあるのか、「目録」を作りました。ふるさとの山への知識を深めていくきっかけになることを願っています。

目 次

大雪山文献書誌集に寄せて

『私と大雪山』	東 延 江	1
『ふるさとの山』	佐 藤 一 校	2
『太田龍太郎の生涯』	笹 川 良 江	3
『松山温泉といった頃』	鮫島 惇一郎	4
『憧憬の大雪山ふたつ』	清 水 敏 一	5
『偉大な大雪山と小さな私の接点』	俵 浩 三	6
『夢を見たくなる東川からのささやき』	寺 島 一 男	7
『「大雪山昆虫誌」をまとめて』	保 田 信 紀	8

大雪山文献目録	9
---------	---

インデックス	38
--------	----

大雪山関係機関、団体の紹介

環境省 東川自然保護官事務所	46
NPO 法人ねおす・大雪山自然学校	47
旭岳ファンクラブ	48
大雪と石狩の自然を守る会	49
旭岳ビジターセンター	50

私と大雪山



東 延 江

経歴

昭和 13 年 4 月 12 日旭川生まれ。詩人。日本現代詩人会会員。北海道文学館評議員。北海道詩人協会。旭川詩人クラブ理事。旭川文学資料館副館長。北鎮友の会理事長。

詩集『湯の花』『花散りてまぼろし』ほか。

著書『旭川詩壇史』『北海道の碑』『旭川街並み今・昔』ほか。

なんと端正な美しさだろう。訪れる度にみつめるのが旭川を発し、東川の町を過ぎ旭岳温泉に近づくにつれくっきりと姿を現した旭岳の姿。

ここにどれほどの人を案内したことか、その度にわずか旭川から一時間少し、別天地の様に自然に囲まれ、そこに端正な美しさを見せる旭岳に感歎と羨望の言葉を浴びせられる。

大正 10 年 8 月 19 日、大町桂月は層雲峡から大雪連峰の山々を通常 4 日で縦走できるところ 6 日間かけて登り、松山温泉に着いた。

その時の登山記「層雲峡より大雪山へ」（大 12.8 中央公論所載）が詩文集『層雲峡四季』（昭 22.7 北の女性社刊）と『層雲峡—大町桂月記念号』（昭 27.6 大雪山調査会刊）に転載されているのを改めて読み返して今更のように驚かされた。

まず山に登るまで、旭川駅を発し、比布駅に降りてそこから層雲峡まで徒歩というから驚きである。通常の倍近くもかかったため、“行方不明”と新聞に報ぜられ一時は大騒ぎとなった。

私はこの登山記の冒頭の文ほど“大雪山”を表現するにふさわしい言葉を未だに見つかってはいない。

一富士山に登って、山岳の高さを語れ。

大雪山に登って、山岳の大さを語れ。

大雪山は北海道の中央に磅礴して、七八里四方の地盤を占め、

頂上の偉大なること、天下に比なく、群峯集って天を刺し、旭川の市街を圧す。—（後略）

大正 10 年、桂月の称賛した“大雪山”は、山ふところに住む人と街の宝であるまいか。

私が中学一年から 10 年ほどを過ごした石北線中愛別に母方の祖父の知人で、大正 12 年から黒岳の石室番をしていた皆木四郎さんという老人がいて、いつも聞かされていた大雪山の話と玄関にどっかりと置かれていた“黒岳”の焼き印の押した下駄の思い出。毎日ながめていた大雪連峰。それらが、今も季節ごとに私を旭岳の山裾に向かわせているのかも知れない。



北海タイムス
（大正 10 年 8 月 29 日発行）

ふるさとの山 大雪山の本

—大雪山国立公園 研究・文献集について—



佐藤 一 交

経歴

1975 年山形県庄内地方に生まれる。全国転勤による溪流釣りに憧れて 1995 年環境省に入省（入省当時は環境庁）。阿蘇くじゅう、大山隠岐、陸中海岸（現在は三陸復興）及び磐梯朝日などの国立公園に赴任し、2010 年東川自然保護官事務所に着任。

大雪山国立公園は日本最大の指定面積を誇る山岳公園であり、これまで様々な研究の対象地となってきました。しかし、その分野が多岐にわたることや広大な大雪山において行われた研究であったことからその成果は把握できていませんでした。数値的な比較は困難ですが、一つの国立公園でこれほど多くの研究が行われた場所は日本国内でも少ないのではないのでしょうか。多くの研究対象地となったことは、大雪山の自然環境が他に類を見ない特別な自然環境であることに他なりません。

これらの貴重な成果を地域住民や一般利用者が閲覧できるように大雪山国立公園連絡協議会※では、この研究・文献集作成に平成 22 年度より着手しており、平成 25 年度に完成します。

内容は鳥類、雪氷・気象、ほ乳類、植物、国立公園、地質、昆虫といった各カテゴリー毎に係る論文であり約 2700 件もあります。もちろん新規の論文も今後追加していく予定です。

この研究・文献集の収集という取り組みは他の国立公園では殆ど見られず、先駆的でユニークな取り組みです。また研究・文献集は次のような形で活用される可能性を持っています。

（１）国立公園の基礎資料

大雪山国立公園の公園計画変更や、今後世界自然遺産に係る検討を行う場合に、研究・文献集を基に対象とする自然資源の評価ができる。

（２）地域の魅力向上や新たなエコツアー創出のための素材提供

「こんな自然もある」「あんな生物もいる」といった知見を誰でも知ることができる。例えばエコツアーガイドが新たな話題のネタにして、国立公園の魅力を PR することができる。

（３）地元学校教育のための素材提供

近隣学校において、研究・文献集の知見を授業に取り入れてもらうなど環境学習の素材とすることができる。

（４）地域の郷土史編纂等の支援

各自治体での郷土史編纂や案内パンフレット作成の際、大雪山の自然に関する情報を効率よく網羅的に収集することができる。

なお、研究・文献集は学術論文の原著であり、難解な表現も多く一般的ではないことから、平成 26 年度以降に、最新の学術知見を抜粋し分かり易く表現した「アカデミックパンフレット」を作成することとしています。

※大雪山国立公園連絡協議会 大雪山国立公園の関係 10 市町で構成している協議会。

太田龍太郎の生涯



笹 川 良 江

経歴

笹川良江（太田龍太郎の直孫）1942年東京三田生まれ。東京の家政女学院卒。日本放送協会その他勤務。茶道教授。民生・児童委員（5期15年）。国勢調査員。2004年「大雪山国立公園」生みの親太田龍太郎の生涯を北海道出版企画センターから出版。道内4個所で太田龍太郎展を開催。新聞、テレビで紹介された。現在は、太田龍太郎研究家として50数年足跡の研究を続けています。東川町在住。
電話 0166 - 73 - 5268 携帯 090 - 2259 - 3053

私が12歳の時、神奈川県逗子で、父が病で亡くなりました。父が大切にしていた品の中から祖父の書いた本を、母の父がを見つけました。祖父太田龍太郎の「靈山碧水」という本です。私には、読めないのに、とても興味がありました。それから50年が過ぎ、私は2004年12月4日大雪山国立公園指定70周年の記念の日に「太田龍太郎の生涯」を出版しました。本の中には、明治44年東宮閣下（大正天皇）旭川行啓第7師団偕行社においてご覧賜った石狩川上流の靈山碧水（現層雲峡）の真影とその裏に太田の直筆の説明文、当時の石狩川上流探検の写真、書簡、新聞記事、掛軸など太田の生涯を祖父が残した手記を入れ年表化しました。復刊「靈山碧水」はルビを振って収録。太田龍太郎は文久3年～昭和10年（1863～1935）熊本藩勘定方の家に生まれ、後に国の役人となり九州から北海道まで各地で明治維新後の日本を夢中で築いた一人です。明治30年北海道庁長官官房秘書として道庁入り明治43年愛別村長（現愛別町・上川町）になり、鉄道敷設が必要と石狩川上流を探検しました。この地は断然一頭角を抜きん出て、国宝的大自然の真美と驚き北



海タイムス（現北海道新聞）に載せたところ土地払い下げ運動猛烈となり、ばらばらにはいけない、国家が保護すべきであると考え、「石狩川上流霊域保護国立公園経営ノ件」として、後藤新平逓信大臣兼鉄道院総裁に嘆願しました。「石狩川上流約10里四方の地域は、嚴重保護取締り一切個人及び団体名義を問わず、土地払い下げ絶対断然禁止さる可」と。これは、大雪山国立公園指定の23年前のことです。尚、鉄道は、旭川―遠軽間（石北線）。旭川―帯広間（石勝線旧士幌線と国道273の基礎）。愛別中越北見の滝之上の3路線が後藤新平総裁の承諾を得られました。そのことを「北海道の奥の院」と題し36回北海タイムス（現北海道新聞）連載。太田龍太郎の生涯の中の靈山碧水に紹介しています。世界遺産実現により、大雪山が後世まで守られるように願っております。私は、大雪山の主峰旭岳のある東川町に在住していることを主人と喜び満足しております。

松山温泉といった頃



鮫島 惇一郎

経歴

1926 東京に生まれる。
1947 北大札幌臨時教員養成所卒。
1950 北大理学部植物学科卒。
1955 同大理学部助手。
1956 農林省林業試験場に出向。
1964 同場育種研究室長。
1985 同林業試験場を辞職、自然環境研究室を設立主宰。

1948年の夏でありました。日高の山を終えて急いで黒岳石室までやってきましたが、館脇先生を親方とする「大雪山植物調査」の一行は、すでに前日出発したと聞きました。調査のお手伝いをする約束だったのですが、仕方ありません。明日早く追い掛けましょう。

どうやら化雲岳で調査中の一行に追いつきました。急に力が抜けてしまいました。日が改まります。今日は化雲岳から北へ広がる台地の調査です。お花畑あり、高山湿原あり、また巨大なネマガリダケの群生地です。歩いたり調査したり、結構骨がおれますが、やがて森林帯。文句をいいながら三十三曲がり、急流にかかる吊橋を渡ると松山温泉でした。

まだ天人峡などという洒落た名はありません。そしてこの日、宿屋はありましたが湯槽は露天でした。洪水で屋根が流されたというのです。でも青空を仰ぎながら広い湯槽に浸る気持ちは格別でした。野趣満々の山の湯！ もう70年近い昔の出来事です。

翌年になります。気の合った連中を連れて、層雲峡から旭岳を越えて勇駒別温泉です。白雲荘に一泊して松山温泉となります。それに今日は温泉から少し下った熊の沢あたりで運材のトラックに便乗できたのです。木材の上に揺られて旭川四条駅近くまで。ここから先は警察がうるさい？

からと車を下りることになります。でもありがたかったですね。

1950年に旭川で北海道博覧会がありました。その中に高山植物館があり、手伝いをするようになりました。期間中は生きた高山の花を見てもらおうという企画でした。面倒な制約のなか、何回も大雪山と旭川の街を往復することになるのです。やがて博覧会は閉幕となります。お役目解放？ の意をこめて、気楽に黒岳からトムラウシ山を訪ね、松山温泉へ下りる山旅を選びました。期待が勝手に膨らみます。温泉からはバス。東川から旭川までは旭川電気軌道の電車も待っているはずです。



松山温泉への吊橋 (1953.8-1)



ユコマンベツ白雲荘 (1953.8-1)



旭川電気軌道東川駅で (1950.9-2)

憧憬の大雪山ふたつ



清水 敏 一

経歴

1933 年／京都に生まれる

1964 年／北海道岩見沢に転住

所 属／山岳史家、日本山書の会会員

編著書／『大雪山文献書誌』全4巻、『小泉秀雄植物図集』『知られざる大雪山の画家・村田丹下』『大雪山の父・小泉秀雄』『山岳画家・加藤洵綾 - 歌と旅の人生 -』

『大町桂月の大雪山』

『松浦武四郎研究家 吉田武三私伝』



私にとって大雪山は遠く遙かな山であり、憧れの山でしかなかったが、北海道岩見沢に転住したお蔭で身近な山になった。初めて入山したのは昭和38年の大晦日、まだ湧駒別温泉と称していた頃で、もちろんロープウェイもあるはずがない。それでもバスは温泉まで入っていた。翌元旦、スキーにシールをつけて雪面をひたすら登る。姿見の石室にスキーをデポ、ピッケルとアイゼンをつけて強風のなか、氷結した尾根を登ること2時間、ついに最高峰旭岳の山頂に立つ。温泉から延べ6時間近くを費やしたが、憧れの山であっただけに感激もひとしおであった。

だがスキー初心者の私には、石室からの滑降という難行苦行が待っていた。滑っては転び、滑っては転びの連続で、意識の中では百回くらいは転倒したと思う。登りよりよほど疲れてやっとの思いで温泉に下山したのである。

2日、湧駒別からバスで旭川、またバスに乗り換えて層雲峡へ、流星・銀河の滝、大函小函の景観を楽しみ層雲峡泊。3日帰宅、3泊4日の山旅を終えたのである。初の大雪山、大滑降？とともに、今から思えば車もなく高速道もない、けれどもゆったりまったりの何とも悠長な山旅のよき時代を思い出すのである。

もうひとつはトムラウシ山、この山は大雪山系の最奥に位置し、更に遠い遙かな憧れの山である。時は昭和64年7月15日、56歳であった。マイカーを駆って一路天人峡へ。そこから曲折する急坂を一気に登りきり、羽衣の滝をうしろに緩やかになった尾根の登降をくり返しながら、ただひたむきに歩くのみ。化雲岳に至ってやっと登山者に会う。そして山頂への岩塊を登りきって12時30分、ようやく三角点の頂に立った。

休むまもなく下山、ほとんど一息に駆け下り、薄暗くなった天人峡着19時10分。行程往復33キロ、延べ15時間、こうして岩見沢からの1日往復計画を成し遂げることができたのである。同年1月の六甲全山縦走56キロより距離は短い、時間は長くかかったということは、やはりトムラウシは遠い山であった。

今ではもはや大雪山は憧れの山ではなくなった。手近な山であり、親しい山になった。だがそれは反面一抹の淋しさを覚えるのである。それでも私の数ある登山のなかで、このふたつの大雪山山行はひとときわ心に残る登山として、今も脳裏に深く刻み込まれていることに変わりはない。

偉大な大雪山と小さな私の接点



1957年、黒岳山頂付近にて

俵 浩 三

経歴

1930年、東京生まれ。千葉大学園芸学部卒業。1953～1959、厚生省国立公園部勤務。1959～1983、北海道職員として自然公園・環境保全行政に従事。1983～2001、専修大学北海道短期大学教授。1984～2008、北海道自然保護協会理事（1994～2004会長）。

主な著書、『北海道・緑の環境史』（北海道大学出版会、2008）、『牧野植物図鑑の謎』（平凡社新書、1999）、その他。

このたび東川町では大雪山に関する文献などを集積し、情報を広く発信する事業に着手したと聞きました。たいへん結構なことと思います。

私が初めて大雪山に登ったのは60年近くも前、当時の厚生省国立公園部レンジャーとして北海道（支笏湖）へ赴任した時です。その後の私は北海道庁で仕事をするようになり、大雪山・阿寒・支笏洞爺の国立公園などの業務が私の担当となりました。昭和30年代初めの道庁では毎年夏、一般市民を対象とする登山講習会を大雪山地域で開催しており、それも私の担当だったので、大雪山や十勝岳にしばしば登りました。



1979年、姿見池畔に立つ浩宮殿下と、その隣で展望を説明する私。この時の浩宮殿下は旭岳から黒岳まで縦走された。

個人的には札幌山岳クラブという会に所属し、休日は仲間とともに各地の山に登りました。当時は北海道の山岳案内書がなかったので、新しいものを編集しようということになり、私も手伝って大雪山を含む『北海道の山

々』（朋文堂、1960）が生まれました。その次に、私は北海道の国立公園などを中心とするガイドブックを頼まれたので、『北海道の自然美を訪ねて』（山と溪谷社、1963）を書きました。これは山と旅のガイドだけでなく、動植物など自然観察に役立つ情報も含めたことが特徴でした。

1979年には浩宮殿下（現皇太子）、1980年には常陸宮・同妃殿下の大雪山登山をご案内する機会にも恵まれました。私は1983年に道庁を退職して専修大学北海道短大で学生を教える立場になり、また北海道自然保護協会の理事にもなったので、大雪山地域を訪れる機会が増えました。とくに1990年前後は土幌高原道路計画が自然保護の大問題となったので、東大雪方面を訪れる機会が多くありました。

大雪山国立公園は日本最大の優れた国立公園です。国有林・道有林が多いので森林行政とうまく協調しながら自然保護を強化するとともに、健全な野外レクリエーション利用を心掛け、「大いなる自然遺産」を次の世代に引き継ぎたいものです。

夢を見たくなる東川からのささやき



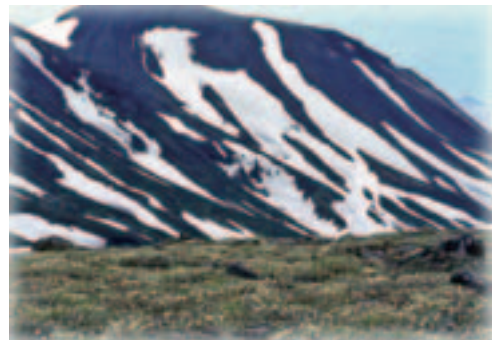
寺島 一 男

経歴

1944年北海道上川町に生まれる。13歳のとき初めて愛山溪から大雪山（永山岳）に登る。1980年厳冬期の記録としては初めて、大雪山国立公園を石北峠から富良野岳まで20日間かけて縦走。1972年大雪縦貫道路問題を契機に自然保護運動を始め、以後、石狩川の公害問題や大雪・日高・知床など北海道の開発問題に取り組む。大雪山講座「ひぐま大学」を主宰し、石狩川の野生のサケ回復運動に取り組んでいる。現在、大雪と石狩の自然を守る会代表。前北海道自然保護連合代表。

いい扉を開けたと思う。東川町の大雪山に関する文献書誌発信事業である。大雪山は傑出した自然と類を見ないスケールによって、昔から世の耳目を引き人々との深い関わりを生んできた。それだけに関係する資料も多い。大雪山系に係わる論文やレポートだけでも、少なくとも2700編は超えており、それ以外のジャンルの歴史や文学、記録や記事等々まで含めるとなると、その数はおそらく膨大なものになると思われる。そのすべてを収集し網羅することは、不可能とは言わないまでも至難の業である。

およそ関心のない人にとって、目録の類いほど味気ないものはない。だが、必要とする人にとってこれほど貴重で味わい深いものはない。大雪山に関する情報のまとまった拠点がないたため、ネットで探し、図書館にあたり、個人の情報に頼るしかない現状を考えると、このような企画が進むこと自体が素晴らしい。



だが、東川構想のもっと素晴らしいところは、利用者の便利さを図ることよりも、散逸し消滅しかかっている大雪山の知的遺産を保全して後生に残そうとしていることにある。同時に地域お

こしの新たな財産にしようとしていることにある。大雪山の旧来的な活用法は、ハード的な開発であった。けれどもこれは、ソフト面から大雪山を活用しようという新しいスタイルの試みである。

名もない人々の地域ならではの書誌も集められ、要約文もつけられて発信されるというから、これは何かの折りに訪れたいと思う人は増えるにちがいない。何よりも地元の人がこの財産を積極的に活用すれば、今度は地元の人自身が財産になる。

この財産を生かして地元の高校に、大雪山の自然遺産学科を設けてネイチャーガイドの養成を図れば、若者の定着にも大雪山の自然保護にも役に立つ。東川町は大雪山の恵みをもらって水も米もおいしく、景観や環境に優れるところから、移住する人も増えてこよう。この試み、いまは東川からの優しいささやきだが、やがて東川町を大雪山のメッカとする大きなエネルギーに変わるように感じてならない。

「大雪山昆虫誌」をまとめて

保 田 信 紀

経歴

1941 年生まれ。広島県呉市で育つ。元大雪山国立公園層雲峡博物館館長・学芸員（現層雲峡ビジターセンター）



50 周年登山、2011 年 8 月、黒岳山頂

1961 年 7 月、夜行列車と青函連絡で 2 夜を明かした 3 日目の夕方、初めて大雪山山麓の層雲峡に訪れた。大雪山での滞在はわずか 1 週間であったが、昆虫少年の頃からのあこがれであった高山蝶のウスバキチョウにも出会うことが出来たし、何よりも大雪山の雄大な青い連なりは私の心を永遠に捉えてしまった。

その後、上川町に移住した。幸い層雲峡登山事務所、層雲峡博物館に職を得ることができ、大雪山国立公園の自然の紹介や昆虫相調査のために、それこそ公私ともに豊かな自然の中で長年を過ごすことができた。

しかし停年間近になって、残念ながら体調を崩してしまい、これまでのような山岳地での調査が不可能になってしまったので、長年の懸案だった、「大雪山昆虫誌」のまとめにはいることになった。



ウスバキチョウ

基本方針としては、これまで収集していた既発表の資料から大雪山産昆虫目録を作成することであった。その結果、1922 年以降、2012 年度までの 91 年間に、短報を含めて 2295 編を超す報告がなされていることがわかり、大雪山国立公園とその一部周辺部から 25 目 414 科 6538 種の昆虫類が記録されていることが判明した。これは、現在北海道全地域から記録されている昆虫類の約 57% 以上が記録されていることになる。さらに私自身も長年の調査研究で多くの新種や日本未記録種の発見に恵まれ、大雪山の高山性フアウナに新知見のいくつかを加えることができた。大雪山の昆虫相の大きな特徴は、日本最大の高山帯にふさわしく、高山蝶のウスバキチョウで代表される氷期の落とし子ともいえる高山性昆虫が日本で最も豊かに生息していることである。

こうして現在「大雪山昆虫誌」をまとめてみると、やはり意図していたほどの充実した内容には至っていないと感じている。例えば、有名な大雪山には古から全国各地から多くの研究者や同好者が訪れており、その成果や情報などの発表された文献も全国各地に散在していると思われ、多くの貴重な文献も欠落しているかもしれない。さらに「大雪山昆虫誌」としてまとめたわけであるが、一部の分類群を除いては、情報不足と著者の不十分な能力のために詳しい現況を解説することが出来なかった。これらのことについては将来の研究にゆだねたいと考えている。そのため「大雪山昆虫誌」が今後の大雪山昆虫相のさらなる解明のための基礎資料の一つとなれば幸いである。

大雪山文献目録について

1、定義

ここに記載する大雪山文献目録（以下、文献目録という）は、大雪山域の文献を収録することを目的とし、以下の基準に従って収集したものである。

2、収録山域範囲

ここに記載する文献目録の山域範囲は、原則として十勝連峰、東大雪連峰を含む大雪山国立公園地域とするが、周辺地域を含むこともある。

3、収録年代

文献目録は近代以降、すなわち明治維新以降、現代に至るものとする。

4、文献目録の分類

収集した文献目録は次のように分類する。

1、総記

辞事典、図鑑類、書誌、地方史誌、講座、講演集など全般にわたるもので、2以下の分類に属さないものとする。総記は更に次のように分類する。

1－1、文献の総てが大雪山に関するもの。

1－2、文献の一部が大雪山に関するもの。

2、研究書

学者、研究者、専門家の自然科学に関する学術論文、研究報告、関係機関の調査報告書類とする。研究書は更に次のように分類する。

2－1、文献の総てが大雪山に関するもの。

2－2、文献の一部が大雪山に関するもの。

3、実録

事実をありのままに記したもので、登山記録、遭難記録、遭難報告書類、ドキュメンタリー、ノンフィクション類を含む。実録は更に次のように分類する。

3－1、文献の総てが大雪山に関するもの。

3－2、文献の一部が大雪山に関するもの。

4、人物誌

人物伝、人物史、人物研究、追悼録など、人物を主題としたものとする。人物誌は更に次のように分類する。

4－1、文献の総てが大雪山に関するもの。

4－2、文献の一部が大雪山に関するもの。

5、案内書

登山案内、自然案内、観光案内、花案内、案内小冊子など、初心者から熟達者までそれぞれを対象とした各種の案内ガイドブックを含む。案内書は更に次のように分類する。

5－1、文献の総てが大雪山に関するもの。

5－2、文献の一部が大雪山に関するもの。

6、図録類

写真集、画集、図集、画文集（図画が半数以上）、各種図録。イラスト、スケッチ、マンガ類を含む。図録類は更に次のように分類する。

6－1、文献の総てが大雪山に関するもの。

6－2、文献の一部が大雪山に関するもの。

7、文学書

小説、紀行文、エッセイ、詩集、歌集、句集、詞華集、アンソロジーなど、文学に関わるものとする。文学書は更に次のように分類する。

7－1、文献の総てが大雪山に関するもの。

7－2、文献の一部が大雪山に関するもの。

8、紙誌、部会報

新聞、雑誌、部報、会報、機関誌などの定期刊行物、もしくはそれに準じて刊行されているものとする。私的刊行物、不定期刊行物を含む。通常、紙誌、部会報における大雪山文献は、その一部なので次のように分類する。特集記事、連載、シリーズ物も同様である。

8－1、新聞紙面に大雪山関連の記事が掲載されているもの。

8－2、雑誌上に大雪山関連の記事が掲載されているもの。

8－3、部報、会報、機関誌などに大雪山関連の記事が掲載されているもの。

9、その他の文献

上記1～8に分類し難いものはその他の文献とし、次のように分類する。

9－1、大雪山に関する小冊子パンフレット類、絵はがき類（セット物、袋入り）、または複写物で、表題を付けて綴じてあるもの、もしくは袋に入れて表題を付け整理されているものとする。1葉の絵はがき、1枚のチラシ類は原則として含まない。

9－2、直接に大雪山文献とはいえないが、間接的に関連づけられるもの。

上記分類は、岩見沢市緑が丘 5-166「大雪山房」清水敏一さんをお願いしました。

総記

辞事典、図鑑類、書誌、地方史誌、講座、講演集など

1-1 総記（全てが大雪山）

001 大雪山のあゆみ

層雲峡観光協会 / 層雲峡観光協会
1965 / 291-ダ

層雲峡開拓時からの写真や大雪山に関わる書名、研究内容などの紹介。大雪山、層雲峡が開発されるまでの歴史が良く分かる。

002 大雪山及石狩川上流探検開発史

河野 常吉 / 大雪山調査會
1926 / 291-コ

大雪山に関する代表的な一冊。層雲峡開発に情熱を注いだ荒井初一が大雪山調査會長となって、大雪山と層雲峡を全国に広く紹介しようとあらゆる努力をしていた時に編纂された。体裁（約15cm×約9cm）は小さいが中身は濃い。

003 大雪山のお花畑が語ること

工藤 岳 / 京都大学学術出版会
2000 / 471-ク

様々な草木が美しく咲き競う夏山のお花畑。しかしそこは1年の大半を雪で覆われる極めて過酷な世界である。植物はいかに生き抜いているのか。可憐な花々の意外なしたたかさを鮮やかに描く。

004 大雪山の自然 2 高山植物

昆野 安彦 / 北海道新聞社
2003 / 471-コ

大雪山の高山植物の多様性とその生態について、様々な角度から論じる。また、北海道内と本州の植物、さらに北極圏の植物についても紹介し、日本の高山植物の成立要因や地史的背景にもふれる。美しいカラー写真を多数収録。

005 大雪山の自然 3 動物 昆虫

昆野 安彦 / 北海道新聞社
2004 / 480-コ

ほぼ写真集のような研究書と言ってよい。大雪山のマスコット、ナキウサギについての生態、特徴が写真と図によって詳しく、分かり易い。写真が多いので、これを見るとナキウサギに会いたくなる。動物、昆虫が数多く紹介され、ツヤクロヤマアリが蟻酸を使ってハンターとなる様子、巣に運ぶ時は解体までしてしまう手際が衝撃的。エゾシロチョウの幼虫（毛虫）にも衝撃を受ける。この幼虫は液体窒素-196℃の中に入れても1時間程度なら死なない。氷河期時代から現在に生をつなぐ生態に感動する。

006 大雪山の植物

館脇 操 / 林友會旭川支部
1949 / 471-タ

戦後の混乱期に、原始相が色濃く残る大雪山に3年間通って植物研究に没頭、広大な大雪山の植物を丹念に調べ、まとめた先駆的一冊。子弟らが大きな影響を受け、その後の植物研究の基礎となった。

007 大雪山の洗礼 四十年前の黒岳石室宿泊名簿

都竹 一衛（謄写） / 層雲峡観光協会
1965 / 291.43-S

層雲峡温泉街で営業していた菊谷清蔵が所有していた黒岳石室宿泊名簿（大正15年～昭和2年）に歴史的無限の価値を感じた都竹が謄写版で書き写し、複製が発行された。

008 大雪山の花

永田 芳男 / 文化出版局
1983 / 472-ナ

季節を追って春の足音、夏雲湧く、秋風立つなどの順に、一枚一枚に撮影日を入れた花紀行。大雪山に咲く約160種の花、実を紹介。

009 大雪山の花

山田 恵一 / 山と溪谷社
1990 / 477-ヤ

サブタイトルに「登山道から見られる153種」とあるように、一般的な花を選び、草原の花、礫地・砂礫地の花、湿原の花などに分け、和名の解説を載せることで花の名前を覚え易くしている。

010 大雪山文献書誌 第1巻

清水 敏一 / 清水 敏一
1987 / 291-シ

大雪山に関わる様々な文献を研究し、広く紹介することになった最初の本。著者は「私にとっての大雪山は、登山もさることながらこの山の文化史（探検、調査、研究、開発、登山など）に大いに関心がある」と文献書誌探索の思いを書いている。

011 大雪山文献書誌 第2巻

清水 敏一 / 清水 敏一
1988 / 291-シ

十勝岳爆発関係の書籍をはじめ、山の芸術誌・文芸誌「アルプ」の紹介とアルプに掲載された大雪山関係の記述目録、百山選書などを紹介している。

012 大雪山文献書誌 第3巻

清水 敏一 / 清水 敏一
1989 / 291-シ

三好文夫の詩画集「大雪山素描」、原田豊の

「仙峡の思い出」、北大山岳部部報（戦前編）などを紹介している。

013 大雪山文献書誌 第4巻

清水 敏一 / 清水 敏一
1993 / 291-シ

「層雲峡温泉小唄」「大雪山縦断行軍写真帖」、小説「大雪山」などを紹介している。著者の代表作でもある文献書誌シリーズは第4巻で終わっている。

014 大雪山物語

北海道新聞社 / 北海道新聞社
1985 / 291-ダ

北海道新聞社の朝刊旭川版・上川版で昭和59年4月から66回にわたって連載した記事に、大雪山ミニ百科、年表などを書き加えた。連載は大雪山国立公園50周年記念年に企画された。

015 大雪の高山植物

野呂 一夫 他 / 北海道新聞社
1978 / 471-ノ

野呂一夫、山口正弘、田村健太郎の3氏が5年をかけて撮った147種を紹介している。植生全体をとらえたものと、花や実をアップにしたものを組み合わせていて、分かり易い。

016 中央高地登山詳述年表稿
出典準拠 [増補]

吉田 友吉 / 吉田 友吉
1996 / 786-ヨ

営林局一筋で大雪山に精通し、嵐山の「北邦野草園」初代所長として活躍した著者が32年間に書き留めた中央高地の登山年表。[増補]の2年前にワープロ打ちの自家用年表を発表し、関係者からの「校正」を得て、増補版をまとめた。大雪山に関するもろもろの事柄を年表にした労作。

017 道博高山植物館と植物園

館脇 操 / 館脇 操
1950 / 606-タ

昭和25年、旭川で北海道大博覧会が開催され、その一画に高山植物館と植物園が造られた。高山植物は大雪山系から運び、役目を終えると大雪山系の元の位置に埋め戻された。責任者となった館脇が計画から完成、運営などを裏話を含めて書いた。コピー。

018 北海道の野生動物

小田島 護 / 北海道新聞社
1982 / 480-オ

エゾヒグマ、オコジョ、エゾモモンガ、エゾトガリネズミ、ゴマフアザラシ、サンショウウオなど、陸と海の哺乳類、爬虫類、両

生類を41種類紹介する野生動物の生態図鑑。

1-2 総記（部分が大雪山）

019 石狩川100話 石狩川治水100年の歴史をたどる

石狩川開発建設部 / 石狩川開発建設部
2010 / 517-イ

石狩川の歴史が分かる。川の名前、生活様式、橋、地形など。「大雪ダム」を写真入りで説明している。（文化交流館）

020 会誌北海道の自然
第1号～第50号総目次

俵 浩三 / 北海道自然保護協会
2012 / 519-タ

会誌発行50号の節目に創刊からの目次を網羅、会誌に掲載した内容が一目で分かる。大雪山に関する記述も非常に多い。

021 イララエカッチ 02

鎌田 明徳 編集 / GFA ワークショップ委員会、大雪と石狩の自然を守る会
2002 / 379-イ

大雪と石狩の自然を守る会が、小学生を対象にした自然体験学習「グリーンフォーラム」を1975年から始めた。2002年までの活動の歩みを一冊にまとめた。

022 かけがえのないきみだから
中学生の道徳3年 北海道版

清水 敏一 / 学研教育みらい
2011 / 375-チ

北海道郷土資料「大雪山の父 小泉秀雄」（北海道中学校道徳資料研究会）を掲載。1、命を失いかねないほどの重症を負っても、秀雄が調査研究を続けたのはどうしてだろう。2、幾多の困難があっても、秀雄はなぜ研究をあきらめなかったのだろうーを考える。

023 活火山・活断層

千葉 達朗 / 技術評論社
2011 / 453-チ

表紙に、「赤色立体地図でみる」「日本の凸凹」「逃げられない日本列島の宿命がリアルに浮かびあがる！」とある。日本全土の紹介で、北海道は十勝岳の赤色立体地図が載っている。（文化交流館）

024 原色野生哺乳動物

小田島 護 編著 / 家の光協会
1979 / 571-オ

北海道のヒグマから奄美大島のアマミノクロウサギまで、全国各地に生きる野生哺乳動物を紹介している。

025 国立公園シリーズ 1 ～ 23

国立公園 編 / 明文堂
1952 ～ 1967 / 291- コ

1 上信越公園、2 中部山岳、3 秩父多摩、4 十和田、5 霧島、6 大山、7 阿蘇、8 富士箱根、9 雲仙、10 吉野熊野、11 日光、13 伊勢志摩、14 大雪山、15 阿寒、16 支笏洞爺、17 瀬戸内海、18 西海、19 八幡平、20 伊豆、21 陸中海岸、22 白山、23 隠岐島根半島三瓶山。12 が欠。

026 山岳 総目次 (創刊号～第 1 号～第 33 号)

アテネ書房編集部 / アテネ書房
2001 / 786- サ

日本山岳会の機関誌「山岳」の創刊(1906 年)から 1916 年までの第 1 期全 11 巻の総目録。

027 志賀重昂『日本風景論』精読

大室 幹雄 / 岩波書店
2003 / 291- オ

岩波現代文庫の帯に「誇るべき国粹(ナショナルイテイ)の現実、明治期ベストセラーの解説・書下し」とある。

028 森林王国の復活

宮島 寛 編集 / 北方林業会
1999 / 650- ミ

北方林業会の 50 年に、「北方林業」に掲載してきた中から抜粋して編集した。台風 15 号による風倒被害、北海道に降る雪と本州に降る雪は違うというエッセーなど。

029 日本 200 名山

深田クラブ / 昭文社
1987 / 645- フ

深田クラブは、深田久弥の『日本百名山』を完登し、その精神と文学を受け継ぐことを目的として 1974 年に発足。大雪山、石狩岳、ニペソツ山、トムラウシ山、十勝岳などを紹介している。

030 日本地理大系 10 北海道・樺太編

山本 三生 編集 / 改造社
1930 / 291- ニ

昭和 5 年に発行された約 520 頁の分厚い事典。北海道の開拓、アイヌの暮らし、霊山碧水峡と呼ばれていたころの層雲峡など、地理、歴史などが写真、地図と共に著名な先人らの文章で解説されている。大雪山関係の貴重な写真も多数。伊藤秀五郎は旭岳の写真に添えて次のように解説している。「殊にこの山の夕映えは美しい。夕陽をうけると差しさうに俯向きながら、華かな薔薇色に染つて仕舞ふ。それは彼女が、いつも朝霧に膚を洗つてゐて、誕生幾萬年の今日も、まったく清浄無垢であるからだ」(抜粋)。

031 日本の高山植物

豊国 秀夫 編 / 山と溪谷社
1988 / 471- ニ

日本の高山植物 953 種類を徹底収録した山溪カラー名鑑。大きめの写真によって、花の姿形が分かり易い。

032 日本の国立公園 1 ～ 6

環境省 / 環境省
2008 / 291- ニ

1 利尻礼文サロベツ、2 知床、3 阿寒、4 釧路湿原、5 大雪山、6 支笏洞爺。大雪山は北海道の中央にそびえたつ大屋根として紹介。各シリーズの裏表紙に初代の東川自然保護官だった二橋愛次郎が書いた花の絵を載せている。洞爺湖サミットに合わせて作られた。

033 日本の自然公園 自然保護と風景保護

田中 正大 / 相模選書
1981 / 629- タ

第 5 章国立公園の中で大正 11 年、国立公園候補地 16 カ所に大雪山が入っていなかった、後から追加されたのが大雪山。「大雪山は保護すべき風景であって、開発に毒された国立公園運動に批判的態度を持っていたのであろうか」など、興味深い。

034 日本の樹木

林 弥栄 編 / 山と溪谷社
1985 / 653- ニ

山溪カラー名鑑の樹木編、1,446 種類を載せている。

035 ニッポンの滝 100 選

北中 康文 / 学研パブリッシング
2012 / 291- キ

著者が選んだ 100 の滝のトップに羽衣の滝の紹介が載り、「ニッポン人なら必見の名瀑 10 選」のひとつ。大雪山系は他に白銀温泉の白髭の滝、層雲峡の流星・銀河の滝。

036 日本の名山 1 大雪・日高と北海道の名山

第一アートセンター / ぎょうせい
1984 / 645- ハ

北海道の主な山の紹介で、研究者らの山に関する解説、登山記など。鮫島惇一郎が担当した「大雪山と石狩山郡(中央高地)」の項に、北海道の屋根といわれる大雪山らしく、山の高さを強調した立体イラストを載せている。九州・阿蘇まで、シリーズで全 12 巻。

037 日本の名山を考える

斎藤 一男 / アテネ書房
2001 / 641- サ

美しい山の自然を、私たちの祖国日本へ、

愛する子孫に遺してもらいたい。それが、本書を世に送る本来の目的である、と筆者は『はじめ』に書いている。

038 日本百名谷

関根 幸次、中庄谷 直、岩崎 元郎 / 白山書房
1983 / 291-セ

北は知床半島から南は九州屋久島の宮之浦川まで、代表的な 100 ルートの沢谷を紹介する。遡行図やコースタイム、装備や適期についてのアドバイスも収録。大雪山系はクワウンナイ川、トムラウシ溪谷。トップページに紅葉のクワウンナイ川の写真（梅沢俊撮影）。

039 日本百名峠

井出 孫六 編 / 桐原書店
1982 / 645-イ

道内は石北峠、美幌峠、狩勝峠を紹介。石北峠の項では蝦夷地の開拓、監獄囚徒の使役、洞爺丸台風と風倒木処理などの歴史が分かる。

040 日本の伝説 17（北海道の伝説）

更科 源蔵・安藤 美紀夫 / 角川書店
1977 / 388-サ

アイヌ伝承や義経伝説などを収めた。大雪山系のオプタテシケ山と雌阿寒岳は夫婦だったが別れてしまい、雌阿寒がオプタテシケに怒りの槍を投げつけたが肩をかすただけで済んだ。オプタテシケが槍を投げ返し、雌阿寒の中腹に当たり、そこから今も膿（硫黄）が出ている。（文化交流館）

041 北海道自然保護小史

俵 浩三 / 北海道自然保護協会
1977 / 519-タ

北海道自然保護協定会誌第 16・17・18 号別冊、国立公園雑誌第 331・332・342 号別冊に掲載したものを一冊にまとめた。

042 「新版」北海道の高山植物

梅沢 俊 / 北海道新聞社
2009 / 471-ウ

800 種以上を収録した高山植物の決定版、カラー写真は約 1,700 点と図鑑随一。（文化交流館）

043 北海道の高山植物と山草

伊藤 浩司 / 誠文堂新光社
1982 / 471-イ

北海道の植物 1,600 種から 630 種を選び、679 枚のカラー写真（梅沢俊ほか）と共に個々の植物を解説している。

044 北海道の百名山

道新スポーツ編 / 北海道新聞社
2000 / 291-ホ

道新スポーツに連載された百名山。旭岳を速水潔、赤岳を阿地政美、黒岳を保田信紀が担当、地元ゆかりの執筆陣となっている。

045 北方昆虫記

河野 廣道 / 楡書房
1955 / 486-コ

蝦夷ケ島時代の害虫、開拓に伴う昆虫相の変遷、アイヌが毒矢に用いた昆虫、昆虫のアイヌ名、大雪山の蝶など、読み物として面白い昆虫記。昆虫に関する古典ともいえる先駆的な一冊。

046 野外見分け図鑑 北海道の高山植物

梅沢 俊 / 北海道新聞社
1986 / 471-ウ

1986 年から 6 回も増刷されている程のポピュラーな北海道高山植物の図鑑。（文化交流館）

047 山と私たち ～北海道自然保護協会～

(株)北海道自然保護協会 / (株)北海道自然保護協会
1992 / 462-ヤ

「火山と湖」に旭岳と姿見の池、山の自然案内人として東川町在住、塩谷秀和らを紹介しているほか、「北海道の山の本」「高山植物」などを紹介。（文化交流館）

048 歴史の山 100 選

桜井 徳太郎 / 秋田書店
1974 / 291-サ

山の持つそれぞれの歴史を知って登ると、また違った目線で山を感じる。大雪山の項は今村義孝が執筆。大雪火山群にアイヌは神霊の威力を感じたことから神々の庭と呼び、赤く焼けた山肌の比布岳を雷神の天降るところと尊敬した一など、アイヌ伝承を紹介している。

研究書

学者、研究者、専門家の自然科学に関する学術論文、研究報告、関係機関の調査報告

2-1 研究書（全てが大雪山）

049 石狩川源流原生林総合調査報告 1952-54

石狩川源流原生林総合調査団 / 旭川営林局
1955 / 652-イ

松川恭佐を団長に植生班（館脇操、高橋啓二）、地質班（石川俊夫）、他に気象、虫害、菌害などの専門分野に分けた調査団が編成され、昭和 27、28 年度に総合調査が実施された。

- 050 **石狩川源流森林総合調査報告書**
日本林業技術協会 / 旭川営林局発行
1977 / 652- イ
石狩川源流地域の第2次(昭和48～50年度)調査報告書。
- 051 **石狩川上流高原温泉の植物**
館脇 操 / 北海道大学植物園研究報告
1969 / 472- タ
高原温泉地帯は高温の地熱によって冬も雪が解け、地面がむき出しの所がある。学術的にも景観的にも異色の地域を館脇をリーダーに鮫島淳一郎、伊藤浩司、佐々木太一らが調査した。当時は科学的に未記録の秘境だった。
- 052 **ウスバキチョウ**
渡辺 康之 / 北海道大学図書刊行会
2000 / 486- ワ
1. 研究史 2. 学名 3. 名称と由来 4. 系統分類 5. 形態と変異 6. 生活史 7. 食草と吸蜜植物 8. 死亡原因と天敵 9. 分布 10. 棲息環境と気候 11. 生態観察記録 12. 保護。
- 053 **エンレイソウ**
鮫島 惇一郎 / 北海道テレビ放送
1974 / 479- サ
エンレイソウは染色体の研究に適している。著者のライフワークともいえるエンレイソウ研究が詰まっている。HTBまめほん。
- 054 **高山蝶**
渡辺 康之 / 築地書館
1986 / 486- ワ
高山に生息している蝶についての生態が詳しく記されている。中でも大雪山のウスバキチョウについて仔細に深く研究している。
- 055 **山岳 第拾貳年第二・三號**
小泉 秀雄 / 日本山岳會事務所
1918 / 786- サ
小泉秀雄の「北海道中央高地の地学的研究」ですべてを埋めている。「山岳」は様々な人たちの山に関する寄稿で編集されてきたが、第12年(大正7年)の第2号、3号は合併号にしたうえで小泉の寄稿を特集した。つまり、大雪山の紹介特別編になったわけで、附録に大正6年製作の20万分の1地図があり、そこに「羽衣滝」の記載がある。
- 056 **大雪山系自然生態系総合調査
大雪山系現存植生図**
北海道生活環境部自然保護課 / 北海道生活環境部自然保護課
1981 / 462- ホ
北海道が北大に調査を委託した2年がかりの大雪山系自然生態系総合調査の一環として、植生図概説と植生図(I)(II)を作成

した。

- 057 **大雪山国立公園 研究・文献集**
大雪山国立公園連絡協議会 / 大雪山国立公園連絡協議会
2010～2013 / 519- ダ
大雪山国立公園連絡協議会が膨大な数に上る研究資料をまとめ、ファイルに綴じたもの。国立公園編①②、鳥類編①②、植物編①②③④、昆虫編①②③④⑤⑥⑦、雪氷・気象編①、地質編①②③④、ほ乳類編。大雪山に多くの研究者が訪れ、広大な山で様々な研究を続け、発表していることが研究資料の分厚さからうかがえる。大雪山は自然の雄大さもさることながら、人がかかわる文化の面でも豊かな宝庫となっている。
- 058 **大雪山水系及び洪水の研究**
中谷 宇吉郎 他 / 農業物理研究所
1950 / 452- ナ
財団法人農業物理研究所が昭和21年から道内各地で調査、研究してきた報告書のうち、大雪山系の水資源に関する研究、忠別川の出水及び氾濫に関する研究、石狩川の洪水に関する研究を選んで一冊にまとめた。
- 059 **大雪の蝶**
田淵 行男 / 朝日新聞社
1978 / 486- タ
ウスバキチョウ、ダイセツタカネヒカゲ、アサヒヒョウモン、クモマベニヒカゲ、カラフトルリシジミ、大雪山の代表的な5つの蝶の生態写真集、解説書。チョウに関する優れた研究と見事なまでの写真は、この分野での古典的な傑作。研究書としても日本を代表する一冊。箱入り。
- 060 **風災 1400 萬石**
上川営林署 / 上川営林署
1955 / 654- フ
上川営林署の経営のしおりNo.Ⅲ。大雪山の洞爺丸台風被害を写真、図などで詳細に解説している。
- 061 **北海道中央高地の高山植物**
館脇 操・鮫島 惇一郎 / 北海道大学農学部附属植物園
1959 / 471- タ
大雪山は、高山植物の研究上、まことに注目すべきところであり、小泉秀雄以来の調査を総括したうえで、報告がまとめられた。
- 062 **北海道の森林風害記録**
北海道森林風害記録作成委員会 / 北方林業会
1959 / 654- ホ
昭和29年、5月の暴風と9月の台風15号による林業被害と処理報告、保護施策をま

とめた。大雪山は台風で大きなダメージを受けており、森林が復興してきたのはこのときに林業に携わった大勢の方々の力による。

2-2 研究書（部分が大雪山）

063 原色蝶

渡辺 康之、小田島 護 / 家の光協会
1980 / 531- ワ

日本で記録された蝶類は、およそ 230 種類で、その大部分はめったに一般の目に触れることがない。176 種類を生態写真で紹介している。

064 国立公園成立史の研究

村串 仁三郎 / 法政大学出版局
2005 / 629- ム

日本の国立公園制定史の考察を通じて、開発と自然保護の確執の歴史を解明し、国立公園がもっている法的な弱点がどのように形成されてきたかを明らかにする。巻末に 50 音順の人名索引、事項検索があり、「太田龍太郎」「大雪山」などがどのページに書いてあるか確認し、拾い読みができる。

065 国立公園の法と制度

加藤 峰夫 / 古今書院
2008 / 629- カ

日本の国立公園の特徴や公園地域の指定と管理、「地権者」の権利と義務、国立公園を利用する際の「ルール」などを解説。現在の課題と将来の方向性についても取り上げる。参考資料として、国立公園と国定公園一覧を掲載。

066 日本活火山総覧（第4版）

気象庁 編 / 気象庁
2013 / 53- ニ

I 北海道・東北、II 関東・中部・伊豆・小笠原、III 中国・九州・沖縄・北方領土の 3 冊。DVD 付き。口絵に 1988 年 12 月 25 日の十勝岳噴火、火砕流が載っている。「常時観測火山」対象の大雪山や十勝岳の詳細を記載しているのをはじめ、気象庁がまとめた火山詳報。

067 日本の重要な植物群落 北海道版

環境庁 / 大蔵省印刷局
1980 / 471- カ

緑の国勢調査ともいわれる第 2 回自然環境保全基礎調査の特定植物群落調査の報告書。大雪山高山植物群落など。

068 日本風景論

志賀 重昂 / 文武堂
1948 / 291- シ

風景について学問的に考察、論じた日本で

は最初の本。地理学から見た日本の風景だけではなく、文学、生活、歴史などあらゆる分野から風景を考える。中でも「登山の気風を興作すべし」は当時の山岳界に大きな影響を与えた。

069 日本風景論

志賀 重昂 / 岩波書店
1995 / 291- シ

文庫版。

070 日本名勝地誌 第9編 北海道之部

松原 岩五郎 / 博文館
1899 / 291- マ

ヌタクカムシュペと呼ばれていた山に、大雪山と名付けたのが松原岩五郎で、この本はまさに歴史的な一冊。108 頁にだいせつざん、109 ページにたいせつざんと振り仮名が二通りあり、今もだいか？ たいか？ 濁るのか濁らないのか、論議の種になる。鳥取県西部、現在の淀江町（よどえちょう）で生まれ育った岩五郎が、ふるさとの山、大山によく似ている、雪に覆われた「大山」という意味で「大雪山」と名付けたと伝えられている。

071 北大選書 北海道の自然保護 その歴史と思想

俵 浩三 / 北海道大学図書刊行会
1979 / 519- タ

北海道の自然保護を歴史を追って詳細に書いた一冊。国立公園の展開の項では、大雪山が当初、候補地となっていなかったものを、道庁が独自に「北海道ニ於ケル国立公園候補地調査概要」をまとめた際、大雪山の景観が付記されたことなど興味深い史実を書いている。

072 北海道・阿寒・大雪山国立地区観光診断報告書

日本観光協会 / 北海道
1962 / 689- ホ

北海道が日本観光協会に委託した報告書。大雪山国立公園の課題は、山岳地帯の全貌が一般観光客に知られていないことであり、縦貫観光道路の必要性、ロープウェイの魅力と必要性を説き、天人峡の兩岸の絶壁の上の台地にエレベーター等の昇降施設を設けて台地の開発をすべきと提案している。

073 北海道の火山

高橋 正樹・小林 哲夫 / 築地書館
1998 / 453- ホ

火山の地形と構造を知るのも山の見方が変わる。十勝火山群の登山コース・地図があり、「チャレンジして損はありません」と。（文化交流館）

074 北海道の地震と津波

笠原 稔、鏡味 洋史、笹谷 努、谷岡 勇市郎 / 北海道新聞社
2012 / 453- カ

書名から大雪山と関係ない一冊に思われるが、十勝岳の爆発地震がある。火砕流、火砕サージをシャンパンのコルク栓にたとえて説明するなど分かり易い。

075 北海道の活火山

勝井 義雄 ら共著 / 北海道新聞社
2007 / 453- ホ

道内の活火山の噴火暦、特徴、今後の注意が詳しく記されている。美瑛の丘は十勝岳大規模噴火の火砕流跡、層雲峡や天人峡の柱状節理も噴火による。(文化交流館)

076 北海道の自然と生物 1 ～ 10

西島 浩 代表編集員 / 樞書店
1989 ～ 1996 / 405- ニ

創刊号に、俵浩三が「国立公園の保護と利用の原点を探る」として、大雪山国立公園をさまざまな角度から検証している。第10号で終刊となった。4欠。

077 北海道の自然保護 その歴史と思想

俵 浩三 / 北海道大学図書刊行会
1990 / 919- タ

「自然をみる目」から書き起こし、「産業・観光開発優先から自然保護優先へ」まで著者の思いが貫かれ、本書の第1刷で国立公園協会が創設した第1回田村賞を受賞している名著。米国でホント、ウソの話題となった大雪山国立公園の「樹霊碑」のエピソードや、大雪山が国立公園となるまでの歴史的な論争などを紹介している。1979年第一刷の増補版。

078 緑の文化史

俵 浩三 / 北海道大学図書刊行会
1991 / 518- タ

副題に「自然と人間のかかわりを考える」とある。人間は自然なしには生きられないと説く筆者が、ベリーの黒船と植物ウォッチング、コロンブスの贈物(植物)、霧島で伐採された東大寺の柱など、古今東西の緑の文化史を書いた。国立公園の項で霊山碧水の国立公園化を進言した太田龍太郎を紹介。土地の私有化を抑え公共性を優先する、いわば自然保護重視の『大雪山型』と国立公園の一つのパターンを定義している。

実録

登山記録、遭難記録、遭難報告書類、ドキュメンタリー、ノンフィクション

3-1 実録 (全てが大雪山)

079 旭岳

北海道学芸大学函館分校山岳部 / 北海道学芸大学函館分校遭難対策委員会
1963 / 786- ア

昭和37年12月30日から38年1月1日に至る間に10名が犠牲になった旭岳遭難の捜索報告書。遺族、山岳部員らによってまとめられた。山での遭難がいかに過酷かを伝える貴重な報告書。

080 いのちの代償

川嶋 康男 / ポプラ社
2009 / 787- カ

「凍れるいのち」を文庫化した。遭難事故の全貌を軸に構成を組み替え、巻末に生き残ったリーダー、野呂幸司が「最善を尽くして人生を全うせよ」のエッセイを寄せている。

081 大きな自然 大雪山

林 明輝 / 小学館
2008 / 748- オ

巻末の「大雪山での挑戦」に林明輝(りん・めいき)は「テクニックだけでは写し取ることのできない大きくて厳しい風景と向き合いたい。体力と気力の限界への挑戦」と書いている。

082 検証 士幌高原道路と時のアセス

北海道新聞社編 / 北海道新聞社
2000 / 519- ケ

本の帯に「道路か自然保護か、揺れた30年」とあるように、大雪山国立公園に道路を通そうとしたものの、道庁の「時のアセス」で公共事業見直しに至る詳細を記述した一冊。

083 凍(しば)れるいのち

川嶋 康男 / 柏艚舎
2006 / 786- カ

昭和37年12月、北海道学芸大学函館分校山岳部のパーティー11名は大雪山縦走を成し遂げる寸前に旭岳で遭難、部員10名が死亡。帰還したのはリーダーただひとり、45年間の沈黙を破り、著者の聞き取りに遭難事故の全貌を語った。

084 大正15年十勝岳大爆発記録写真集

上富良野町郷土館 / 上富良野町
1980 / 369- ト

生々しい被災現場、泥流に埋まった家屋や犠牲者、多くの救援隊、捜索の状況など十勝岳爆発災害写真展で展示された150点を

収めている。本の中に大正 15 年 5 月 26 日付の貴重な北海タイムス紙が保存されている。(文化交流館)

085 大雪山観光道路

上川町 / 上川町
1959 / 291- ダ

銀泉台まで行くバス道路が開通したことを喜ぶ上川町発行の 19 ページの冊子。当時の町長、野田晴男の「老人、子供の登れる大雪山へ」という思いが冒頭に載っている。

086 大雪山の動物記

桑原 康彰 / 東京読売サービス
1996 / 482- ク

第二部「大雪山の動物・体験記」に旭岳温泉奥地で銀色の毛をしたヒグマ、熊の沢では金色の毛をしたヒグマ、「世にも珍しいクマを獲る」体験記(古川良男)が載っている。

087 大雪山のナキウサギ裁判

大雪山のナキウサギ裁判を支援する会 編 / 緑風出版
1997 / 519- ダ

表紙裏の要約に、「大雪山国立公園は、日本で数少ない原生的自然が残り、氷河期の生き残りといわれるナキウサギの日本最大の生息地である。そこがいま、無用な高原道路計画によって危機に瀕している」と書いてある。生態系の保護、生物多様性の保護を訴える一冊。

088 大雪山のヒグマ

小田島 護 / 山と溪谷社
1982 / 489- オ

アイヌが「神々が遊ぶ庭」カムイミンタラと名づけた通り、大雪山は太古より多くの生命を育む野生の王国である。著者らがK子の愛称で呼んだ母グマとその子グマを通して、愛情あふれるクマの生態と、雄大な大雪山の四季を生き生きと伝える。

089 大雪山花の道 エゾコザクラに逢いたくて

駒井 千恵子 / 枳の葉書房
2005 / 291- コ

著者は、大雪山に初めて登ったときにエゾコザクラと出会い、可憐でつつまじやかな花の小道が楽しくて、その後も通いつめた。高山植物の花を観るための登山ルートとスポットを紹介している。

090 大雪山ヒグマ物語 ヒグマとの共存の道を探る

小田島 護 / 創隆社ジュニア選書 9
1991 / 489- オ

著者と学生らが高根ガ原などで観察を続けたヒグマの親子、最初に発見した近くにK点と呼ぶ観察地があったことから母グマの愛称をK子とした。写真、図解を豊富に挿入している。K子のとりことなる一冊。

091 追憶 大雪山で大砲を撃った兵の鎮魂譜

石原 二三朗 / 石原 二三朗
1991 / 916- イ

昭和 17 年 8 月、北部軍砲兵幹部教育隊の大演習が大雪山系で繰り広げられた。兵士たちの思い出の記であり、迫撃砲を撃つシーンなど大雪山中演習の数多くの写真が収められている。

092 天上を翔る川

松本 司 / 渡辺出版
2011 / 748- マ

石狩川源流をとらえた風景写真群に、脳梗塞を克服した著者が詩と書き下ろしのエッセーを合わせて、自らの魂の軌跡として構成した。

093 トムラウシ山遭難はなぜ起きたか

羽根田 治 ら共編 / 山と溪谷社
2010 / 786- ト

2009 年 7 月、18 人のツアー登山のうち 8 人が死亡したトムラウシ遭難を関係者の証言集、気象の検証、低体温症や運動生理学の面から、それぞれの専門家が分析、低体温症と事故の教訓としてまとめた。(文化交流館)

094 トムラウシ山遭難はなぜ起きたか

羽根田 治 ら共編 / ヤマケイ文庫
2012 / 786- ト

文庫本。巻末に「中高年登山者と低体温症」の解説を載せた。(文化交流館)

095 風倒 風倒木処理終了記念

上川営林署・上川町 / 上川営林署・上川町
1959 / 655- フ

昭和 34 年 9 月 26 日に風倒木処理終了記念式典が行われ、その日に合わせて編集、発行された 20 ページの冊子。非売品。

096 冬山

速水 潔 / 北海道新聞社
1980 / 786- ハ

冬山が臨場感あふれる文章で綴られている。雪崩による事故現場で遺体の回収作業、凄惨な現場の雰囲気が伝わってくる。著者自身も雪崩で危ない目に遭っている。冬山を目指す人の必読書。「氷中に咲く花」の項で白雲荘、工藤虎男ら勇駒別とゆかりの人物が登場する。

097 野生のヒグマ：母グマK子の記録

小田島 護 / 中西出版
1988 / 571- オ

大雪山の広大な原生林に生きるヒグマK子の愛と感動のドラマ。クマに対するイメージが変わる一冊。

098 霊山碧水

太田 龍太郎 / 植村 外三郎
1934 / 237- オ

太田龍太郎は明治43年秋、石狩川上流を探検し、「霊山碧水」の題で北海タイムスに5回連載した。同年初冬の北見地方踏査日記、翌年初冬に敢行した上川から十勝へ山越える前代未聞の冒険記「北海道の奥の院探検」（北海タイムス連載）をまとめ、有名な「石狩川上流霊域保護国立公園経営の件」も収めた古典的な一冊。

3-2 実録（部分が大雪山）

099 アイヌ語地名で旅する北海道

北道 邦彦 / 朝日新聞出版
2008 / 291- キ

大雪山は和名の山が多い。筆者は「アイヌには登山の趣味はなかった。山は神聖なものであり、頂上は踏むということは考えられないことだった。山は通路として使う川の水源にそびえる、敬うべきものだった」と解説する。

100 アイヌの世界

瀬川 拓郎 / 講談社選書メチエ
2011 / 382- セ

著者は旭川市博物館職員。第8章アイヌモシリ一万年の景観史の中で、大雪山は上川盆地のどこからでも見えるランドマークであり、熊も多く授けてくれる獵場だったので、祈りの対象（チノミシリ）となり、上位の者が祈ったなどと紹介している。（文化交流館）

101 井手貢夫随筆集 その一
私の山・旅・友

井手 貢夫 / 朝日出版
1983 / 914- イ

ドイツ文学者の著者の随筆をまとめた。「大雪山の広大な高原や湿原を埋めて咲く花の

豊富さと種類とは、世界に誇り得る大観である」「ユコマンベツや層雲峡からの登りよりも、愛山溪の登りが一番好きだ」など、大雪山の記述が多く、旭岳ヒグマの遭遇もある。

102 石笛：佐々木典夫君追悼誌

北海道教育大学函館分校山の会 /
北海道教育大学函館分校山の会
1973 / 289- イ

昭和38年1月の教育大学函館分校山岳部の旭岳遭難に、留年してまで、仲間の為に捜索にあたったのが佐々木典夫。2年後、横津岳で遭難、後輩をかばうようにして山に死んだ。彼を慕う人々が7回忌の節目に追悼誌を発行。悲しくて胸が熱くなる一冊。

103 神々の遊ぶ庭 北の自然は今

北海道自然保護協会編 / 築地書館
1987 / 519- カ

北海道の自然について自然保護と開発の面で検証する一冊。寺島一男が「神々が遊ぶ庭（カムイミンタラ）はいま」の題で、大雪縦貫道路と住民運動を書いている。

104 北国の動物たち4 エゾシカの森

永田 洋平 / 偕成社
1980 / 480- ナ

表題の「エゾシカの森」のほか6編の野生動物物語が収められており、「軍犬リユー」編は昭和19年、旭川に司令部をもつ北部軍が大雪山で軍事訓練を行った実話。著者自身が軍犬を育てた軍人。戦後、著者はリユーと共に弟子屈の原野を開拓、動物作家として執筆を続けた。

105 原野から見た山

坂本 直行 / 茗溪堂
1974 / 291- サ

菓子の六花亭が著者の美術館を持ち、包装紙に著者の草花の絵を使っているのも、お菓子から著者を知った人もいるはず。黒岳石室の小屋番、大久保と愛犬「般若の五郎」の逸話など、スケッチを交えた飾り気の無い紀行文。

106 最暗黒の東京

松原 岩五郎 / 岩波文庫
1980 / 368- マ

大雪山の名付け親で知られる松原岩五郎が書いたノンフィクション。日本が最初の資本主義恐慌を経験した明治中期、生活困窮者の社会に潜入して書いた。巻末の解説（立花雄一）に大雪山命名のいきさつが書かれていて、むしろ、この解説があるおかげで大雪山命名の経過が世の中に知られるようになった。

- 107 **新版 ガイドブックにない
北海道の山々**
八谷 和彦 / 北海道新聞社出版局
2006 / 291- ハ
道内の標高 1,000m 以上の全山登頂を達成した著者が 80 の山を選び「どんな山、登頂ルート、登山記録から」を書いた。大雪山は後旭岳、熊ヶ岳、小旭岳、凡忠別岳、シビナイ岳、前トムラウシ山など。
- 108 **新編・山 紀行と随想**
大島 亮吉 / 平凡社ライブラリー
2005 / 786- オ
昭和 5 年に岩波書店から刊行された「山研究と随想」や慶應義塾大学体育会山岳部の「登高行」などを底本にして、新たに構成した文庫本。文字表記を新字、新仮名に改めて読み易くした。「北海道の夏の山」を収録。
- 109 **森林復興の軌跡 洞爺丸台風から 40 年**
よみがえった森林記念事業実行委員会事務局
1995 / 654- シ
巻頭の写真は洞爺丸台風の惨状、大雪山の森林被害。風倒木処理、森林施業の詳細、座談会を収録。大雪山のほか樽前山麓、北見、函館など全道の被害と復旧も。
- 110 **スキー場はもういない**
藤原 信 編著 / 緑風出版
1994 / 519- フ
美瑛富士に持ち上がったジャパンヘルシーゾーンのスキー場開発計画が立ち消えになっていく経過など、道内のスキー場開発と自然保護を検証する一冊。
- 111 **大雪山のふもとから
ある山村の四季と暮らし**
渡辺 崇彦 / 農山漁村文化協会ルーラルブックス
2006 / 382- ダ
小学校 6 年生の目線で白滝村の生活を記している。たわいも無い毎日の生活だが、便利な今とは違って何をするにも努力と工夫の連続。北見峠に駅通があったことなど、開拓史も分かる。(文化交流館)
- 112 **大雪山の四季 精霊の大地から**
塩谷 秀和 / 実業之日本社
1998 / 291- シ
著者は、大雪山の麓で暮らしたいと東川に移住 (1979 年) し、ネイチャーガイドとして活躍する。精霊の大地で起きていること、育まれる命などを 49 のタイトルで紹介。「森を育てるものたち」では、エゾリスがドングリやクルミの実をそこら中に埋めて隠し、やがて芽をふく。「カエルとサンショウウオ」「樹の精霊モモンガ」、一話が見開きページに収まっていて、どこから読んでも面白い。(文化交流館)
- 113 **愉しき山脈**
高澤 光雄 / 北海道出版企画センター
2012 / 290- タ
クウンナイ川遡行の「遭難寸前の大雪山」という思い出や、高校 3 年の旭岳登山では天人峡温泉、佐藤門治に助けられ、勇駒別で工藤虎男、速水潔らと知り合うなど、さまざまな山仲間との出会いを書いている。(文化交流館)
- 114 **地球大百科 生きている森 7
クマの王国**
生きている森編集委員会 / ぎょうせい
1989 / 650- チ
「地球大百科 生きている森」シリーズ (全 11 巻) の 7。ヒグマの生態、習性、人との関わりなどを、大雪山にすむ 6 歳のヒグマ「ウッデイ」を主人公に冒険物語として進める絵本。北海道大学ヒグマ研究グループの特別座談会「クマってすごいヤツだ」が巻末にある。(文化交流館)
- 115 **忠別川と共に生きて
忠別川ダムふるさと誌**
忠別ダム記念誌刊行委員会 / 北海道開発局・旭川開発建部忠別ダム建設事務所
1987 / 517- チ
旭岳のふもと、美瑛町忠別と東川町野花南は、忠別ダム建設によって地域の歴史を終えた。気候も環境も厳しい山の麓での壮絶な開拓生活が書きつづられ、語られている。天人峡や勇駒別の入り口ともなっていて、温泉へ馬そりで荷物の運搬など、重要な基地的拠点でもあった。(文化交流館)
- 116 **忠別川は秘めている**
赤松 勉 / 旭川富貴堂
2006 / 289- ア
北海道開拓の実話。赤松家の人生のドラマが熱く響き、今の生活は先人の苦労と辛さから成り立っていることに心を打たれる。(文化交流館)
- 117 **日本の溪谷 '96**
白山書房編集部 / 白山書房
1996 / 291- ニ
大雪山関係は天人峡から入るクワウンナイ川本流遡行記 (岸川祐子) のみ。女性二人が滝の瀬十三丁目を経てヒサゴ沼キャンプ場まで登る。

118 氷河時代の置き手紙

丹治 茂雄 / あかね書房
1994 / 456- タ

大雪山の豊かな自然は氷河時代が残した“置き手紙”。手紙にはどんなことが書かれているのか。大雪山に登り、アラスカやカナダに旅して、自然の謎を研究していく。

119 北海道 自然と人と

八木 健三、辻井 達一 編著 / 築地書館
1985 / 402- ヤ

北海道自然保護協会で活躍している主要メンバーが共同執筆した。大雪山は地形的・植物的交差点に位置する、カムイミンタルの成立（北大農学部助教授・辻井達一）、など自然と人との交流が主題。

120 北海道登山記録と研究

高澤 光雄 編 / 札幌山の会
1995 / 786- タ

札幌山の会が一つの頂上を目指し、尾根道を、沢を会員と一緒に登る「大雪山（夏山集中）沢の記録」、大雪山・石狩川源流探検史など。

121 北海道の自然 ヒグマ

犬飼 哲夫、門崎 允昭 / 北海道新聞社
1987 / 489- イ

I クマの進化と分布、II ヒグマの身体と生態、III アイヌ民族とヒグマ。昭和24年に起きた大雪山ヒグマ事件など人とヒグマの遭遇、アイヌ民族の伝統的な熊猟など、熊研究の第一人者が詳細に書いた一般読者向け解説書。

122 北海道の登山史探究

高澤 光雄 / 北海道出版企画センター
2011 / 786- タ

北海道の山岳記録を永年にわたり探究し、執筆を重ねてきた著者の思い入れ深い16編を選んで収録。江戸期から昭和まで、登山の足跡をたどる一冊。

123 山 研究と随想

大島 亮吉 / 岩波書店
1930 / 786- オ

大正、昭和初期に登山家として活躍した大島亮吉は昭和3年3月、前穂高で墜落死した。遺著として2年後にこの本が発行された。有名な「石狩岳より石狩川に沿ふて」も収められている。大正9年7月21日から31日までの登山記で、行程は旭川～美瑛駅～松山温泉～クッウンナイ～トムラウシ～スタブヤムベツ～石狩川～石狩沢～石狩岳～ユーニイシカリ岳～ユーニイシカリ～ホロカイシカリ～大箱～層雲別温泉～留辺志部。

124 山 随想

大島 亮吉 / 朋文堂（コマクサ叢書）
1958 / 291- オ

昭和5年に岩波書店から発行された「山研究と随想」の復刻版。研究的記述を割愛、随想だけを収録した。

125 山 - 随想 -

大島 亮吉 / 中央公論社
1978 / 786- オ

大島亮吉の50年忌に中公文庫として発行された。「石狩岳より石狩川に沿うて」「北海道の夏の山」「北見峠」を収録。

126 山と彷徨

丹 征昭 / 工房あうる
1970 / 291- タ

天人峡から化雲岳の尾根を登って、初めてトムラウシ山へ行ったとき、ノドが焼けるような渇きとなった顛末を「小さな湿原」として書いている。ほかに大雪山への思いを寄せている点描多数。限定800部発行、巻末にナンバーが振ってあり、東川町保存は546番。

127 山の仲間と五十年

高澤 光雄 編集 / 秀岳荘
2005 / 786- タ

北海道の山の店、秀岳荘が創業50年に発行した。温泉を発見したトムラウシ川上流の旅（山崎英雄）、大雪山縦貫道路と扇沼山（寺島一男）など。巻末に北海道登山史年表。

128 山ふたり

三輪 敏広・三輪 和恵 / 春風社
2011 / 291- ミ

多発性骨髄腫と診断された著者と妻和恵の登山日記。北海道・東北・九州の登山。大雪山の登山も時間をかけての移動、ガイド内容も濃い。「山夫婦」って素晴らしい。（文化交流館）

129 よみがえった森林を未来へ託す 洞爺丸台風から50年

洞爺丸台風森林被害復興50周年記念事業実行委員会事務局
2005 / 654- ヨ

洞爺丸台風森林被害復興50周年に記念事業が実施され、記念誌が発行された。パネルディスカッション、高校新聞・放送コンクール審査結果などを載せている。

人物誌

人物伝、人物史、人物研究、追悼録など

4-1 人物誌（全てが大雪山）

130 大町桂月の大雪山

清水 敏一 / 北海道出版企画センター
2010 / 786-シ

富士山に登って、山嶽の高さを語れ。大雪山に登って山嶽の大きさを語れ。この名文で始まる「層雲峡より大雪山へ」の紀行によって、大雪山の雄大さを全国に広めた大町桂月。国民的文士・桂月のドラマチックな登山と彼の辿ったルートを追跡、再現し、検証。同行した人たち、関わった人たちの動向と人生を追ひ、その人物像に迫る。

131 知られざる大雪山の画家・村田丹下

清水 敏一 / 北海道出版企画センター
2003 / 289-シ

大雪山を描いた画家、村田丹下の生涯を詳しく書いた一冊。大町桂月が層雲峡から登って天人峡へ縦走した際に同行したひとりでもあり、その時のスケッチを屏風絵に仕上げた。層雲峡開発の功労者・荒井初一との出会い、童謡作家・野口雨情と黒岳石室一泊なども分かる一冊。

132 「大雪山国立公園」生みの親
太田龍太郎の生涯笹川 良江 / 北海道出版企画センター
2004 / 289-オ

石狩川上流霊域を国立公園経営とすべきと明治政府に訴えた愛別村長、太田龍太郎の孫である著者が、祖父の書いた「霊山碧水」を読み易い活字で復刊。年表や写真資料を多数収録。著者は祖父の愛した大雪山の近くで暮らしたいと、夫妻で東川町に移住した。

133 大雪山の父・小泉秀雄

清水 敏一 / 北海道出版企画センター
2004 / 289-シ

小泉秀雄は大雪山研究のパイオニアとして知られ、小泉岳は彼の偉業を永遠に遺し、伝える山名。誕生120年、没後60年の年に小泉研究の第一人者である著者が山と植物一筋に駆け抜けた生涯を活写する。大雪山や植物にかける情熱と、研究の几帳面さ、真面目さがわかる。家族、人間関係も詳しく記されている。

134 大雪山の父・小泉秀雄

清水 敏一 / 北海道テレビ放送
1996 / 281-シ

小泉秀雄の生涯とその業績について簡潔にまとめた。手軽に読める。HTB まめほん。

135 大雪山わが山小泉秀雄

清水 敏一 / 清水 敏一
1982 / 289-シ

小泉秀雄の生涯も記されているが、主に小泉の研究分野の紹介。研究にかかわった著名人も大勢登場する。

136 続・大雪山わが山小泉秀雄

清水 敏一 / 清水 敏一
1984 / 290-シ

前書「大雪山わが山小泉秀雄」に載せきれなかった資料を中心に、関連のある人々の紹介、コメントなど。

4-2 人物誌（部分が大雪山）

137 綾子・大雪に抱かれて
三浦文学道案内道新旭川政経文化懇話会 / 北海道新聞社
1998 / 910-ミ

副題が三浦文学道案内。三浦綾子・山田洋次監督との対談「希望・明日へ」。作品紹介欄の「泥流地帯」「自我の構図」「毒麦の季」などは大雪山が小説の背景にある。

138 日本山岳文学史

瓜生 卓造 / 東京新聞出版局
1979 / 910-ウ

更級日記など平安時代の紀行文から書き起こし、西行、芭蕉らの旅、「北海道」の名付け親である松浦武四郎が石狩の源流を遡った「石狩日記」、大町桂月、徳富蘆花の二人の自然詩人、大島亮吉の足跡など、いにしえから現代までの山岳文学史。桂月のことを、「明治という時代背景を考えても、多分に右翼的である」と評するなど仔細に調べたうえでの人物評が面白い。

139 北海道の登山史

安田 治 / 北海道新聞社
2010 / 786-ヤ

登山の黎明期から一般社会人への普及期までと、戦後から現代までの変遷の2つに分けて、北海道の近代登山史を概観するほか、近代登山史以前の状況、外国人による登山活動などを考察。登山史年表も収録。

140 雪と氷の科学者・中谷宇吉郎

東 晃 / 北海道大学図書刊行会
1997 / 289-ナ

中谷宇吉郎が十勝岳で撮影した雪の結晶写真はガラス「乾板」で3,000枚に上る。ニセコで行った戦闘機の着氷研究など、研究に没頭した科学者、中谷を詳細に書いた。（文化交流館）

案内書

登山案内、自然案内、観光案内、花案内、案内小冊子、案内ガイドブックなど

5-1 案内書（全てが大雪山）

141 国立公園大雪山

大雪山国立公園観光連盟 / 大雪山国立公園観光連盟、北海道観光連盟
1968 / 291- コ

約11cm×約20.8cm、横長サイズ、14ページの携行型ガイドブック。大観連加盟の市町村のホテル、旅館をはじめ主な観光スポットを写真とイラスト入りで紹介している。

142 大雪山

北海道教育委員会 / 北海道教育委員会
1965 / 709- ホ

北海道教育委員会は昭和33年度から「北海道文化財シリーズ」を刊行、「天然記念物」編、「史跡・名勝」編、「アイヌ文化」編などに続く第7集が大雪山。大雪山地区特別調査隊が編成され、東川町からも参加している。あとがきを書いた担当課長、吉田佐吉は美瑛町白銀温泉にある「国立大雪青年の家」初代所長。

143 大雪山国立公園 シリーズ 14

国立公園協会 / 朋文堂
1954 / 291- ダ

国立公園協会が「大雪山」についてガイドや注意をまとめた本。この時の国立公園はまだ17カ所しか認められていなかった。

144 大雪山・旭岳の自然観察ガイドブック

旭岳ビジターセンター / 東川町
1997 / 462- タ

旭平周辺散策図、クロスカントリースキーコース、自然探勝路、旭岳温泉でのバードウォッチング、高山植物などを紹介している。(文化交流館)

145 大雪山国立公園 愛山溪温泉

安足間観光協会 / 安足間観光協会
1955 / 291- ダ

直井藤次郎ほか2名が明治35年、熊鷹の途中に温泉を発見、大正3年に直井温泉として開湯する。小さな冊子ながら百田宗治の詩「安足間」、更科源藏の「大雪山付近の地名」、三好文夫の「愛山溪の四季」などが載っている。

146 大雪山国立公園 概要と探勝

齊藤 勝 / 北海道景勝地協会
1937 / 291- ダ

昭和12年の大雪山探勝の手引き書。当時の宿賃、バス賃なども記載。ちなみに松山温

泉宿泊料は1.50円。ユコマンベツ温泉にいたっては「上志比内で忠別川を渡り新井牧場を経て地方費林の歩道を登る。温泉には造林小舎があるのみ」。

147 大雪山国立公園 層雲峡の展望

山崎 望一郎 / 層雲閣
1936 / 291- ヤ

昭和初期の大雪山の姿が貴重な写真と美文調で紹介され、英文翻訳が各ページに併記されている。一温泉旅館が出版したとは思えないほど格調の高い編集、丁寧な製本、箱入り。

148 大雪山国立公園
大雪山の自然解説マニュアル

大雪山国立公園層雲峡管理官事務所 / 大雪山国立公園層雲峡旭岳地区ボランティアレンジャー運営協議会
1989 / 450- タ

厚手の紙にプリントして、バインダーで綴じたもの。さまざまな分野について地元の研究者、ガイドらが書き、動物編は東川のネイチャーガイド、塩谷秀和が担当した。(文化交流館)

149 大雪山国立公園登山案内

環境庁 / 環境庁自然保護局大雪山国立公園監理員事務所
1984 / 291- ダ

大雪山国立公園指定50周年記念に編集・発行された折りたたみガイド版。開いた全ページに大雪山系登山案内図を載せ、避難小屋、野営指定地、キャンプ場、公共交通機関を記載。自然保護憲章、東川町役場商工観光課(0166-82-2111)などの照会先、安全登山の心得、大雪山国立公園のあらまし、クリーン大雪運動、ヒグマの生態、動物・昆虫、高山植物、気候・気象、地形・地質を要約、掲載している。

150 大雪山登山案内図

層雲峡観光協会 / 層雲峡観光協会
1969 / 291- ダ

折りたたみの登山案内。開いた全ページが上川町役場監修の大雪山登山案内地図。大雪山のあらまし、四季、昆虫、動物、勇駒別温泉や天人峡温泉など登山基地、層雲峡博物館、山小屋、登山装備、旭川地方の地質と地形、構造土、日の出日の入りなどを記載。当時の実費頒布が百円。

151 大雪山登山法及登山案内

小泉 秀雄 / 大雪山調査會
1926 / 291- コ

文献書誌の研究家、清水敏一は「小泉秀雄の名を山岳会界にとどめているものは、大雪山の研究とその著書『大雪山 登山法及登山案内』である。同書は北の山の本の中

でも古典的名著として評価も高く、新書版の大きさながら本文 374 頁、附録 39 頁、そのほかに写真、図版 69 枚を挿入する大冊である」と絶賛している（『大雪山わが山小泉秀雄』から抜粋）。

152 大雪山の生いたち

国府谷 盛明 / 上川町・層雲峡観光協会
1961 / 453- コ

大雪山の火山としての形成過程を写真、図を元に詳しく説明している。物見遊山的な観光案内書の発行だけではなく、科学的な要素も大切にしたいという趣旨で上川町が発行した。

153 大雪山の自然観察ガイド

昆野 安彦 / 山と溪谷社
2006 / 402- コ

地図、植物、動物、星、火山、雪、気候、アクセスなどポイント別にガイドしている。大きさも手ごろ。「赤ちゃんコマクサを知ってるかい」などページごとのタイトルが優しい。「大雪山ちっちゃいものクラブ」でリス、ウサギ、オコジョを、「稜線の音楽会」でノゴマ、カヤクグリ、ルリビタキ、ビンズイ、ギンザンマシコを紹介。（文化交流館）

154 大雪山を歩く

伊藤 健次 / 山と溪谷社
1996 / 291- イ

フルカラー特選ガイド②として発行された。マップ、花図鑑、生き物たち、さまざまなルートとプランニングの事例など、豊富に紹介している。

155 特別天然記念物大雪山の花・大雪山国立公園大雪山の山

高橋 秀雄 / 林野弘済会旭川支部
1989 / 341- タ

登山の携帯用に出版されたコンパクトなサイズ（縦約 18cm、横約 13cm、64頁）。地図、登山コース、高山植物や動物などをカラー写真と共に紹介している。

156 夏山ガイド②表大雪の山々

梅沢 俊・菅原 靖彦 / 北海道新聞社
2000 / 291- ホ

表大雪のスポットごとに写真を満載、分かりやすく、サイズもコンパクトで夏山登山にベストな 1 冊。サイズもコンパクトなので、登山にも持って行ける。（文化交流館）

157 夏山ガイド③ 東・北大雪 十勝連峰の山々

梅沢 俊・菅原 靖彦 / 北海道新聞社
1995 / 291- ホ

夏山ガイド②に続き、同じ編集で東・北大雪と十勝連峰を紹介している。（文化交流館）

158 日本自然探検の旅・2 生物の大宝庫 大雪山

松岡 達英 / 大日本図書
1997 / 462- マ

著者の動植物の巧みな手書き画が、写真とは違った温かみをにじませている。子供にもよくわかる解説文、大きめの活字。大雪山に生きる主要な動植物、昆虫、魚を探検気分で見学できる。

159 北海道の山 大雪山・十勝連峰

伊藤 健次 / 山と溪谷社
2013 / 291- イ

ヤマケイアルペンガイド 1。

160 北海の高峯 大雪山登山案内

天野 市太郎 / 日新社
1948 / 291- ア

著者は旭川勤務が長かった教師。登山案内は地元ならではの体験に基づいた執筆で、戦前の東川村や松山温泉の様子が手に取るように分かる。村史にはない面白さを秘めている。

5-2 案内書（部分が大雪山）

161 旭川・大雪山

岩波書店編集部 / 岩波書店
1990 / 291- ア

自然と地誌の記録シリーズ（全 12 冊）。「天人峡は忠別川上流の峡谷」という説明がついた写真には、非常に珍しい橋が写っている（56頁）。

162 旭川・大雪山 1958 復刻ワイド版

岩波書店編集部 / 岩波書店
1958 / 291- ア

岩波写真文庫版（約 18.2cm × 約 12.5cm）をワイド版（約 21cm × 約 14.5cm）で復刻した。

163 空撮登山ガイド8 利尻・知床・大雪 10 コース

今村 朋信・大森 弘一郎 / 山と溪谷社
1983 / 291- ク

空撮の山は分かり易い。ガイド内容も詳しく、登山コースをイメージし易い。

164 女性のための百名山

坂倉 登喜子 / 山と溪谷社
1990 / 291- イ

著者は女性だけの山岳会「エーデルワイスクラブ」を結成、先頭に立って活躍した。黒岳から旭岳まで、2 日かけたルートを「スケールの大きい花の群落を訪ねて」のタイトルで紹介している。

165 大雪山・十勝岳・知床・阿寒の山

昆野 安彦・岡井 健 / 山と溪谷社
2006 / 291- コ

ガイドブックと登山地図がひとつになったヤマケイYAMAPシリーズの19。山の標高と、山から山の所要時間、パノラマ写真、立体的な登山コース図など編集に一工夫され、一層分かり易くなった。(文化交流館)

166 大雪山と阿寒

沼佐 隆次 / 北海道庁景勝地協会
1935 / 291- ヌ

筆者は内務省大手記者会新聞聯合社の記者。内務大臣、鉄道大臣、国立公園長(侯爵)、北海道長官らが序文を寄せている。阿寒と大雪山、二つの国立公園を取材するため、東京を汽車で出発、青函連絡船に乗り、さらに汽車で釧路へ、そして旭川へ。まず、この旅の行程地図から始まる。記者の目で確かめた旅日記でもあり、ガイドブック事始め的存在の書。

167 日本登山大系 1 北海道・東北の山

柏瀬 祐之 他 / 白水社
1997 / 291- カ

豊富なルート図・概念図と詳細な解説を付した、バリエーション・ルート・ガイドの集大成。荒々しい未開の自然が残る北海道の山々と、生活のぬくもりや思いがけない明るさが漂う東北の山々を紹介している。

168 日本のロープウェイ・ゴンドラ全ガイド

中島 信 / 千早書房
2010 / 536- ナ

旭岳は、2000年6月に現在のロープウェイになる。しかも、GARAVENTAの搬器でスイス製。国内唯一。(文化交流館)

169 日本百名山ビジュアル登山ガイド 上 北海道、東北、上信越、北アルプスの50山

朝日新聞社 / 朝日新聞社
2002 / 291- ニ

百名山のガイド版、道内は黒岳から旭岳の1泊2日のコースガイドを掲載。(文化交流館)

170 北海道 山歩き 花めぐり

梅沢 俊 / 北海道新聞社
2001 / 291- ウ

北海道新聞に1999年春から2年間、91回連載したものを一冊にまとめた。表紙裏の北海道地図から山の掲載ページが検索できる。旭岳、クワウンナイ川、沼ノ原など大雪山系が多数。

171 北海道ネイチャーツアーガイド

北海道のエコツーリズムを考える会 / 山と溪谷社
2000 / 291- ホ

登山ガイドはもちろん、野鳥観察、花の観察、動物と見えそうな場所、カヌー・カヤック、スキーで歩く、子供も参加出来る場所など細かく記載。(文化交流館)

172 北海道の山岳(登山案内)

田中 三晴 / 晴林堂
1931 / 595- サ

道内の山に関する先駆的な登山案内書。登山道も整備されていない昭和初期のガイドブックながら今も楽しく読める。大雪山彙として旭岳など11山、石狩山脈としてニベソツ山など21山、十勝山脈として上ホロカメツク山など12山、峠や沼周辺も含め、夏の登山、冬の登山を紹介している。巻末に50音順の山名、所要日数、最寄駅をまとめた一覧表と、案内組合が載っている。ちなみに松山温泉口(天人峡温泉)の案内人は島田彦市、代田義雄の2名。

173 北海道の自然美を訪ねて

俵 浩三 / 山と溪谷社
1969 / 219- タ

アルパインガイド30として編集・発行。著者の横顔として「山と自然が好きで造園を専攻し卒業後直ちに厚生省国立公園部に飛び込んだキッスイの山男。中部山岳レンジャー、支笏洞爺国立公園、北海道林務部林政課に転じ、現在は公園担当の係長さんである」。著者が道庁係長だった時に書いたガイドブックで、天人峡温泉宿の電話番号が三ヶタのころ。

174 北海道の自然を美しく撮る 55Spotガイド

大橋 弘一 / エムジー・コーポレーション
2006 / 291- オ

撮影知識と自然の知識を兼ね備えた一冊。大雪山では然別湖、浮島峠、黒岳、旭岳、天人峡の撮影スポットを紹介。(文化交流館)

175 北海道の山

一原 有徳 / 山と溪谷社
1960 / 291- イ

半世紀前に発行されたガイドブックという重みを含んで読むのも楽しい。「勇駒別温泉までは、途中志比内までバスがあり、ここから12^キ馬ソリの便があるが、積雪状態であてにならぬし、数人でラッセルしても一日行程で困難な場合もある」(126^下)。

- 176 **北海道の山**
俵 浩三・今村 朋信 / 山と溪谷社
1976 / 291- タ
アルパインガイド・シリーズの23。大雪山、十勝の山、東大雪の山などのコースガイドを集めた登山案内書。一般向、中級向、熟達者向の難度等級を★マークで付けている。
- 177 **北海道の山と谷㊦**
北海道の山と谷再刊委員会 / 北海道撮影社
1999 / 291- ホ
岩、沢、冬山、フリークライミング、層雲峡氷瀑群、大雪山縦走など、ハイグレードな登山を目指す人を対象にした一冊。(文化交流館)
- 178 **北海道秘湯・名湯・露天ぶろ：北の秘湯**
北海タイムス社 / 北海タイムス社
1986 / 291- ホ
『北の秘湯』のタイトルで北海タイムス朝刊に連載された記事を一冊にまとめた。秘湯ブームのきっかけとなった本。中岳温泉、吹上温泉など大雪山系の温泉多数。
- 179 **北海道無料 100 秘湯ガイドブック**
表 正彦 / 名古文庫
1997 / 290- オ
紹介してある秘湯が今もあるかどうか、知られていない湯の紹介。旭岳の「天女の湯」はロープウェイが新しくなり、天女ヶ原駅が無くなったので手入れはされていない状態。「吹の湯」も同様。湯温35度の「ピラの湯」も手入れはされていない。(文化交流館)
- 180 **利尻礼文・知床・大雪植物手帳**
村田 正博 / JTB パブリッシング
2007 / 472- ム
大人の遠足ブックとうたった高山植物の手帳サイズ図鑑。約300種の花を色から、名前から、科別から検索できる。(文化交流館)
- 182 **一般道々旭川－大雪山－層雲峡線計画**
旭川土木現業所 / ー
ー / 514- イ
地図。
- 183 **写真集 大雪山 中央高地の自然**
北海道撮影社 / 北海道撮影社
1973 / 291- ホ
まさしく大雪山、大判の迫力ある写真集。限定1,000部発行。本にはナンバーが入っていて、東川町保存の一冊はNo.0652。地形、地質、温泉、昆虫、植物など印象深い写真が続き、後半は研究者の解説、随想、厳冬の縦走記録など。
- 184 **層雲峡 一万年の記憶 久野剛男写真集**
久野 剛男 / 出版芸術社
2004 / 748- ヒ
山岳の写真は「初冬の朝陽山」「しばれる黒岳」などわずかで、ほとんどが峡谷に限った風景。そそり立つ岩壁、峡谷の紅葉、岩に根を張る幼木など。(文化交流館)
- 185 **大雪山**
奥田 實 / 山と溪谷社
1992 / 748- オ
山溪山岳写真選集-10として企画された。東川町に移り住んだ写真家、奥田實の思いが巻末『撮影を終えて』に載っている。四季折々の大雪山を見事にとらえた写真に撮影データを加え、大雪山を楽しむベスト・コースも紹介している。
- 186 **大雪山 旭岳 鈴木良策 写真集**
鈴木 良策 / 東方出版
1994 / 748- ス
旭岳の四季折々の姿と植物、すべて生きているという迫力を感じる。写真家ならではのアングルが目の奥に焼き付く。劇作家、田中澄江が序文「旭岳周辺」を寄せている。(文化交流館)
- 187 **大雪山 四季の彩り 市根井孝悦写真集**
市根井 孝悦 / 山と溪谷社
2006 / 402- コ
四季の山肌、高山植物、綺麗という表現ではなく、凄みに変わる写真集。ヌタクカムウシュペ・神々が遊ぶ庭そのもの。(文化交流館)
- 188 **大雪残象**
後藤 昌美 / 京都書院
1987 / 748- ゴ
写真家となって初めて出した写真集。大雪山のさまざまな山並みを魅力的なアングルで撮影、見る者がその場にいるかのような錯覚にとらわれる。

図録類

写真集、画集、図集、画文集、各種図録など

6-1 図録類 (全てが大雪山)

- 181 **市根井孝悦写真集 大雪山**
市根井 孝悦 / 山と溪谷社
1988 / 748- イ
「雲上の天狗岳と前天狗岳」の写真は、神ではなく、仙人がいるような一枚。神秘的でさえある。(文化交流館)

189 大雪 志賀芳彦写真集

志賀 芳彦 / 日輪社
1973 / H748.8 シ

著者のあとがき（抜粋）「おさめた 90 点の作品は、私が自らの自然観を訂正して再出発したときからのもので」「大雪の初冬から晩秋までの四季の移り変わりや夜明けから夕暮れへの刻々の翳りなど原始風土にひそむ魅力の原像をひたすら探し求めて取材した約 15,000 点の中から選んだ心触作品」。限定版。

190 大雪山と丘の四季

高橋 秀雄 / 総北海
1998 / 748- タ

カメラを手にして 50 年、大雪山を撮り続け、1975-94 年の 20 年間欠かさずカレンダーを制作し続けた著者の集大成。雄大な山容、動植物の豊かさ、麗しの丘の広がりなどを見事に捉えている。

191 大雪山の四季

後藤 昌美 / 総北海
2011 ~ 2013 / 748- ダ

カレンダー。元営林局広報担当、高橋秀雄が大雪山のカラー写真に限定したカレンダーを総北海から出し、同社の定番となって人気も高く、長く続いた。高橋没後、後藤昌美に受け継がれ、毎年、製作されている。

192 大雪山のお花畑

奥田 實 / 山と溪谷社
1987 / 472- オ

あとがきに、高山植物を大きな自然の一部として捉え直してみた、大雪山は私にとって道場でもあると記している。高山植物の群生、アングルが素晴らしい。撮影日も記入してある。（文化交流館）

193 大雪山の動物たち

久保 敬親 / 新日本出版社
1980 / 480- ク

写真絵本。エゾリス、エゾライチョウ、クマゲラ、エゾシカ、キタキツネ、高山植物、ウスバキチョウ、ギンザンマシコ、エゾユキウサギ、エゾシマリス、エゾオコジョ、エゾヒグマ、エゾナキウサギ、ホシガラス。

194 大雪山の花

奥田 實 / 山と溪谷社
1987 / 472- オ

「大雪山のお花畑」の新装グラフ版。山小屋データを入れた。（文化交流館）

195 大雪山 母なる大地 市根井孝悦写真集

市根井 孝悦 / 山と溪谷社
2000 / 748- イ

2 月上旬に、富良野岳樹林で撮影した見事なモンスター樹氷など 67 点。見ていくうちにワクワクしてくる写真集。（文化交流館）

196 ナキウサギ 神々の庭に遊ぶ

丹治 茂雄・千葉 圭介 写真集 / 講談社
1993 / 489- タ

ナキウサギが大好きな二人の写真家がトムラウシ山で観察、撮影を続け、氷河時代から命を繋いできたかわいいナキウサギの生態を写真で伝える一冊。

197 日本の大自然 1 大雪山国立公園

森田 敏隆 / 毎日新聞社
1993 / 629- モ

大雪山国立公園の写真集に立松和平が序文を書き、後半の国立公園物語 [大雪山] で歴史、動物の生態、沼、道路などを詳述している。

198 日本の名峰 2 大雪・石狩・十勝

市根井 孝悦 / 山と溪谷社
1985 / 645- イ

冬山が印象的な写真集、紅葉の写真も目に焼き付く。後半がグラフィック・ガイド。旭岳ー黒岳、沼ノ原ートムラウシ山などコース別に 6 ルートを載せている。

199 北海アルプス写真帖

塩谷 忠 / 大雪山調査会
1928 / 291- ホ

小泉秀雄植物調査隊一行、黒岳山頂の荒井初一、松村博士昆虫採集一行、建築中の第七師團療養所など、歴史的な貴重な写真ばかり。

200 北海道大雪山
大雪山国立公園指定 50 周年記念写真集

大雪山国立公園 50 年記念事業推進協議会 /
—
1984 / 291- ホ

50 周年に基づき近隣の町長のコメント、それまでの歴史的写真と解説と風景写真があり、大雪山の歴史を知る一冊。（文化交流館）

201 北海道の自然④ 大雪の四季

成松 岳人 / 淡交社
1988 / 748- ナ

四季を通してさまざまな表情の大雪山、高山植物、動物、ギンザンマシコ、火口雪山、夕日に染まる山肌など、作品 76 点。（文化交流館）

202 北海道 花の大地

奥田 實 / 山と溪谷社
1989 / 748- オ

大雪山の高山植物ばかりではなく、北海道全域の植物が写真集となっている。見慣れた花でも写真家のレンズから見た群生は見とれるほど美しい。(文化交流館)

203 名峰シリーズ 大雪山

志賀 芳彦・写真 / 山と溪谷社
1976 / -

写真は芳賀芳彦、執筆は丹征昭、今村朋信、高沢光雄。

6-2 図録類 (部分が大雪山)

204 アサヒグラフ臨時増刊 国立公園號

星野 辰男 / 朝日新聞社
1932 / 050- ア

『天公何ぞ獨り大雪の一山に厚きや、アイヌが呼んだヌタク・カム・ジュペは、高台原・神・集会所を意味する』こうした見出し、説明文がある。

205 足立源一郎スケッチ帖 日本の山旅

足立 源一郎 / 茗溪堂
1970 / 723- ア

日本全国の山のスケッチ。やさしい線で色も淡く、ほのぼのする感じで味わい深い。大雪山関係は、雲井ヶ原、三ノ沼より旭岳、沼ノ平より旭岳、北鎮岳より旭岳、朝陽山より大雪山、冬の吹上温泉、泥流より前十勝岳など9点。

206 美しい日本 1 北海道 / 東北

井上 靖、河北 倫明 / ぎょうせい
1988 / 720- イ

風景画全集。中村研一が描いた「大雪山」は、夏の終わりの寂しい日々にはスケッチした作品。足立源一郎の「愛別岳・比布岳」、大本靖の版画「沼の原」。

207 エゾヒグマ 残された聖域

久保 敬親 / 山と溪谷社
1999 / 748- ク

ヒグマのダイナミックな写真集。凶暴さは感じられない。むしろ可愛い。クマと共存する為に考えてほしいと思う、自然を残すことが出来るのも人間だから。(文化交流館)

208 カムイの詩がきこえる 北ぐにの山々

岩橋 崇至 / 月刊さつき研究社
1983 / 291- イ

北海道全域の山の写真。雄大で、力強い。大雪山は春15点、夏26点、秋27点、冬11点。

209 カラー日本の山々

山と溪谷社 / 山と溪谷社
1967 / 291- ハ

旭岳を本多勝一が辛口で書き、初っ端から「たいして魅力のある山ではない」、最後は、「来ることは二度とあるまい」。石狩岳を丸山尚敏、上ホロカメットク山を速水潔、十勝岳を坂本直行が担当している。

210 キタキツネとの出会い

久保 敬親 / 新日本出版社
1983 / 489- ク

写真絵本。大雪山で出会ったキタキツネを著者は「コン」と呼ぶことにし、長く観察を続け、コンが子ぎつねに授乳するシーンなどを撮った。コンと10年間の感動ドラマ。

211 牙王 1 ~ 3

石川 球太 / 大都社
1984 / 726- イ

戸川幸夫の「牙王物語」を漫画化した。次ページ参照。

212 小泉秀雄植物図集

清水 敏一 / 小泉秀雄植物図集刊行会
1995 / 470- コ

小泉秀雄没後50年記念に編集、発行された。繊細な植物図集はあせることなく感動を呼ぶ。小泉を慕う研究者らの随想、関係者の追憶、回想、小泉の論文一覧、年表などを収録。箱入り。

213 シマリスの四季

久保 敬親 / 新日本出版社
1984 / 489- ク

写真絵本。登場するシマリスは正確にはエゾシマリスという種で、国内では北海道だけに生息している。冬は地下の巣穴で冬眠するが時折、目を覚まして秋に貯蔵した草の種や木の実を食べて春を待つ。

214 写真で綴る ミズバショウ日記

鮫島 惇一郎 / 北方林業会
2005 / 479- サ

著者が東京から札幌へ移ってきて、おふくろと一緒に見たヘビノマクラ(ミズバショウ)から始まる。大雪山ではヤンベタツツ沢のミズバショウたちの盛大な歓迎を受ける。写真と共に人柄がにじむエッセー集。

215 図説日本の山：自然が素晴らしい山 50 選

小泉 武栄 編 / 朝倉書店
2012 / 521- コ

副題「自然が素晴らしい山 50 選」とあり、道内は利尻山、大雪山、トムラウシ山、十勝岳、暑寒別岳、幌尻岳・トッタベツ岳を紹介。

216 空から見る日本の山々

岡部 一彦 / 報知新聞社
1961 / 291- ソ

読売新聞社写真部と機報部のチームワーク、カメラマンと操縦士が呼吸を合わせて撮った山岳写真。大雪山、十勝岳など。

217 日本の滝① 東日本 661 滝

北中 康文 / 山と溪谷社
2004 / 291- キ

東日本の滝 661 カ所を美しい写真で紹介。大雪山系は流星・銀河の滝、羽衣の滝、敷島の滝、白銀不動の滝、白髭の滝、トムラウシ山の霧吹の滝、上ホロ川の秘奥の滝。(文化交流館)

218 花の絵本 画文集 北ぐにの花暦

鮫島 惇一郎 / 北方林業会
2008 / 723- サ

花の営みを五感で勝手に受け止めていると語る著者の植物画 110 点、文章と学名を添えている。イワギキョウには、黒岳石室に駆け込んできた中学生、「引率の先生が危ない」という救出劇の思い出、ヨツバシオガマは忠別岳を下って平ヶ岳への登りでヒグマと遭遇した思い出を書いている。

219 北方林業表紙写真集

鮫島 惇一郎 / 北方林業会
1999 / 748- サ

『北方林業』創刊 50 周年記念に発行された。同誌の創刊から表紙写真は一貫して著者の写真を使い、裏表紙に写真に思いを寄せる文章を載せてきた。約 500 点の中から選び、一冊にした。

220 北方林業表紙写真集

鮫島 惇一郎 / 北方林業会
2008 / 748- サ

『北方林業』創刊 60 周年記念に発行された。

221 北方林業表紙写真集

鮫島 惇一郎 / 北方林業会
2013 / 748- サ

『北方林業』創刊 65 年の点描として発行された。

222 北方林業表紙写真集

鮫島 惇一郎 / 鮫島 惇一郎
— / 748- サ

『北方林業』の印刷会社が表紙の写真集を作り、著者に送ったもの。4 文字のタイトルを付けた。刷った製本部数は極めて少ないと思われる。1963～1969『春夏秋冬』、1970～1976『四季折々』、1977～1983『東西南北』、1984～1990『大地の詩』、1991～1997『風の便り』、1998～2004『山河礼賛』。

文学書

小説、紀行文、エッセイ、詩集、歌集、句集、詞華集、アンソロジーなど

7-1 文学書 (全てが大雪山)

223 カムイミンダル

小野寺 与吉 / フロンティア同人会
1995 / 911- オ

箱入り私家版、詩集。大雪山の麓、愛別町愛山で育った著者は、師範学校卒業後に教師となるが、辞めて芦別炭砒炭砒夫となって地底を体験、教職に復帰し、詩人としては郷土の山・大雪山を愛し、多くの詩を残した。

224 樹と雪と甲虫と

木野 工 / 光風社書店
1972 / 271- キ

旭川出身の作家、木野工が洞爺丸台風になぎ倒された風倒木を素材に、野望の果てに夢を失っていく青年実業家を描いた小説。

225 牙王物語 上・下

戸川 幸夫 / 国土社
1980 / 913- ト

著者は動物文学を確立させたひとり。主人公は、犬とオオカミの混血「キバ」。サーカスの一団に飼われていたキバが上川町公演のときにサーカス団から脱走。広大な大雪山で野生に戻っていくが、アイヌの猟師や松山温泉「望瀑荘」の娘、早苗らに可愛がられ、やがて大雪山の暴れ熊「片目のゴン」との死闘を繰り広げる。本を開くと「物語の舞台 大雪山連峰周辺地図」が目次の前にどんと載っている。

226 詩文集 層雲峡四季

菊池 モト 編集 / 北の女性社
1947 / 911- キ

大町桂月の漢詩、与謝野寛・晶子、斎藤茂吉、馬場孤蝶らの短歌、高浜虚子の句、野口雨情の層雲峡小唄、大町桂月の「層雲峡より大雪山へ」などを収録している。

227 大雪山牙と顎の殺人

本岡 類 / 光文社
1986 / 377- オ

旭岳でヒグマに食われた女性、オーストラリアでサメに食われた女性、離れた場所での事故死が実は同じ男の殺人事件という突拍子もない推理小説。

228 大雪山殺人事件

梓 林太郎 / 実業之日本社ジョイ・ノベルス
2007 / 913- ア

事件の発端は、旭岳で登山者が熊に襲われ

たことだった。解剖の結果、殺人の可能性が出てきた。容疑者は被害者と一緒に登山をしていた婚約者だが彼には鉄壁のアリバイがあった。その壁に北海道警の刑事たちが立ち向かう。(文化交流館)

229 大雪山粗描

三好 文夫 / 旭川豆本の会
1976 / -

限定 500 部の豆本。

230 大雪山とトムラウシ

前川 整洋 / 白山書房
2002 / 291- マ

山岳紀行作家、詩人である著者が日記を付けるように書き綴った登山記。旭岳～黒岳～トムラウシの縦走を「絵巻物の中を歩いているような縦走路だった」と振り返り、詩、俳句を織り交ぜて書き進めている。

231 大雪山の森番

西野 辰吉 / 農山漁村文化協会
1999 / 913- ニ

物語の主人公は小学 6 年、藤本芳樹。父は森を守る営林署職員。台風でズタズタにこわれた森林をつくりなおす仕事に従事していたが、なかなかうまくいかない(表紙裏から一部抜粋)。著者は、大雪山の台風被害からの復興が困難を極め、人工造林作業に心血を注いだ現場の苦労を後世に伝えようと、この物語を書いた。藤本少年が図書館から借りてきて読む本「カネランと小熊」も、著者が書いた児童文学。

232 大雪山発殺人物語

辻 真先 / 徳間書房
1989 / 913- ツ

著者はトラベルミステリー、ベビー・ディテクティブシリーズを得意としているようで、糠平や旭川が舞台の本編も赤ちゃんが力を出す。幌加温泉の今はなくなった川沿い露天風呂の写真が挿入されている。(文化交流館)

233 峰の記憶

渡辺 淳一 / 文芸春秋
1978 / 692- ワ

大雪山系を貫く縦貫道建設に携わる北海道開発局の現場所長、29 歳の若き技官が主人公。工事を進めながら自然保護への思いも徐々に強くなっていくが、機材を吊り上げていたヘリコプターが墜落、工事は中断、現場所長を解任される。大雪縦貫道を題材にした小説。(文化交流館)

7-2 文学書 (部分が大雪山)

234 青い棘

三浦 綾子 / 学習研究社
1982 / 913- ミ

小説の中に、大雪山や白銀温泉などの風景が随所に登場し、最後の章は『殉難碑』。東川町の墓地にある中国人殉難烈士の墓が小説の重要なポイントになっている。

235 怒りの標的

城山 三郎 / 文芸春秋
1978 / 561- シ

文庫には表題の「怒りの標的」など 9 編が収められており、そのうちの「石北峠」が層雲峡温泉の旅館で働く順子の物語。初冬の温泉宿は客が減り、従業員も休みを取って宿を離れるが順子は残り、バスで人気のない石北峠へ向かう。その夜、宿では泊り客に異変が起きる。

236 石狩川紀行 北海道文明史をさぐる

西野 辰吉 / 日本放送出版協会
1975 / 210- ニ

大雪山を源とする石狩川を視点に、開拓とアイヌ民族との関係、稲作、畑作がどのように進められたか、工業の発展による川の汚染などを、紀行の形で書き進めている。

237 岩に立つ

三浦 綾子 / 講談社
1979 / 913- ミ

三浦夫妻の家を建てた棟梁からの聞き取りを小説にした。棟梁は大雪山のふもと、旭川市米飯で育ったので、いやでも大雪山が目に入る。全編語り口で進む異色の小説で、大雪山を語るところが印象深い。

238 重い神々の下僕

三好 文夫 / 潮出版社
1974 / 366- ミ

著者は旭川を代表する作家のひとりで、アイヌ文化を愛し、山を愛し、愛山溪で亡くなった。潮出版の「重い神々の下僕」には表題の短編を含め 4 編が収められていて、その中の「山に消える」が大雪山を舞台にする一遍。山を知り尽くしているアイヌ青年ウパロについて冬山に入った民芸舎経営の小柳が遭難する。その後も電話にかかってくる小柳の声におびえたウパロもまた、大雪山に消えてゆくストーリー。ギクリとする結末が待っている。

239 北の林

原田 康子 / 新潮社
1974 / 913- ハ

物語は、理々子が石北峠を越えた大雪山山中で大量の睡眠薬を呑み、通りかかったトラッ

クの若者に助けられるところから始まる。

240 北の山 続篇

伊藤 秀五郎 / 茗溪堂
1976 / 291- イ

登山紀行から登山史、自然保護、著者の人柄がにじむ一冊。大雪山登山史、スキー登山史など、北大在学中に「山とスキー」の編集に参画した著者でなければ書けない思い出の記が詰まっている。

241 桂月全集 別巻

大町 桂月 / 日本図書センター
1980 / 930- オ

大町桂月の名文によって大雪山は広く知られるようになった。北海道紀行の大部分は、全集の別巻に収められている。「北海道山水の大観」は「北海道の形を譬へて魚とすれば魚也。鳥とすれば鳥なり」で始まる。数ページ進んで、「層雲峡より大雪山へ」は、有名な一節、「富士山に登つて、山嶽の高さを語れ。大雪山に登つて、山嶽の大きさを語れ」で始まる。別冊には、天人峡羽衣の滝に感動して吟じた漢詩など、東川町にとって大切な部分が収められている。

242 自我の構図

三浦 綾子 / 光文社
1972 / 358- ミ

物語は、旭川に暮らす国語の教師が趣味の領域を超え、絵を書いているが為に才能・嫉妬などから、同僚の美術担当教師との間に葛藤が生まれる。まっすぐな道を天人峡へ向かう車のシーンから小説は始まり、羽衣の滝が物語の重要な設定となっている。NHK銀河テレビ小説となり、昭和49年7月末から8月初めにかけて東川で撮影が行われた。主演は大空真弓、日下武史。「郷土史 ふるさと東川 Ⅲ」の363ページにその時の記述がある。

243 新・花の百名山

田中 澄江 / 文芸春秋
1995 / 477- タ

八十歳を超えてなお全国の山に登り続け花の命を愛する著者が、15年ぶりに選び直した百峰と花の随筆集。前作と同様に、山と花のセットで、黒岳はジンヨウキスミレ、小泉岳はチョウノスケソウを書いている。

244 続 泥流地帯

三浦 綾子 / 新潮社
1979 / 913- ミ

十勝岳噴火の泥流で惨憺たる苦境に立つ開拓農家を描いた『泥流地帯』の続編。苦難はなお続き、重ねて一家に襲いかかる。

245 太陽はいつも雲の上に

三浦 綾子・光世 / 主婦の友社
1974 / 914- ミ

三浦夫妻が人生の悩み、迷いに触れて、支える思い、聖書の言葉などを夫妻で掛け合いのように進めるエッセイ集。表紙の絵に小浜亀角の大雪山を使っていると思われる。

246 地宴

八匠 衆一 / 作品社
1981 / 119- ハ

著者は旭川出身の作家。主人公が育ったところが「大雪山の山に囲まれた、静かな美しい村」(72頁)。物語は札幌を舞台に展開していくが故郷のことも時折登場する。本の帯に「北国の冬を背景に愛の煉獄を描き出す珠玉の長編小説」とある。

247 泥流地帯

三浦 綾子 / 新潮社
1977 / 358- ミ

北海道新聞日曜版に昭和51年1月4日から9月12日まで連載され、昭和52年3月に新潮社から発行された単行本。大正15年5月、十勝岳噴火、家も学校も恋も泥流が一気に押し流す。当時の生活が読み手の心に響き、懸命に生きる兄弟を通して人生の試練とは何か、天災と人を描いた。

248 泥流地帯

三浦 綾子 / 新潮社
2009 / 358- ミ

文庫本。

249 天から送られた手紙

中谷 宇吉郎 雪の科学館館長、神田 健三 / プロセスアート
1999 / 451- ナ

最初のページに旭岳の写真が載っている。説明文は「美しい雪の結晶が降る北海道、大雪山のふもと」「湿気の少なくなった空気が北海道中央部の山々にきて再び雪になるときには、きれいな結晶になります」と書いている。吉田六郎が旭岳温泉で撮影した雪の結晶の写真30枚を、大判で1枚ずつに収めている。(文化交流館)

250 十勝泥流

佐藤 喜一 / 玄文社
1946 / 913- サ

著者は旭川で活躍した文学者。短編「十勝泥流」は、少年と水車小屋守の少女がザリガニ採り遊びから淡い、切ない思いが芽生えていくものの、十勝岳爆発の泥流で少女は行方不明となる。成人してもなお少女の面影を求めていく一遍。

251 毒麦の季

三浦 綾子 / 光文社
1978 / 913- ミ

ターちゃん、小学生の達夫の両親は、愛人問題で離婚状態になっていたが、層雲峡で行われる火祭りを見に行ったときに、取り返しのつかない事故が起きてしまう。昭和46年、「小説宝石」に発表した「毒麦の季」など5編を収録して発刊。

252 中谷宇吉郎随筆集

樋口 敬二 / 岩波文庫
1988 / 914- ナ

雪の研究で世界的に知られる著者は随筆の名手でもあった。研究助手時代のエピソード、研究材料、家族の話など40編。雪の観察を続けた十勝岳「白銀荘」とその主、O老夫婦との交流を書いた「雪の十勝」など。(文化交流館)

253 中谷宇吉郎 雪の物語

中谷 宇吉郎 雪の科学館 /
中谷 宇吉郎 雪の科学館
1994 / 289- ナ

石川県加賀市に中谷宇吉郎雪の科学館がある。館のガイドブック、テキストブックとして作られた。物語「中谷宇吉郎」、物語「雪の科学館」、追想「宇吉郎」の3章構成。(文化交流館)

254 日本百名山

深田 久弥 / 新潮社
1964 / 291- フ

山に関する本として代表的な一冊。昭和39年に新潮社から発行された箱入り初版本。百名山に大雪山、十勝岳、トムラウシが入っている。著者は山の品格、山の歴史、個性ある山を重んじた。「私が旭岳の頂上に立った日は絶好の秋晴れで、大雪・十勝・石狩の連山はもちろん指呼のうちにあり、遠く、阿寒・知床や、天塩や、夕張や、増毛や、北海道の主な山をほとんど眺めることが出来た」(21頁)と幸運を喜んでいる。

255 日本百名山

深田 久弥 / 新潮社
1991 / 291- フ

文庫本。

256 花の百名山

田中 澄江 / 文芸春秋
1980 / 477- タ

作家の登山記。登山をしながら山と、その山の花について思いを語る。登山図・花のカット付き。大雪山はイワウメ。勇駒別の宿に泊まり、姿見の池から旭岳に登って黒

岳へ縦走。熊岳から北鎮岳の緩やかな斜面で見た構造土に感嘆し、「礫の自然の模様に沿って、薄黄いろのイワウメの花が、その文様なりに群生し、そのまま着物の模様のように見える」と書いている。ほかに富良野岳とハクサンイチゲ、十勝岳とイワブクロ、沼の平とサンカヨウなど。

257 糞尿譚

火野 葦平 / 新潮社
1948 / 913- ヒ

文庫には表題の「糞尿譚」など8編が入っており、その中の「谷の宿」が層雲峽を舞台に、バスガイドの魅力に惹きつけられた旅人の物語。

258 みちのくの人形たち

深沢 七郎 / 中央公論社
1981 / 158- フ

文庫には表題の「みちのくの人形たち」など7編がおさめられており、そのうちの「和人のユーカラ」が大雪山を舞台にする。「大雪山は決して恐ろしい山ではない」という書き出しだが、奇妙で不思議な遭遇、幽霊タンポポの名を教えてくれた大男のアイヌのような人との出会いが展開されていく。

259 雪

中谷 宇吉郎 / 岩波文庫
1994 / 451- ナ

天然雪の研究から始まり、十勝岳での雪の結晶の観測、やがて世界に先駆けて人工雪の実験に成功していく。研究者のための執筆ではなく、一般の人に雪を知ってもらうために書いた。(文化交流館)

260 雪は天からの手紙
中谷宇吉郎エッセイ集

池内 了 編 / 岩波少年文庫
2002 / 404- ナ

中谷宇吉郎の随想を岩波少年文庫に収録。漢字に振り仮名を付け、塩一升の記述には(一升は約1.8℔)などと挿入し、読み易く、理解し易くしてある。(文化交流館)

261 夜の傾斜

船山 馨 / 河出書房新社
1961 / 165- フ

山とは一見無縁の企業小説だが、ラストに、主人公の麻生康子と矢代七郎が愛別岳で猛吹雪に巻かれて壮絶な凍死を迎える。

262 流域紀行

朝日新聞社 / 朝日新聞社
1973 / 915- リ

朝日新聞・学芸欄に昭和47年7月12日から12月19日まで連載されたものに、各筆

者が加筆、訂正して一冊の本となった。石狩川を執筆したのは作家、吉村昭。石狩町から取材を始め、月形の樺戸監獄に寄り、工事中の大雪ダムを見て高原温泉に入る。旅の締めくくりは遡上する鮭を見たくて千歳市へ。「黒嵐」「赤い人」「破獄」など著者の代表作が思い浮かぶ。

263 ロビンソンの末裔

開高 健 / 角川書店
1964 / 913- カ

物語は、東京空襲が激しくなったところ、北海道の入植募集に応募して大混乱の上野駅を出発、青函連絡船内で終戦の玉音放送を聞き、その後、旭川奥地の開拓で辛酸をなめた移住者たちの苦闘を描いている。大雪山の麓が小説の村となっている。東旭川米飯に「東京部落」といわれた名残がある。

264 ロビンソンの末裔

開高 健 / 中央公論社
1960 / 913- カ
新潮文庫版。

紙誌、部会報

新聞、雑誌、部報、会報、機関誌などの定期刊行物

8-1 新聞

265 旭岳通信

旭岳ファンクラブ / 旭岳ファンクラブ
2003 ~ /

旭岳ファンクラブの会報。48 ページ参照。

266 大規模林道

寺島 一男 / あさひかわ新聞連載
2010 ~ 2011 / 519- テ

「北の自然保護」第3章として北海道の大規模林業開発計画を書いた。北海道開発庁が出した計画、それに対する反対運動など経過を克明に描いている。

267 大雪山と人と

西原 義弘 / 北海タイムス連載
1983 ~ 1984 / 289- ニ

大雪山国立公園50周年の前年から大雪山にかかわった人たちに焦点を当てた連載を始め、2年間にわたって46回続けた。スクラップブック。

268 厳冬のカムイミントラ

寺島 一男 / あさひかわ新聞連載
2006 ~ 2008 / 786- テ

「あさひかわ新聞」に45回連載。旭川勤労者山岳会10周年記念事業として、厳冬期の石北峠～富良野岳縦走が実行され、4名が未踏ルートに挑んだ20日間の克明な登山記。コピー。

269 大雪山100年

北海道新聞 / 北海道新聞
1999 / 291- ダ

「大雪山100年 その魅力と歴史を訪ねて」を1999年10月27日から11月17日まで7回連載した。コピー。

270 大雪てくてく体験記 旭工生・旭岳わらじ行

ー / 北海タイムス連載
1986 / 786- ダ

旭川工業高校電気科2年生41人が、明治40年に旧上川中（現旭川東高）が敢行した旭岳登山を再現した登山記。装備はわらじ、ござなど。5回の連載。コピー。

271 大雪縦貫道

寺島 一男 / あさひかわ新聞連載
2008 ~ 2009 / 519- テ

新聞連載は「北の自然保護」として企画され、第1章として大雪縦貫道を取り上げ、東川町側から清水町側へ抜ける通称大雪縦貫道計画と、それに対する反対運動の取り組みを25回連載した。

272 北海タイムス（昭和7年10月9日付）

北海タイムス / 北海タイムス
1932 / ー

大雪山と阿寒が国立公園に指定される2年前に発行された紙面。大見出し「国立公園候補地 選に入った本道の二名勝」「天下の奇勝地 大雪山の偉観」、裏表ともに特集記事と写真。

273 緑資源機構の林道整備事業をめぐる記事

北海道新聞 / 北海道新聞
2007 / 651- ミ

新聞記事スクラップコピー。

8-2 雑誌

274 季刊「銀花」 第118号

鯛 嘉行 / 文化出版局
1999 / 623- キ

「大雪山の父・小泉秀雄の足跡 未完の植物図譜」を特集（53頁～80頁）している。高根ガ原やエゾイチゲ、新聞紙に挟んだ植物標本などを、美しいカラー写真と文章で紹介。清水敏一が「黒の跋扈する山へ 小泉秀雄と大雪山をめぐる」、金井弘夫が「植物学者、小泉秀雄」をそれぞれ寄稿。

275 季刊 北の山脈

村本 輝夫 / 北海道撮影社
1971 ~ 1980 / ー

創刊号から終刊の40号まで。

276 グラフ旭川

渡辺 真知子 / グラフ旭川
1979 ～ / 050- グ

旭川の月刊誌。大雪と石狩の自然を守る会代表、寺島一男が「北の自然・人」を長期連載中。東川には1992年から現在まで保管。

277 週刊金曜日No.382

黒川 宣之 / 金曜日
1993 / 050- シ

俵浩三が「なぜ建設に固執する? 日高横断道路」を68～71ページに書いている。

278 大雪山の自然と世界遺産

寺島 一男 / 太陽
1984 / 450- テ

月刊クオリティ姉妹誌「うおんつ」vol46に掲載。大雪山を世界遺産へ登録しようという運動を継続している大雪と石狩の自然を守る会。なぜ世界遺産か、を書いている。

279 ヌブカ創刊号

佐藤 圭樹 編集 / ウィルダネス
2000 / 050- ヌ

「北海道発。おもしろ・不思議探究マガジン」の創刊で『大雪山 山旅へのいざない』を特集した。第1部、広さにおどろく。花に酔う。ベストシーズンのトレッキング紀行。第2部、大雪山ネイチャーガイド塩谷秀和へのインタビューと、今昔調べとして山々の名にみる歴史を辿って。

280 モーリー NO27
大雪山に氷河が懸かったら

財団法人北海道新聞野生生物基金 / 北海道新聞社事業局出版センター
2012 / 462- モ

No.27は、特集「大雪山に氷河が懸かったら」。モーリー編集長らの鼎談をはじめ、高山植物フォトストーリー、「大雪山のツガザクラ属」「高山昆虫の生い立ち」「大雪ロングトレイルへの想い」など。(文化交流館)

8-3 部会報

281 アイヌ語地名研究 16

アイヌ語地名研究会
2013 / 291- ア

秋山秀俊が「東大雪山系のアイヌ語地名、特に東大雪を中心にして」を寄稿している。

282 Woodpecker
大雪山自然観察講座記録誌

東川町 / 大雪山の自然観察講座を記録する会、東川町、環境省東川自然保護官事務所
1984 / -

大雪山自然観察講座が1981年から始まり、

2010年で30回を数えた。講座が開かれる都度、テキストが作られ、それらを一冊にまとめて「ウッドペッカー」が編集、発行された。歴代の講師、講座のテーマをはじめ大雪山の自然情報を掲載している。

283 帯広畜産大学 山岳部 部報第2号

門崎充昭ら編集委員 / 帯広畜産大学山岳部
1963 / 786- オ

合宿の記録、60年春・石狩岳、61年冬・十勝岳、62年春・石狩岳、62年冬・大雪山など。

284 会誌 Bulletin 1～20

北海道自然保護協会 / 北海道自然保護協会
1966 ～ / 519- ブ

北海道自然保護協会の会誌。創刊号巻頭は東条猛猪の「自然保護」、氏は北海道拓殖銀行の頭取を長く勤め、同協会発足当初の代表だった。会報が会員の連絡を目的にしているのに対し会誌はまとまった論説や報告文の掲載を目的にしている。俵浩三が東川町に全号を寄贈した。

285 会報「NC」 1～44

北海道自然保護協会 / 北海道自然保護協会
1965 ～ / 519- エ

北海道自然保護協会は昭和39年12月1日、発起人会及び設立総会を開き、発足した。会報は昭和40年5月から発行。58年9月発行の44号まで全号を俵浩三が東川町に寄贈した。

286 会報「NC」自然・環境・人45～90

北海道自然保護協会 / 北海道自然保護協会
1984 ～ / 520- エ

会報の題字、表紙、体裁をがらりと変えた。俵浩三が東川町に全号、まとめて寄贈した。

287 上川町の自然 第20集

上川町自然科学研究会会員 / 上川町自然科学研究会
2008 / 462- カ

成田新太郎を中心にした上川町自然科学研究会が発行してきた会誌。第20集で一区切りとし、保田信紀の「成田先生を偲んで」など追悼記、第11号以降の総目次など。

288 カムイミントラ 創立20周年記念号

大雪と石狩の自然を守る会 / 大雪と石狩の自然を守る会
1994 / 450- カ

会の創立20周年として12号、13号合併号を発行。第Ⅰ部ひぐま大学紀要、第Ⅱ部守る会のあゆみ。

289 山岳 第十二年第一號

高頭 仁兵衛 / 日本山岳會事務所
1918 / 786- サ

大正7年新春に発行された。「高山植物の研究」など12編。

290 大規模林道の「中止」に寄せて

俵 浩三 / 北海道自然保護協会
2011 / 520- タ

道路の見直しを求めた自然保護運動の半世紀。北海道自然保護協会の「北海道の自然」第49号別冊。

291 日本山岳機関誌 山岳復刻版
第1年～第10年

日本山岳会 / アテネ書房
2001 / 786- サ

「山岳」の第1年から第10年まで、箱入り保存版で復刻された。日本山岳会が結成された明治39年を第1年として、機関誌「山岳」は年間1号、2号、3号まで発行された。第4年第3号（明治42年11月）に上川中学校の北海道大雪山登攀記（小樽新聞）が載った。第8年第1号（大正2年4月）に大平晟の「ヌタプカムシュペ山」が載った。当時の東川村から旭岳への登山記で、村の様子が興味深く書かれている。第11年第3号（大正6年9月）に小泉秀雄が「大雪山登山記」を書いている。

292 ヌタプカムシペ

大雪と石狩の自然を守る会
1982～2009 / 519- ヌ

収録誌第1集、第2集、第3集、第4集。守る会が定期的に発行してきたニュースの収録版。

293 ヌプリ 十勝岳爆発號

竹内 武夫 / 北海道山岳会
1926 / 369- ヌ

4号は大正15年6月の十勝岳噴火後の7月に、稀有の惨事を広く伝えることが山岳会の役目として発行されたので、十勝岳爆発特集となった。写真も爆発、泥流、流木処理、線路付近の惨状、寄稿もすべて十勝岳爆発関係。

294 ヌプリ 北海道山岳写真号

竹内 武夫 / 北海道山岳会
1924 / 786- ヌ

ヌプリはアイヌ語の山の意。第2号で大雪山などの写真を集。懸賞当選写真、大雪山の歌、夏期大学の寄稿など。

295 ヌプリ 北海道山岳紀行号

竹内 武夫 / 北海道山岳会
1926 / 786- ヌ

3号は黒岳石室前の夏期大学会員記念写真、冬の大雪山。夏期大学を機に大雪山へ（西部生）の寄稿など。

296 ヌブンケシ

田丸 誠 / 北見市市史編さん室
2012 / 304- ヌ

ヌブンケシは北見市の市史編さん室が歴史の広報として定期的に発行、ネットでも読むことが出来るようにした。2012年11月15日発行号から2013年4月30日発行まで15回、『大町桂月の北海道旅行』を特集連載。大町桂月の略歴、桂月が与謝野晶子の詩「君死にたまふこと勿れ」を非難したこと、大雪山の登山記など興味深く連載した。

297 北大山岳部々報 1

伊藤 秀五郎 / 札幌市北海道帝國大學文武會山岳部
1928 / 786- ホ

北大山岳部は北海道の登山史に大きな役割を果たしている。1928年に部報1が発行されたときは発行所 北海道帝国大学文武會山岳部となっている。目次の次の地図が『北海道中央高地概略図』で、部員が挑戦したスキー登路、夏季登路を示している。和辻廣樹、伊藤秀五郎、坂本直行らそうそうたるメンバーが登山記を寄せている。

298 北大山岳部々報 8

北海道大学体育会山岳部幹事 橋本 正人 / 北海道大学体育会山岳部
1959 / 786- ホ

冬の十勝岳、大雪山縦走（1951年12月～1952年1月）報告記など。

299 北大山岳部々報 9号

三浦 章司 ら4編集委員 / 北海道大学体育会山岳部
1963 / 786- ホ

北大山岳部は毎年12月に十勝岳合宿を続けていた。それに対する部員の疑問、不満を含めて論談、いわゆる十勝岳合宿について、など。

300 北大山岳部々報 12号

部報12号編集委員会 / 北海道大学体育会山岳部
1985 / 786- ホ

昭和47年度～57年度の山行記録、座談会、海外記録など。

301 北海道の自然 21 ～ 51

北海道自然保護協会 / 北海道自然保護協会
1982 ～ / 519- ホ

会誌 Bulletin 改題。俵浩三が東川町に全号をまとめて寄贈した。

302 緑資源幹線林道・無駄な公共事業が自然を破壊

俵 浩三 / 北海道自然保護協会
2006 / 522- タ

副題に「知事は事業の必要性和効果を説明できなかった」とある。「北海道の自然」第44号別冊。

303 緑資源幹線林道は「中止」の正念場を迎えた

俵 浩三 / 北海道自然保護協会
2008 / 521- タ

「北海道の自然」第46号別刷り。

その他

小冊子、パンフレット類、絵はがき類、複写物、大雪山文献とはいえないが関連づけられるもの

9-1 その他

304 一般道道士幌然別湖線道路計画の概要

北海道土木部 / 北海道土木部
1994 / 514- イ

環境への影響の程度が大幅に少ない計画路線として北海道がまとめた道路計画概要。

305 国立公園シリーズ 1 ～ 15

国立公園 編 / 明文堂
1955 ～ 1964 / 292- コ

1 琵琶湖、2 山陰海岸、3 足摺、4 伊豆七島、5 錦江湾、6 天草、7 若狭湾、8 佐渡弥彦、9 玄海、10 石鎚、11 日南海岸、12 邪馬 日田英彦山、13 網走、14 三河湾、15 金剛・生駒

306 士幌高原道路問題参考資料

北海道自然保護協会 / 北海道自然保護協会
1999 / -

士幌高原道路中止報告全道集会（1999年4月14日）の資料。

307 世界に誇る大雪山を後世へ

俵 浩三 / 俵 浩三
1997 / 519- タ

先人はどのように大雪山の自然を守ってきたか。「大雪山のナキウサギ裁判・生物多様性を問う」の一編として書いた資料。

308 大規模林道はいりません

大雪と石狩の自然を守る会など / 大規模林道問題北海道ネットワーク
2008 / 519- ダ

ヒグマ、クマゲラ、エゾモモンガ、エゾサンショウウオ、ニホンザリガニ、ナキウサギなど森の豊かな生態系を写真で紹介しながら大規模林道を問うカラー冊子。

309 大雪山国立公園でまたも画策される自然破壊道路

八木 健三 / 株式会社金曜日
1996 / 519- ヤ

原生自然とナキウサギを追い詰めた横路道政（八木健三）、大雪山の不思議な自然を守れ（佐藤謙）など。週刊金曜日（No.146）のコピー。

310 大雪山の四季

HIT 企画
2001 / 748- ダ

30cm の定規。定規の裏と表に、大雪山の四季の写真、東川町方向から眺めた連峰の写真に山名と標高を書き入れてある。

311 大雪山への誘い

高澤光雄 / 山と森の散歩道実行委員会代表・新妻徹
1997 / -

丸善・札幌南1条店で開かれた『大雪山への誘い 山の愉しみと地図・登山情報展』に合わせて発行された。

312 ナキウサギと考える大雪山の自然

大雪と石狩の自然を守る会 / 大規模林道問題北海道ネットワークの集い北海道集会実行委員会
1996 / 519- ナ

大規模林道問題全国ネットワークの集い北海道集会開催時の予稿集・資料集。副題は「大規模林道と地域のあした」。収録されている記念公演は大阪市立大学助教授、川道武男「ナキウサギは語る」。

313 北海アルプス 大雪山旭岳勝景（はがきセット）

- / 上川郡忠別川上流天人峡松山温泉場
- / -

「旭嶽 登山記念 松山温泉」のスタンプが押してある。旭岳と姿見池、温泉付近の鑛山橋、旭岳石室、屏風岩、七福岩などのモノクロ写真はがき11枚。

314 北海道大規模林業圏開発

北海道林務部 / 北海道林務部
1974 / 650- ダ

北海道林務部がまとめた昭和 48 年度実施計画策定調査報告書。コピー。

315 北海道百番附

矢谷 重芳 編輯 / 富貴堂書房
1918 / 291- ヤ

大正 7 年発行の北海道早わかり番付。名所の横綱は大沼公園と神居古潭、大雪山は入っていない。山岳の横綱はトランウシ山とホロシリ山。旭岳は別格扱いの取締。民間政治家の項に愛別村長、太田龍太郎が前頭で記載されている。コピー。

316 松浦武四郎・蝦夷地登山の実像

俵 浩三 / 国立公園No. 435、436
1986 / 289- タ

幕末期の偉大な北方探検家の足跡、紀行、日誌を検証し、分かり易く解説している。コピー冊子。

9-2 その他

317 おおはくちょうのそら

手島 圭三郎 / 福武書店
1983 / E

ニューヨークタイムスが選ぶ世界の絵本ベストテン入り。

318 きたきつねのゆめ

手島 圭三郎 / 福武書店
1985 / E

ボローニャ国際児童図書展グラフィック賞受賞。

319 北の草花散歩 じぶんの植物図鑑

塩田 惇 編集 / 総北海
2001 / 470- シ

旭川帰化植物研究会が発行した図鑑。道端の花を花の色で黄色、白、赤、紫などに分けて、各ページに観察日記を書く仕掛けになっている。

320 北の草花散歩 野山編 じぶんの植物図鑑

塩田 惇 編集 / 総北海
2006 / 470- シ

じぶんの植物図鑑の野山編。

321 くまげらのもり

手島 圭三郎 / 福武書店
1984 / E

クマゲラの 3 羽のヒナが巣立つまでの物語。

322 クマにあったらどうするか

姉崎 等 / 木楽舎
2002 / 384- ア

著者は大正 12 年、北海道生まれ、アイヌ民族最後のクマ撃ち猟師。65 年にも及ぶ狩猟人生の体験談が本になった。

323 桂月全集 第 1 巻 美文韻文

大町 桂月 / 桂月全集刊行会
1922 / 918- オ

明治、大正にわたって活躍した文人、大町桂月は、大雪山を名文によって全国に紹介した人物として知られている。執筆量は膨大で、桂月の全集を並べると両手を広げて足りないくらいの長さになる。第 1 巻は美文、韻文の紹介。

324 桂月全集 第 2 巻 紀行 1

大町 桂月 / 桂月全集刊行会
1922 / 919- オ

桂月は全国を旅し、紀行文を書き、各地で講演会を開いている。第 2 巻は紀行文を集め、北は十和田湖まで。

325 桂月全集 第 3 巻 紀行 2

大町 桂月 / 桂月全集刊行会
1922 / 920- オ

桂月は山をよく歩き、文人の登山の先駆者。第 3 巻は箱根、富士、吉野山など。

326 桂月全集 第 4 巻 史伝 1

大町 桂月 / 桂月全集刊行会
1922 / 921- オ

桂月の歴史観が表れ、神武天皇から始まる史伝。天照大神、日本武尊、戦国武将など。

327 桂月全集 第 5 巻 史伝 2

大町 桂月 / 桂月全集刊行会
1922 / 922- オ

源氏と平氏から始まり、中国の李白にもふれる史伝。羽衣の滝に感動した桂月が漢詩を作り、滝近くで朗々と吟じたと推測されるが、元になっているのは李白の詩「望廬山瀑布」。

328 桂月全集 第 6 巻 史伝 3

大町 桂月 / 桂月全集刊行会
1922 / 923- オ

仏教伝来など日本文明史から始まり、大半の記述を四十七士で占めている。

329 桂月全集 第 7 巻 史伝 4

大町 桂月 / 桂月全集刊行会
1923 / 924- オ

白楽天、伯爵後藤象二郎、ハンニバルの史伝。

330 桂月全集 第8巻 評論随筆

大町 桂月 / 桂月全集刊行会
1922 / 925- オ

文学と国家、日本国民の気質、山と日本人などの評論集、随筆集。

331 桂月全集 第9巻 修養 1

大町 桂月 / 桂月全集刊行会
1923 / 926- オ

道徳、青年時代、偉人論など修養を説く。明治の気骨。

332 桂月全集 第10巻 修養 2

大町 桂月 / 桂月全集刊行会
1923 / 927- オ

論語を読む者に告ぐ、論語俗解など。

333 桂月全集 第11巻 修養 3

大町 桂月 / 桂月全集刊行会
1923 / 928- オ

我は日本男児なり、大和魂など。

334 桂月全集 第12巻
詩歌、俳句、書簡、雑篇

大町 桂月 / 桂月全集刊行会
1923 / 929- オ

横山健堂は序文で「酒仙が醒めてゐるのは、彼（桂月）から見れば酒仙の墮落である。桂月の生命は文章である。文章は酒である。酒なければ桂月生くといへども、死したるに同じ」と書いている。

335 蕨影

郭城孟、黄俊溢、高美芳 / 台湾・行政院農業委員会林務局東勢林區管理處
2010 / 472- ケ

台湾にある「大雪山」の植物図鑑「大雪山国家森林遊樂區蕨類植物解説手冊」。

336 自然にやさしい観光デザイン

俵 浩三 / 俵 浩三
2009 / 689- タ

俵浩三 札幌市立大学講義資料

337 自然観察会の参考資料

俵 浩三 / 俵 浩三
1993 / 407- シ

木の成長クイズなど、コピー2ページ、資料。

338 「自然を見る目」の原点

俵 浩三 / 俵 浩三
2009 / 471- ウ

俵 浩三 札幌市立大学講義資料

339 しまふくろうのみずうみ

手島 圭三郎 / 福武書店
1982 / E

紋別出身の版画家、絵本作家。「しまふくろうのみずうみ」は絵本にっぽん賞を受賞した。

340 森林を生かした野外教育

飯田 稔 / 全国林業改良普及協会
1992 / 786- イ

キャンプ、登山など子供たちを対象にした豊かな森林での野外教育の本。

341 大雪山

姚正得、廖煥彰 / 台湾・行政院農業委員会林務局東勢林區管理處
2009 / 488- ダ

台湾に「大雪山」という山がある。雪も降る。その鳥類図鑑「国家森林遊樂區鳥類導覽」。

342 中国名詩鑑賞辞典

山田 勝美 / 角川書店
1979 / 921- セ

166 ページに唐李白の有名な「廬山の瀑布を望む」の解説と読みが載っている。大町桂月が羽衣の滝を前にして、李白のこの句を念頭に漢詩を吟じたと思われる。（文化交流館）

343 ナチュラリストのための登山教室
テキスト

寺島 一男 編集 / 大雪と石狩の自然を守る会
1987 / 786- テ

登山に必要なテキスト。イラスト、短文、極めて分かり易く、それでいて、132 項目にもわたる丁寧な入門書、ポケットサイズ。

344 ひぐまのあき

手島 圭三郎 / 福武書店
1986 / E

ヒグマの親子が川でサケを獲り、小熊は、星のように輝く大きな魚を夢に見る。

345 北海道の緑資源幹線林道

緑資源機構 / 独立行政法人緑資源機構北海道地方建設部
2004 / 656- ホ

緑資源機構の業務、幹線林道事業などを紹介する冊子。コピー。

目録に載せた本、資料は東川町役場2階町史編さん室と文化交流館にあります。文化交流館保管の書籍には（文化交流館）と入れました。

著者・編者名 (50 音順)

赤松 勉	
忠別川は秘めている	19
旭川土木現業所	
一般道々旭川―大雪山―層雲峡線	
計画	25
朝日新聞社	
流域紀行	31
日本百名山ビジュアル登山ガイド	
上 北海道、東北、上信越、北アル	
プスの 50 山	24
旭岳ビジターセンター	
大雪山・旭岳の自然観察	
ガイドブック	22
旭岳ファンクラブ	
旭岳通信	32
梓 林太郎	
大雪山殺人事件	28
東 晃	
雪と氷の科学者・中谷宇吉郎	21
足立 源一郎	
足立源一郎スケッチ帖 日本の山旅	27
アテネ書房編集部	
山岳 総目次	
(創刊号～第 1 号～第 33 号)	12
姉崎 等	
クマにあったらどうするか	36
天野 市太郎	
北海の高峯 大雪山登山案内	23
安足間観光協会	
大雪山国立公園 愛山溪温泉	22
飯田 稔	
森林を生かした野外教育	37
生きている森編集委員会	
地球大百科 生きている森 7	
クマの王国	19
池内 了 編	
雪は天からの手紙	
中谷宇吉郎エッセイ集	31
石狩川開発建設部	
石狩川 100 話	
石狩川治水 100 年の歴史をたどる	11
石狩川源流原生林総合調査団	
石狩川源流原生林総合調査報告	
1952-54	13
石川 球太	
牙王 1～3	27
石原 二三朗	
追憶 大雪山で大砲を撃った	
兵の鎮魂譜	17
市根井 孝悦	
市根井孝悦写真集 大雪山	25
大雪山 四季の彩り	25
大雪山 母なる大地	26
日本の名峰 2	26
一原 有徳	
北海道の山	24
井手 貢夫	
井手貢夫随筆集 その一	
私の山・旅・友	18
井出 孫六 編	
日本百名峠	13
伊藤 健次	
大雪山を歩く	23
北海道の山 大雪山・十勝連峰	23
伊藤 浩司	
北海道の高山植物と山草	13

伊藤 秀五郎	
北の山 続篇	30
北大山岳部々報 1	34
犬飼 哲夫、門崎 允昭	
北海道の自然 ヒグマ	20
井上 靖、河北 倫明	
美しい日本 1 北海道 / 東北	27
今村 朋信、大森 弘一郎	
空撮登山ガイド 8 利尻・知床・	
大雪 10 コース	23
岩波書店編集部	
旭川・大雪山	23
旭川・大雪山 1958 復刻ワイド版	23
岩橋 崇至	
カムイの詩がきこえる	
北ぐにの山々	27
梅沢 俊	
北海道 山歩き 花めぐり	24
「新版」北海道の高山植物	
野外見分け図鑑	13
北海道の高山植物	13
梅沢 俊・菅原 靖彦	
夏山ガイド②表大雪の山々	23
夏山ガイド③東・北大雪	
十勝連峰の山々	23
瓜生 卓造	
日本山岳文学史	21
大島 亮吉	
新編・山 紀行と随想	19
山 研究と随想	20
山 随想	20
山 - 随想 -	20
太田 龍太郎	
霊山碧水	18
大橋 弘一	
北海道の自然を美しく撮る	
55Spot ガイド	24
大町 桂月	
桂月全集 第 1 巻 美文韻文	36
桂月全集 第 2 巻 紀行 1	36
桂月全集 第 3 巻 紀行 2	36
桂月全集 第 4 巻 史伝 1	36
桂月全集 第 5 巻 史伝 2	36
桂月全集 第 6 巻 史伝 3	36
桂月全集 第 7 巻 史伝 4	36
桂月全集 第 8 巻 評論随筆	37
桂月全集 第 9 巻 修養 1	37
桂月全集 第 10 巻 修養 2	37
桂月全集 第 11 巻 修養 3	37
桂月全集 第 12 巻	
詩歌、俳句、書簡、雑篇	37
桂月全集 別巻	30
大室 幹雄	
志賀重昂『日本風景論』精読	12
岡部 一彦	
空から見る日本の山々	28
奥田 實	
大雪山	25
大雪山のお花畑	26
大雪山の花	26
北海道 花の大地	27
小田島 護 編著	
原色野生哺乳動物	11
小田島 護	
大雪山のヒグマ	17
大雪山ヒグマ物語	
ヒグマとの共存の道を探る	17
北海道の野生動物	11

野生のヒグマ: 母グマ K 子の記録	18
小野寺 与吉	
カムイミन्दル	28
表 正彦	
北海道無料 100 秘湯ガイドブック	25
開高 健	
ロビンソンの末裔	32
ロビンソンの末裔 (文庫)	32
郭城孟、黄俊溢、高美芳	
蔵影	37
笠原 稔、鏡味 洋史、笹谷	
努、谷岡 勇市郎	
北海道の地震と津波	16
柏瀬 祐之 他	
日本登山大系 1 北海道・東北の山	24
勝井 義雄 ら共著	
北海道の活火山	16
加藤 峰夫	
国立公園の法と制度	15
門崎 充昭 ら編集委員	
帯広畜産大学 山岳部 部報第 2 号	33
鎌田 明德 編集	
イララエカッチ 02	11
上川営林署	
風災 1400 萬石	14
上川営林署・上川町	
風倒 風倒木処理終了記念	17
上川町	
大雪山観光道路	17
上川町自然科学研究会会員	
上川町の自然 第 20 集	33
上富良野町郷土館	
大正 15 年十勝岳大爆発記録写真集	16
川嶋 康男	
いのちの代償	16
凍 (しば) れるいのち	16
環境省	
日本の国立公園 1～6	12
環境庁	
大雪山国立公園登山案内	22
日本の重要な植物群落 北海道版	15
菊池 モト 編集	
詩文集 層雲峡四季	28
気象庁 編	
日本活火山総覧 (第 4 版)	15
北中 康文	
ニッポンの滝 100 選	12
日本の滝① 東日本 661 滝	28
北道 邦彦	
アイヌ語地名で旅する北海道	18
木野 工	
樹と雪と甲虫と	28
工藤 岳	
大雪山のお花畑が語ること	10
久保 敬親	
エゾヒグマ 残された聖域	27
キタキツネとの出会い	27
シマリスの四季	27
大雪山の動物たち	26
桑原 康彰	
大雪山の動物記	17
小泉 武栄 編	
図説日本の山	
自然が素晴らしい山 50 選	27
小泉 秀雄	
山岳 第拾貳年第二・三號	14
大雪山登山法及登山案内	22

河野 常吉	
大雪山及石狩川上流探検開発史	10
河野 廣道	
北方昆虫記	13
国府谷 盛明	
大雪山の生いたち	23
国立公園 編	
国立公園シリーズ 1～15	35
国立公園シリーズ 1～23	12
国立公園協会	
大雪山国立公園 シリーズ 14	22
後藤 昌美	
大雪残象	25
大雪山の四季	26
駒井 千恵子	
大雪山花の道	
エゾコザクラに逢いたくて	17
昆野 安彦	
大雪山の自然 2 高山植物	10
大雪山の自然 3 動物 昆虫	10
大雪山の自然観察ガイド	23
昆野 安彦・岡井 健	
大雪山・十勝岳・知床・阿寒の山	24
斎藤 一男	
日本の名山を考える	12
齊藤 勝	
大雪山国立公園 概要と探勝	22
坂倉 登喜子	
女性のための百名山	23
坂本 直行	
原野から見た山	18
桜井 徳太郎	
歴史の山 100 選	13
笹川 良江	
「大雪国立公園」生みの親	
太田龍太郎の生涯	21
佐藤 喜一	
十勝泥流	30
佐藤 圭樹 編集	
ヌプカ創刊号	33
鮫島 惇一郎	
エンレイソウ	14
写真で綴る ミズバショウ日記	27
花の絵本 画文集 北ぐにの花暦	28
北方林業表紙写真集 (1999)	28
北方林業表紙写真集 (2008)	28
北方林業表紙写真集 (2013)	28
北方林業表紙写真集	28
更科 源蔵・安藤 美紀夫	
日本の伝説 17 (北海道の伝説)	13
塩田 惇 編集	
北の草花散歩 じぶんの植物図鑑	36
北の草花散歩 野山編	
じぶんの植物図鑑	36
塩谷 忠	
北海アルプス寫真帖	26
塩谷 秀和	
大雪山の四季 精霊の大地から	19
志賀 重昂	
日本風景論	15
日本風景論 (文庫)	15
志賀 芳彦	
大雪 志賀芳彦写真集	26
名峰シリーズ 大雪山	27
清水 敏一	
かけがえのないきみだから	
中学生の道徳 3 北海道版	11
大町桂月の大雪山	21

小泉秀雄植物図集	27
知られざる大雪山の画家・村田丹下	21
続・大雪山わが山小泉秀雄	21
大雪山わが山小泉秀雄	21
大雪山の父・小泉秀雄	21
大雪山の父・小泉秀雄 (豆本)	21
大雪山文献書誌 第 1 巻	10
大雪山文献書誌 第 2 巻	10
大雪山文献書誌 第 3 巻	10
大雪山文献書誌 第 4 巻	11
城山 三郎	
怒りの標的	29
鈴木 良策	
大雪山 旭岳 鈴木良策 写真集	25
瀬川 拓郎	
アイヌの世界	18
関根 幸次、中庄谷 直、	
岩崎 元郎	
日本百名谷	13
層雲峡観光協会	
大雪山登山案内図	22
大雪山のあゆみ	10
鯛 嘉行	
季刊「銀花」 第 118 号	32
第一アートセンター	
日本の名山 1 大雪・日高	12
大雪山国立公園 50 年 記念	
事業推進協議会	
北海道大雪山大雪山国立公園指定	
50 周年記念写真集	26
大雪山国立公園観光連盟	
国立公園大雪山	22
大雪山国立公園層雲峡管理	
官事務所	
大雪山国立公園	
大雪山の自然解説マニュアル	22
大雪山国立公園連絡協議会	
大雪山国立公園 研究・文献集	14
大雪山のナキウサギ裁判を	
支援する会 編	
大雪山のナキウサギ裁判	17
大雪と石狩の自然を守る会	
カムイミントラ 創立 20 周年記念号	33
ナキウサギと考える大雪山の自然	35
ヌタブカムシベ	34
大規模林道はいりません	35
高澤 光雄	
愉しき山脈	19
北海道登山記録と研究	20
北海道の登山史探究	20
山の仲間と五十年	20
大雪山への誘い	35
高頭 仁兵衛	
山岳 第十二年第一號	34
高橋 秀雄	
大雪山と丘の四季	26
特別天然記念物大雪山の花・	
大雪山国立公園大雪山の山	23
高橋 正樹・小林 哲夫	
北海道の火山	15
竹内 武夫	
ヌプリ 十勝岳爆発號	34
ヌプリ 北海道山岳写真号	34
ヌプリ 北海道山岳紀行号	34
館脇 操	
石狩川上流高原温泉の植物	14
大雪山の植物	10
道博高山植物館と植物園	11

館脇 操・鮫島 惇一郎	
北海道中央高地の高山植物	14
田中 澄江	
新・花の百名山	30
花の百名山	31
田中 正大	
日本の自然公園 自然保護と風景保護	12
田中 三晴	
北海道の山岳 (登山案内)	24
田淵 行男	
大雪の蝶	14
田丸 誠	
ヌブンケシ	34
俵 浩三	
会誌北海道の自然 第 1 号～第 50	
号総目次	11
自然にやさしい観光デザイン	37
「自然を見る目」の原点	37
世界に誇る大雪山を後世へ	35
大規模林道の「中止」に寄せて	34
松浦武四郎・蝦夷地登山の実像	36
緑資源幹線林道・	
無駄な公共事業が自然を破壊	35
緑資源幹線林道は「中止」の	
正念場を迎えた	35
自然観察会の参考資料	37
北大選書 北海道の自然保護	
その歴史と思想	15
北海道自然保護小史	13
北海道の自然美を訪ねて	24
北海道の自然保護 その歴史と思想	16
緑の文化史	16
俵 浩三・今村 朋信	
北海道の山	25
丹 征昭	
山と彷徨	20
丹治 茂雄	
氷河時代の置き手紙	20
丹治 茂雄・千葉 圭介 写真集	
ナキウサギ 神々の庭に遊ぶ	26
千葉 達朗	
活火山・活断層	11
忠別ダム記念誌刊行委員会	
忠別川と共に生きて	
忠別川ダムふるさと誌	19
辻 真先	
大雪山発殺人物語	29
都竹 一衛 (膳写)	
大雪山の洗礼	
四十年前の黒岳石室宿泊名簿	10
手島 圭三郎	
おおはくちょうのそら	36
きたきつねのゆめ	36
くまげらのもり	36
しまふくろうのみずうみ	37
ひぐまのあき	37
寺島 一男	
厳冬のカムイミントラ	32
大規模林道	32
大雪山の自然と世界遺産	33
大雪縦貫道	32
寺島 一男 編集	
ナチュラリストのための登山教室	
テキスト	37
洞爺丸台風森林被害復興 50 周	
年記念事業実行委員会事務局	
よみがえった森林を未来へ託す	
洞爺丸台風から 50 年	20

道新旭川政経文化懇話会

綾子・大雪に抱かれて
三浦文学道案内 ……21

道新スポーツ編

北海道の百名山 ……13

戸川 幸夫

牙王物語 上・下 ……28

豊国 秀夫 編

日本の高山植物 ……12

中島 信

日本のロープウェイ・ゴンドラ全
ガイド ……24

永田 洋平

北国の動物たち 4 エゾシカの森 ……18

永田 芳男

大雪山の花 ……10

中谷 宇吉郎 他

大雪山水系及び洪水の研究 ……14

中谷 宇吉郎

雪 ……31

中谷 宇吉郎 雪の科学館館

長、神田 健三

天から送られた手紙 ……30

中谷 宇吉郎 雪の科学館

中谷宇吉郎 雪の物語 ……31

成松 岳人

北海道の自然④ 大雪の四季 ……26

西島 浩 代表編集員

北海道の自然と生物 1～10 ……16

西野 辰吉

石狩川紀行 北海道文明史をさぐる ……29

大雪山の森番 ……29

西原 義弘

大雪山と人と ……32

日本山岳会

日本山岳機関誌 山岳復刻版
第1年～第10年 ……34

日本観光協会

北海道・阿寒・大雪山国立地区観
光診断報告書 ……15

日本林業技術協会

石狩川源流森林総合調査報告書 ……14

沼佐 隆次

大雪山と阿寒 ……24

野呂 一夫 他

大雪の高山植物 ……11

白山書房編集部

日本の溪谷 '96 ……19

北海道大学体育会山岳部幹

事 橋本正人

北大山岳部々報 8 ……34

八谷 和彦

新版 ガイドブックにない
北海道の山々 ……19

八匠 衆一

地宴 ……30

羽根田 治 ら共編

トムラウシ山遭難はなぜ起きたか ……17

トムラウシ山遭難はなぜ起きたか
(文庫) ……17

林 弥栄 編

日本の樹木 ……12

速水 潔

冬山 ……18

原田 康子

北の林 ……29

東川町

Woodpecker
大雪山自然観察講座記録誌 ……33

樋口 敬二

中谷宇吉郎随筆集 ……31

久野 剛男

層雲峡 一万年の記憶
久野剛男 写真集 ……25

火野 葦平

糞尿譚 ……31

深沢 七郎

みちのくの人形たち ……31

深田 久弥

日本百名山 (1964) ……31

日本百名山 (1991) ……31

深田クラブ

日本 200 名山 ……12

藤原 信 編著

スキー場はもういない ……19

船山 馨

夜の傾斜 ……31

部報 12 号編集委員会

北大山岳部々報 12 号 ……34

星野 辰男

アサヒグラフ臨時増刊 国立公園號 ……27

北海タイムス社

北海道秘湯・名湯・露天ぶろ

北の秘湯 ……25

大雪てくてく体験記 ……32

昭和 7 年 10 月 9 日付 ……32

北海道学芸大学函館分校山岳部

旭岳 ……16

北海道教育委員会

大雪山 ……22

北海道教育大学函館分校山の会

石笛：佐々木典夫君追悼誌 ……18

北海道撮影社

写真集 大雪山 中央高地の自然 ……25

北海道自然保護協会

会報「NC」 1～44 ……33

会報「NC」 自然・環境・人

45～90 ……33

神々の遊ぶ庭 北の自然は今 ……18

山と私たち

～北海道自然保護協会～ ……13

土幌高原道路問題参考資料 ……35

会誌 Bulletin 1～20 ……33

北海道の自然 21～51 ……35

北海道新聞

緑資源機構の林道整備事業を

めぐる記事 ……32

大雪山 100 年 ……32

検証 土幌高原道路と時のアセス ……16

大雪山物語 ……11

財団法人北海道新聞野生生

物基金

モーリー NO27

大雪山に氷河が懸かったら ……33

北海道森林風害記録作成委員会

北海道の森林風害記録 ……14

北海道生活環境部自然保護課

大雪山系自然生態系総合調査

大雪山系現存植生図 ……14

北海道土木部

一般道道士幌然別湖線道路計画の

概要 ……35

北海道の山と谷再刊委員会

北海道の山と谷⑤ ……25

北海道のエコツーリズムを

考える会

北海道ネイチャーツアーガイド ……24

北海道林務部

北海道大規模林業圏開発計画 ……36

前川 整洋

大雪山とトムラウシ ……29

松岡 達英

日本自然探検の旅・2
生物の大宝庫 大雪山 ……23

松原 岩五郎

最暗黒の東京 ……18

日本名勝地誌 第 9 編 北海道之部 ……15

松本 司

天上を翔る川 ……17

三浦 綾子

青い棘 ……29

岩に立つ ……29

自我の構図 ……30

続 泥流地帯 ……30

泥流地帯 ……30

泥流地帯 (文庫) ……30

毒麦の季 ……31

三浦 綾子・光世

太陽はいつも雲の上に ……30

三浦 章司 ら 4 編集委員

北大山岳部々報 9 号 ……34

宮島 寛 編集

森林王国の復活 ……12

三好 文夫

重い神々の下僕 ……29

大雪山粗描 ……29

三輪 敏広・三輪 和恵

山ふたり ……20

村串 仁三郎

国立公園成立史の研究 ……15

村田 正博

利尻礼文・知床・大雪植物手帳 ……25

村本 輝夫

季刊 北の山脈 ……32

本岡 類

大雪山牙と顎の殺人 ……28

森田 敏隆

日本の大自然 1 大雪山国立公園 ……26

八木 健三

大雪山国立公園でまたも

画策される自然破壊道路 ……35

八木 健三、辻井 達一 編著

北海道 自然と人と ……20

安田 治

北海道の登山史 ……21

矢谷 重芳 編輯

北海道百番附 ……36

山崎 鑒一郎

大雪山国立公園 層雲峡の展望 ……22

山田 勝美

中国名詩鑑賞辞典 ……37

山田 恵一

大雪山の花 ……10

山と溪谷社

カラー日本の山々 ……27

山本 三生 編集

日本地理大系 10 北海道・樺太編 ……12

姚正得、廖煥彰

大雪山 ……37

吉田 友吉

中央高地登山詳述年表稿

出典準拠 [増補] ……11

よみがえった森林記念事業 実行委員会事務局 森林復興の軌跡 洞爺丸台風から 40 年	19
緑資源機構 北海道の緑資源幹線林道	37
林 明輝 大きな自然 大雪山	16
渡辺 淳一 峰の記憶	29
渡辺 崇彦 大雪山のふもとからある山村の 四季と暮らし	19
渡辺 真知子 グラフ旭川	33
渡辺 康之 ウスバキチョウ	14
高山蝶	14
渡辺 康之、小田島 護 原色蝶	15

著作名 (50 音順)

アイヌ語地名研究 16 アイヌ語地名研究会	33
アイヌ語地名で旅する北海道 北道 邦彦	18
アイヌの世界 瀬川 拓郎	18
青い棘 三浦 綾子	29
旭川・大雪山 岩波書店編集部	23
旭川・大雪山 1958 復刻ワイド版 岩波書店編集部	23
アサヒグラフ臨時増刊 国立公園號 星野 辰男	27
旭岳 北海道学芸大学函館分校山岳部	16
旭岳通信 旭岳ファンクラブ	32
足立源一郎スケッチ帖 日本の山旅 足立 源一郎	27
綾子・大雪に抱かれて 三浦文学道案内 道新旭川政経文化懇話会	21
怒りの標的 城山 三郎	29
石狩川 100 話 石狩川治水 100 年の歴史をたどる 石狩川開発建設部	11
石狩川紀行 北海道文明史をさぐる 西野 辰吉	29
石狩川源流原生林総合調査 報告 1952-54 石狩川源流原生林総合調査団	13
石狩川源流森林総合調査報告書 日本林業技術協会	14
石狩川上流高原温泉の植物 館脇 操	14
市根井孝悦写真集 大雪山 市根井 孝悦	25

一般道々旭川ー大雪山ー 層雲峡線計画 旭川土木現業所	25
一般道道士幌然別湖線道路 計画の概要 北海道土木部	35
井手貢夫随筆集 その一 私山・旅・友 井手 貢夫	18
いのちの代償 川嶋 康男	16
イラエカッチ 02 鎌田 明徳 編集	11
岩に立つ 三浦 綾子	29
石笛：佐々木典夫君追悼誌 北海道教育大学函館分校山の会	18
ウスバキチョウ 渡辺 康之	14
美しい日本 1 北海道 / 東北 井上 靖、河北 倫明	27
Woodpecker 大雪山自然観察講座記録誌 東川町	33
エゾヒグマ 残された聖域 久保 敬親	27
エンレイソウ 鮫島 惇一郎	14
大きな自然 大雪山 林 明輝	16
おおはくちょうのそら 手島 圭三郎	36
大町桂月の大雪山 清水 敏一	21
帯広畜産大学 山岳部 部報第 2 号 門崎 充昭 ら編集委員	33
重い神々の下僕 三好 文夫	29
会誌 Bulletin 1 ～ 20 北海道自然保護協会	33
会誌北海道の自然 第 1 号～第 50 号総目次 俵 浩三	11
新版 ガイドブックにない 北海道の山々 八谷 和彦	19
会報「NC」 1 ～ 44 北海道自然保護協会	33
会報「NC」 自然・環境・人 45 ～ 90 北海道自然保護協会	33
かけがえのないきみだから 中学生の道徳 3 年 北海道版 清水 敏一	11
活火山・活断層 千葉 達朗	11
神々の遊ぶ庭 北の自然は今 北海道自然保護協会 編	18
上川町の自然 第 20 集 上川町自然科学研究会会員	33
カムイの詩がきこえる 北ぐにの山々 岩橋 崇至	27
カムイミントラ 創立 20 周年記念号 —	33
カムイミンドル 小野寺 与吉	28

カラー日本の山々 山と溪谷社	27
季刊 北の山脈 村本 輝夫	32
季刊「銀花」第 118 号 鯛 嘉行	32
キタキツネとの出会い 久保 敬親	27
きたきつねのゆめ 手島 圭三郎	36
北国の動物たち 4 エゾシカの森 永田 洋平	18
北の草花散歩 じぶんの植物図鑑 塩田 惇 編集	36
北の草花散歩 野山編 じぶんの植物図鑑 塩田 惇 編集	36
北の林 原田 康子	29
北の山 続篇 伊藤 秀五郎	30
樹と雪と甲虫と 木野 工	28
牙王 1 ～ 3 石川 球太	27
牙王物語 上・下 戸川 幸夫	28
空撮登山ガイド 8 利尻・知床・大雪 10 コース 今村 朋信、大森 弘一郎	23
くまげらのもり 手島 圭三郎	36
クマにあったらどうするか 姉崎 等	36
グラフ旭川 渡辺 真知子	33
桂月全集 第 1 巻 美文韻文 大町 桂月	36
桂月全集 第 2 巻 紀行 1 大町 桂月	36
桂月全集 第 3 巻 紀行 2 大町 桂月	36
桂月全集 第 4 巻 史伝 1 大町 桂月	36
桂月全集 第 5 巻 史伝 2 大町 桂月	36
桂月全集 第 6 巻 史伝 3 大町 桂月	36
桂月全集 第 7 巻 史伝 4 大町 桂月	36
桂月全集 第 8 巻 評論随筆 大町 桂月	37
桂月全集 第 9 巻 修養 1 大町 桂月	37
桂月全集 第 10 巻 修養 2 大町 桂月	37
桂月全集 第 11 巻 修養 3 大町 桂月	37
桂月全集 第 12 巻 詩歌、俳句、書簡、雑篇 大町 桂月	37
桂月全集 別巻 大町 桂月	30
蕨影 郭城孟、黄俊溢、高美芳	37

検証 土幌高原道路と 時のアセス 北海道新聞社 編	16
原色蝶 渡辺 康之、小田島 護	15
原色野生哺乳動物 小田島 護 編著	11
厳冬のカムイミントラ 寺島 一男	32
原野から見た山 坂本 直行	18
小泉秀雄植物図集 清水 敏一	27
高山蝶 渡辺 康之	14
国立公園シリーズ 1 ～ 15 国立公園 編	35
国立公園シリーズ 1 ～ 23 国立公園 編	12
国立公園成立史の研究 村串 仁三郎	15
国立公園大雪山 大雪山国立公園観光連盟	22
国立公園の法と制度 加藤 峰夫	15
最暗黒の東京 松原 岩五郎	18
山岳 総目次 (創刊号～第1号～第33号) アテネ書房編集部	12
山岳 第十二年第一號 高頭 仁兵衛	34
山岳 第拾貳年第二・三號 小泉 秀雄	14
志賀重昂『日本風景論』精読 大室 幹雄	12
自我の構図 三浦 綾子	30
自然にやさしい観光デザイン 俵 浩三	37
自然観察会の参考資料 俵 浩三	37
「自然を見る目」の原点 俵 浩三	37
凍(しば)れるいのち 川嶋 康男	16
詩文集 層雲峡四季 菊池 モト 編集	28
土幌高原道路問題参考資料 北海道自然保護協会	35
しまふくるうのみずうみ 手島 圭三郎	37
シマリスの四季 久保 敬親	27
写真集 大雪山 中央高地の自然 北海道撮影社	25
写真で綴る ミズバショウ日記 鮫島 惇一郎	27
週刊金曜日No.382 黒川 宣之	33
女性のための百名山 坂倉 登喜子	23
知られざる大雪山の画家・ 村田丹下 清水 敏一	21
新・花の百名山 田中 澄江	30

新編・山 紀行と随想 大島 亮吉	19
森林王国の復活 宮島 寛 編集	12
森林復興の軌跡 洞爺丸台風から 40 年 よみがえった森林記念事業 実行委員会事務局	19
森林を生かした野外教育 飯田 稔	37
スキー場はもういない 藤原 信 編著	19
図説日本の山 自然が素晴らしい山 50 選 小泉 武栄 編	27
世界に誇る大雪山を後世へ 俵 浩三	35
層雲峡 一万年の記憶 久野 剛男 写真集 久野 剛男	25
続 泥流地帯 三浦 綾子	30
続・大雪山わが山小泉秀雄 清水 敏一	21
空から見る日本の山々 岡部 一彦	28
大規模林道 寺島 一男	32
大規模林道の「中止」に寄せて 俵 浩三	34
大規模林道はいりません 大雪と石狩の自然を守る会 など	35
大正 15 年十勝岳大爆発 記録写真集 上富良野町郷土館	16
大雪 志賀芳彦写真集 志賀 芳彦	26
大雪山 奥田 實	25
大雪山 北海道教育委員会	22
大雪山 姚正得、廖煥彰	37
大雪山国立公園 シリーズ 14 国立公園協会	22
大雪山わが山小泉秀雄 清水 敏一	21
大雪山・旭岳の自然観察 ガイドブック 旭岳ビジターセンター	22
大雪山・十勝岳・知床・ 阿寒の山 昆野 安彦、岡井 健	24
大雪山 旭岳 鈴木良策 写真集 鈴木 良策	25
大雪山及石狩川上流探検開発史 河野 常吉	10
大雪山観光道路 上川町	17
大雪山牙と顎の殺人 本岡 類	28
大雪山系自然生態系総合調査 大雪山系現存植生図 北海道生活環境部自然保護課	14
大雪山国立公園 愛山溪温泉 安足間観光協会	22
大雪山国立公園 概要と探勝 齊藤 勝	22

大雪山国立公園 研究・文献集 大雪山国立公園連絡協議会	14
大雪山国立公園 層雲峡の展望 山崎 望一郎	22
「大雪山国立公園」生みの親 太田龍太郎の生涯 笹川 良江	21
大雪山国立公園 大雪山の 自然解説マニュアル 大雪山国立公園層雲峡管理官事務所	22
大雪山国立公園でまとも 画策される自然破壊道路 八木 健三	35
大雪山国立公園登山案内 環境庁	22
大雪山殺人事件 梓 林太郎	28
大雪山 四季の彩り 市根井孝悦写真集 市根井 孝悦	25
大雪残象 後藤 昌美	25
大雪山水系及び洪水の研究 中谷 宇吉郎 他	14
大雪山粗描 三好 文夫	29
大雪山と阿寒 沼佐 隆次	24
大雪山と丘の四季 高橋 秀雄	26
大雪山登山案内図 層雲峡観光協会	22
大雪山登山法及登山案内 小泉 秀雄	22
大雪山とトムラウシ 前川 整洋	29
大雪山と人と 西原 義弘	32
大雪山のあゆみ 層雲峡観光協会	10
大雪山の生いたち 国府谷 盛明	23
大雪山のお花畑が語ること 工藤 岳	10
大雪山の四季 後藤 昌美	26
大雪山の四季 精霊の大地から 塩谷 秀和	19
大雪山のお花畑 奥田 實	26
大雪山の自然 2 高山植物 昆野 安彦	10
大雪山の自然 3 動物 昆虫 昆野 安彦	10
大雪山の自然観察ガイド 昆野 安彦	23
大雪山の自然と世界遺産 寺島 一男	33
大雪山の植物 館脇 操	10
大雪山の洗礼 四十年前の黒岳石室宿泊名簿 都竹 一衛(贋写)	10
大雪山の父・小泉秀雄 清水 敏一	21
大雪山の父・小泉秀雄(豆本) 清水 敏一	21

大雪山の動物記	
桑原 康彰	17
大雪山の動物たち	
久保 敬親	26
大雪山のナキウサギ裁判	
大雪山のナキウサギ裁判を支援する会 編	17
大雪山の花	
奥田 實	26
大雪山の花	
永田 芳男	10
大雪山の花	
山田 恵一	10
大雪山のヒグマ	
小田島 護	17
大雪山のふもとからある山村の四季と暮らし	
渡辺 崇彦	19
大雪山の森番	
西野 辰吉	29
大雪山発殺人物語	
辻 真先	29
大雪山花の道	
エゾコザクラに逢いたくて	
駒井 千恵子	17
大雪山 母なる大地	
市根井孝悦写真集	
市根井 孝悦	26
大雪山ヒグマ物語	
ヒグマとの共存の道を探る	
小田島 護	17
大雪山 100 年	
北海道新聞	32
大雪山文献書誌 第 1 巻	
清水 敏一	10
大雪山文献書誌 第 2 巻	
清水 敏一	10
大雪山文献書誌 第 3 巻	
清水 敏一	10
大雪山文献書誌 第 4 巻	
清水 敏一	11
大雪山への誘い	
高澤 光雄	35
大雪山物語	
北海道新聞社	11
大雪山を歩く	
伊藤 健次	23
大雪縦貫道	
寺島 一男	32
大雪てくてく体験記	
旭工生・旭岳わらじ行	
北海タイムス	32
大雪の高山植物	
野呂 一夫 他	11
大雪の蝶	
田淵 行男	14
太陽はいつも雲の上に	
三浦 綾子・光世	30
愉しき山脈	
高澤 光雄	19
地宴	
八匠 衆一	30
地球大百科	
生きている森 7 クマの王国	
生きている森編集委員会	19
中央高地登山詳述年表稿	
出典準拠 [増補]	
吉田 友吉	11

中国名詩鑑賞辞典	
山田 勝美	37
忠別川と共に生きて	
忠別川ダムふるさと誌	
忠別ダム記念誌刊行委員会	19
忠別川は秘めている	
赤松 勉	19
追憶 大雪山で大砲を撃った	
兵の鎮魂譜	
石原 二三朗	17
泥流地帯	
三浦 綾子	30
泥流地帯 (文庫)	
三浦 綾子	30
天から送られた手紙	
中谷宇吉郎 雪の科学館館長	
神田 健三	30
天上を翔る川	
松本 司	17
道博高山植物館と植物園	
館脇 操	11
十勝泥流	
佐藤 喜一	30
特別天然記念物大雪山の花・大雪山国立公園大雪山の山	
高橋 秀雄	23
毒麦の季	
三浦 綾子	31
トムラウシ山遭難はなぜ起きたか	
羽根田 治ら共編	17
トムラウシ山遭難はなぜ起きたか (文庫)	
羽根田 治ら共編	17
中谷宇吉郎随筆集	
樋口 敬二	31
中谷宇吉郎 雪の物語	
中谷 宇吉郎 雪の科学館	31
ナキウサギ 神々の庭に遊ぶ	
丹治 茂雄・千葉 圭介 写真集	26
ナキウサギと考える大雪山の自然	
大雪と石狩の自然を守る会 など	35
ナチュラリストのための登山教室 テキスト	
寺島 一男 編集	37
夏山ガイド② 表大雪の山々	
梅沢 俊・菅原 靖彦	23
夏山ガイド③	
東・北大雪 十勝連峰の山々	
梅沢 俊・菅原 靖彦	23
日本 200 名山	
深田クラブ	12
日本活火山総覧 (第 4 版)	
気象庁 編	15
日本山岳機関誌 山岳復刻版 第 1 年～第 10 年	
日本山岳会	34
日本山岳文学史	
瓜生 卓造	21
日本自然探検の旅・2	
生物の大宝庫 大雪山	
松岡 達英	23
日本地理大系 10	
北海道・樺太編	
山本 三生 編集	12

日本登山大系 1	
北海道・東北の山	
柏瀬 祐之 他	24
日本の渓谷 '96	
白山書房編集部	19
日本の高山植物	
豊国 秀夫 編	12
日本の国立公園 1 ～ 6	
環境省	12
日本の自然公園	
自然保護と風景保護	
田中 正大	12
日本の重要な植物群落	
北海道版	
環境庁	15
日本の樹木	
林 弥栄 編	12
日本の大自然 1	
大雪山国立公園	
森田 敏隆	26
ニッポンの滝 100 選	
北中 康文	12
日本の名山 1 大雪・日高と	
第一アートセンター	12
日本の名山を考える	
斎藤 一男	12
日本の名峰 2	
市根井 孝悦	26
日本百名谷	
関根 幸次、中庄 谷直、岩崎 元郎	13
日本百名山	
深田 久弥	31
日本百名山 (文庫)	
深田 久弥	31
日本百名峠	
井出 孫六 編	13
日本風景論	
志賀 重昂	15
日本風景論 (文庫)	
志賀 重昂	15
日本名勝地誌 第 9 編	
北海道之部	
松原 岩五郎	15
日本の伝説 17	
(北海道の伝説)	
更科 源蔵・安藤 美紀夫	13
日本の滝① 東日本 661 滝	
北中 康文	28
日本のロープウェイ・ Gondola 全ガイド	
中島 信	24
日本百名山ビジュアル登山ガイド 上 北海道、東北、上	
信越、北アルプスの 50 山	
朝日新聞社	24
スタブカムシベ	
大雪と石狩の自然を守る会	34
ヌブカ創刊号	
佐藤 圭樹 編集	33
ヌブリ 十勝岳爆発號	
竹内 武夫	34
ヌブリ 北海道山岳写真号	
竹内 武夫	34
ヌブリ 北海道山岳紀行号	
竹内 武夫	34
ヌブンケシ	
田丸 誠	34

花の絵本 画文集 北ぐにの花暦 鮫島 惇一郎	28
花の百名山 田中 澄江	31
ひぐまのあき 手島 圭三郎	37
氷河時代の置き手紙 丹治 茂雄	20
風災 1400 萬石 上川営林署	14
風倒 風倒木処理終了記念 上川営林署・上川町	17
冬山 速水 潔	18
糞尿譚 火野 葦平	31
北大山岳部々報 1 伊藤 秀五郎	34
北大山岳部々報 12 号 部報 12 号編集委員会	34
北大山岳部々報 8 北海道大学体育会山岳部幹事 橋本 正人	34
北大山岳部々報 9 号 三浦 章司ら 4 編集委員	34
北大選書 北海道の自然保護 その歴史と思想 俵 浩三	15
北海アルプス 大雪山旭岳勝 景 (はがきセット) 松山温泉	35
北海アルプス写真帖 塩谷 忠	26
北海タイムス (昭和 7 年 10 月 9 日付) 北海タイムス	32
北海道 自然と人と 八木 健三、辻井 達一 編著	20
北海道 山歩き 花めぐり 梅沢 俊	24
北海道・阿寒・大雪山国立 地区観光診断報告書 日本観光協会	15
北海道自然保護小史 俵 浩三	13
北海道大規模林業圏開発計画 北海道林務部	36
北海道大雪山 大雪山国立公 園指定 50 周年記念写真集 大雪山国立公園 50 年記念事業 推進協議会	26
北海道中央高地の高山植物 館脇 操・鮫島 惇一郎	14
北海道登山記録と研究 高澤 光雄 編	20
北海道ネイチャーツアーガイド 北海道のエコツーリズムを考える会	24
北海道の火山 高橋 正樹・小林 哲夫	15
北海道の活火山 勝井 義雄 共著	16
「新版」北海道の高山植物 梅沢 俊	13
北海道の高山植物と山草 伊藤 浩司	13
北海道の山岳 (登山案内) 田中 三晴	24

北海道の地震と津波 笠原 稔、鏡味 洋史、笹谷 努、 谷岡 勇市郎	16
北海道の自然 ヒグマ 犬飼 哲夫、門崎 允昭	20
北海道の自然 21 ～ 51 北海道自然保護協会	35
北海道の自然④ 大雪の四季 成松 岳人	26
北海道の自然と生物 1 ～ 10 西島 浩 代表編集員	16
北海道の自然美を訪ねて 俵 浩三	24
北海道の自然保護 その歴史と思想 俵 浩三	16
北海道の自然を美しく撮る 55Spot ガイド 大橋 弘一	24
北海道の森林風害記録 北海道森林風害記録作成委員会	14
北海道の登山史 安田 治	21
北海道の登山史探究 高澤 光雄	20
北海道の百名山 道新スポーツ編	13
北海道の緑資源幹線林道 緑資源機構	37
北海道の野生動物 小田島 護	11
北海道の山 一原 有徳	24
北海道の山 俵 浩三・今村 朋信	25
北海道の山 大雪山・十勝連峰 伊藤 健次	23
北海道の山と谷⑦ 北海道の山と谷再刊委員会	25
北海道 花の大地 奥田 實	27
北海道秘湯・名湯・露天ぶる 北の秘湯 北海タイムス社	25
北海道百番附 矢谷 重芳 編輯	36
北海道無料 100 秘湯ガイド ブック 表 正彦	25
北海の高峯 大雪山登山案内 天野 市太郎	23
北方昆虫記 河野 廣道	13
北方林業表紙写真集 (1999) 鮫島 惇一郎	28
北方林業表紙写真集 (2008) 鮫島 惇一郎	28
北方林業表紙写真集 (2013) 鮫島 惇一郎	28
北方林業表紙写真集 鮫島 惇一郎	28
松浦武四郎・蝦夷地登山の実像 俵 浩三	36
みちのくの人形たち 深沢 七郎	31
緑資源幹線林道・無駄な公 共事業が自然を破壊 俵 浩三	35

緑資源幹線林道は「中止」 の正念場を迎えた 俵 浩三	35
緑資源機構の林道整備事業 をめぐる記事 北海道新聞	32
緑の文化史 俵 浩三	16
峰の記憶 渡辺 淳一	29
名峰シリーズ 大雪山 志賀 芳彦	27
モーリー NO27 大雪山に氷河が懸かったら 財団法人北海道新聞野生生物基金	33
野外見分け図鑑 北海道の高山植物 梅沢 俊	13
野生のヒグマ 母グマ K 子の記録 小田島 護	18
山 研究と随想 大島 亮吉	20
山 随想 大島 亮吉	20
山 - 随想 - 大島 亮吉	20
山と彷徨 丹 征昭	20
山と私たち ～北海道自然保護協会～ (社) 北海道自然保護協会	13
山の仲間と五十年 高澤 光雄 編集	20
山ふたり 三輪 敏広・三輪 和恵	20
雪 中谷 宇吉郎	31
雪と氷の科学者・中谷宇吉郎 東 晃	21
雪は天からの手紙 中谷宇吉郎エッセイ集 池内了 編	31
よみがえった森林を未来へ 託す 洞爺丸台風から 50 年 洞爺丸台風森林被害復興 50 周年 記念事業実行委員会事務局	20
夜の傾斜 船山 馨	31
利尻礼文・知床・大雪植物手帳 村田 正博	25
流域紀行 朝日新聞社	31
霊山碧水 太田 龍太郎	18
歴史の山 100 選 桜井 徳太郎	13
ロビンソンの末裔 開高 健	32
ロビンソンの末裔 (文庫) 開高 健	32



泥流地帯・続泥流地帯

三浦綾子 / 新潮社 / P30

開拓者らがやっと生活できるようになった明治末からのストーリー。父が造材現場で事故死の後、母は出稼ぎに都会へ出て、家には祖父母と幼い子供たちが残された。貧しくとも誠実に、懸命

に暮らしていた一家だが、悲劇は大正 15 年 5 月 24 日に起きる。十勝岳が大爆発、残雪を溶かした泥流が上富良野を容赦なく襲い、家も畑も学校も、何もかもすべてを呑みこみ、押し潰した。家族のむごたらしい死。生き残った拓一、耕作の悲しみは深く、「まじめに生きていても、馬鹿臭いようなもんだな」と悲嘆にくれる弟を、兄は…。

「続泥流地帯」は、生き残った者たちにその後、苦難が次々と襲う。硫黄を含んだ泥流で田畑の復興は絶望的ななか、村長や拓一らが未来の為に頑張る。悲しい思いを抱えながら少しずつ前進するが、それを阻む人も現れる。



太田龍太郎の生涯

笹川良江 / 北海道出版企画センター / P21

龍太郎は文久 3 年（1863）10 月 8 日、熊本藩士の長男として生まれる。4 歳の時に父が暗殺され、13 歳から同藩の安場和男に実子のように育てられ、学問を積む。安場家に同居していた後藤新平（後の通信大臣）と竹馬の友となる。明治 30 年、師

父・安場和男男爵が北海道庁長官となり、龍太郎も北海道庁へ出向、同 43 年に愛別村長を拝命する。未開の石狩川源流部に分け入り、紀行文「霊山碧水」を新聞連載したことから層雲峡が世間に知られるきっかけとなった。同時に、この地は国家の事業として経営すべきと国立公園の必要性をいち早く後藤大臣に訴えた。

龍太郎の孫である著者が「霊山碧水」にふりがなや常用漢字を入れて読み易くし、併せて波乱万丈の祖父の生きざまを年表、写真、資料を豊富に入れて大雪山国立公園 70 周年に出版した。



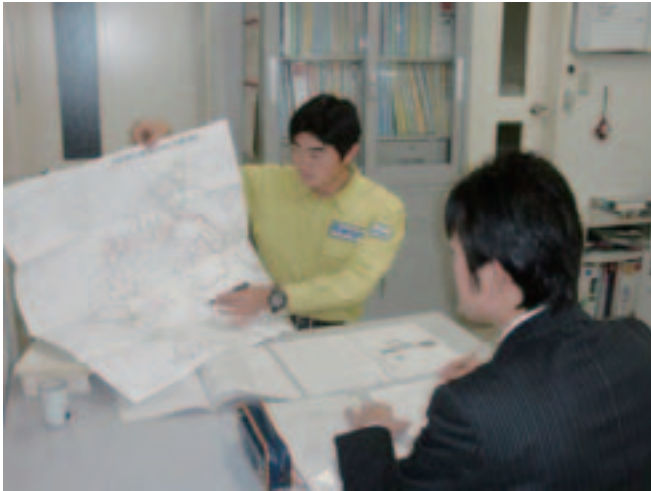
しば 凍れるいのち

川嶋康男 / 柏艫舎 / P16

北海道学芸大学函館分校山岳部の 11 名が大雪山の冬山縦走に初めて挑み、大晦日に目標とした旭岳山頂付近にたどり着くがその夜、猛烈なブリザードに襲われた。壮絶な彷徨の末、旭岳温泉に生還したのは野呂幸司リーダー一人だけ。昭和 38 年 1 月 1 日、その日から遭難死した 10 名の長い捜索が始まった。

野呂さんは両足先の肉が溶け落ち、切断。ハンディキャップを負いながら 10 人の魂とともに生き抜こうと活躍中。著者がインタビューと遭難報告書等の検証によってまとめたノンフィクション。10 名を慰霊する「愛の鐘」が姿見の池の台地に建つ。

■ 環境省 東川自然保護官事務所



許認可の指導の様子

東川自然保護官事務所は大雪山国立公園の東川町から南富良野町までの範囲を担当し、元々は勇駒別駐在の国立公園管理員として昭和47年から配置されました。平成6年に事務所名称が変更され、現在は自然保護官（レンジャー）とアクティブレンジャーの二人体制で業務を行っています。

国立公園は日本を代表する優れた自然の風景地であり、その風景地を守るために各種開発行為との事前調整を行うことが主な業務です。具体的には自然の風景や動植物

の保護を目的として様々な行為が規制されていることから、それらの行為に対して、許可や認可の審査を行っています。

一方で、国立公園を利用するための施設の整備も重要な業務です。登山道や公衆トイレ、宿泊施設などです。許可された行為が実際に申請のとおりに行われているか確認したり、野生動物の保護、外来種の防除、登山道の荒廃状況把握、利用者指導など適切に公園を利用出来ているか、など確認するため現地へ行くこともあります。

行政関係者や地域の皆さんに協力して頂き、日々の業務ができています。



登山道調査の様子



登山道の維持管理の様子



環境省 北海道地方環境事務所 東川自然保護官事務所

〒071-1423 上川郡東川町東町1丁目13番15号

TEL:0166-82-2527 FAX:0166-82-5086

【北海道地方環境事務所】<http://hokkaido.env.go.jp/>

【アクティブレンジャー日記】<http://hokkaido.env.go.jp/blog/>

■ NPO 法人ねおす・大雪山自然学校



散策レクチャー（旭岳ロープウェイ駅にて）

この度は目録の発行おめでとうございます。大雪山国立公園との関わりがまだまだ浅い私たちにとって、古き日の大雪山を知ることのできる文献は貴重な存在です。この目録によって蓄積された文献に触れられることをとてもうれしく思っております。

さて私たち大雪山自然学校は旭岳自然保護監視員の業務を通して、大雪山に関わっています。雪の残る6月から雪に覆われる11月まで毎日、姿見の池園地に通っていますが、時折数十年ぶりに旭岳を訪れた方とお話しする機会があります。ロープウェイが整備される以前のお話や、園地内に散策路が無かった頃のお話など、私たちはいつも貴重なお話を伺うばかりです。そんなお話を伺う度に、昔から愛されている大雪山や旭岳の歴史を感じます。

6月のある日、いつものように散策路上の残雪にステップを切る作業をしていると、旭岳温泉の登山道から二人組の男性が登ってきました。そのお二人は私たちの作業を見ると、背負っていたスコップを取り出して作業を手伝ってくださいました。「自分たちの歩く道だから、手伝うんだよ。」との言葉が忘れられません。散策路や登山道を登山者自身が整備することは私たちの目標だったからです。

大雪山そして旭岳の登山道、姿見の池園地の散策路は山が好きな人に支えられています。その方たちは私たちがお手伝いする前からずっと山を支えてきました。私たちはそれをできる限り引き継ぎ、どのように利用してもらうことが良いのかを考え続けながら活動をしています。ロープウェイの降車に合わせて実施する3分間の散策レクチャーや毎週四カ国語で発行する旭岳ネイチャーレター、毎日更新するインターネットを使った情報発信はそんな思いから生まれました。

山への愛情、自ら守る意識、伝える熱意、山で仕事をしていると大雪山で受け継がれている伝統を肌で感じます。そんな伝統のお手伝いをこれからも続けたいと考えています。



散策路補修

NPO 法人ねおす・大雪山自然学校

〒071-1404 上川郡東川町西4号北46番地

TEL:0166-82-6500 FAX:0166-82-6500

[e-mail] daisetsu@neos.gr.jp

■大雪山国立公園～旭岳姿見の最新情報■

http://blog.goo.ne.jp/daisetsu_2005/

■ 旭岳ファンクラブ

「旭岳ファンクラブ」は、旭岳の適正利用や、利用環境の整備を目的に、旭岳周辺で活動する山関係者によって、2003年春に発足しました。それと同時に、会報である『旭岳通信』も、創刊号が同年6月25日に発行されました。

ファンクラブ発足当時の旭岳周辺は、いまとはずいぶんようすが違っていました。1990年代の「百名山ブーム」によって、百名山のひとつである大雪山の最高峰・旭岳には、夏になると大挙して登山者が押し寄せていました。ロープウェイの駐車場には大型バスがズラリと並び、ひとつのグループが40名にもなる登山ツアーが、山頂をめざして数珠つなぎになる光景があたりまえだったのです。

とうぜんのように登山道は荒廃し、周辺には用を足すための踏みあとが出来、茂みの中にはティッシュペーパーの花が咲く—というありさまで、原始的な自然環境をウリにしている大雪山にはあってはならない光景があちこちで見られました。

この状況に心を痛めていた山関係者が、現状を多くの人に知ってもらい、少しでも環境保全の助けになれないだろうか、と思って立ち上げたのが「旭岳ファンクラブ」であり、情報発信ツールとして創刊したのが『旭岳通信』でした。

その後、会の活動は、「山の祭り」での劇や、山について学ぶ学習会、登山道の荒廃状況を見るツアーなど、幅をひろげて現在に至っています。

『旭岳通信』については、巻頭特集と連載記事という二本立てでこれまでやってきましたが、執筆協力者の減少により、現在の紙面を維持していくには厳しい環境になってきており、いつまで続けられるのかわからないというのが現状です。山や自然についてなにか書いてみたいという意欲のある著者を募集しています。残念ながら原稿料はありませんが…



外来種学習会



山の祭り劇

旭岳ファンクラブ

〒071-1407 上川郡東川町西七号北 37 山樂舎 BEAR 気付
電話 / FAX : 0166-82-5803
【e-mail】 asahidakefan@yahoo.co.jp



佐久間 弘（さくま ひろし）旭岳ファンクラブ代表

1962年新潟県生まれ。高校時代に登った白馬岳がきっかけで山にハマる。企業社会への疑問から大学卒業後、穂高の山小屋へ入るが仙人にはなれず、アルバイトでためた資金で26歳のときアフリカへ。2年にわたり各地を旅歩く。帰国後は、雑誌編集者・山小屋従業員・大工・漁師などを経て、山岳ガイドに。1995年より東川町在住。2001年に「大雪の“いま”を楽しみ、“明日”を考える山樂登山ガイド」山樂舎 BEAR を立ち上げ、現在まで代表を務める。

だいせつ いしかり
■ 大雪と石狩の自然を守る会
Nature Conservation Society of Mt.Daisetsu and the Ishikari



【会の概要】

設 立：1972 年旭川大雪の自然を守る会として発足
1980 年大雪と石狩の自然を守る会に改称

憲 章：石狩川憲章（1975 年）・大雪山憲章（1981 年）

役 員：代表・寺島一男、事務局長・渡辺辰夫、
役員総数 31 名

会 員：230 名（2014 年 3 月現在）

事務所：〒070-0822 旭川市旭岡 1 丁目

【活動の目的】

大雪山国立公園・石狩川・道北一帯を主なフィールドに、自然保護活動、調査研究活動、自然保護教育活動、自然保護思想の普及及び啓発活動、自然保護団体の設立及び連携活動、行政との協働及び行政に対する提言活動などを行う。

【主な活動内容】（2014 年 3 月現在）

1. 自然保護活動

①大雪縦貫道路問題（1971-1973 年）②表大雪循環道路問題（1972-1974）③大雪山国立公園内林道問題（1973-1975）④大規模林業圏開発問題（1973-2009）⑤石狩川水銀汚染問題（1975-1976）⑥日高横断道路問題（1979-2003）⑦大雪山国立公園パトロール活動（1980- 継続中）⑧石狩川上流野生サケ回復活動（1984- 継続中）⑨知床国有林伐採問題（1986-1987）⑩大雪山士幌高原道路問題（1987-2001）⑪大雪山リゾート開発問題（1990-2000）⑫大雪山世界遺産登録活動（2001- 継続中）⑬外来種セイヨウ防除活動（2005- 継続中）⑭大雪山国立公園森林伐採問題（2006- 継続中）⑮白水沢地熱開発問題（2012 年 - 継続中）

2. 自然保護団体の設立活動

北海道自然保護団体連合ほか 16 団体の設立及び設立に参加

3. 調査研究活動

美瑛富士山麓クマゲラ・ナキウサギ生息調査ほか、大雪山・石狩川の自然環境調査 9 件

4. 自然保護教育活動

①大雪山講座「ひぐま大学」（1981- 継続中）②自然学園「グリーンフォーラム旭川」（1975- 継続中）③市民例会「ちゃらんけ」（1995- 継続中）④大雪山フォーラム（1997- 継続中）

5. 講演活動

①学校教育（13 回）②公民館・博物館講座（26 回）③公共機関主催行事（26 回）④民間団体主催行事（62 回）

6. 広報活動

①機関誌「スタプカムシペ」（年 4 回 150 号）②会誌「カムイミンタラ」（年 1 回 33 号）

7. 表彰

①北海道社会貢献賞（2001 年）②自然環境功労者環境大臣表彰（2006 年）③旭川市開村 120 周年記念表彰（2010）④前田一步園ジュニア自然環境賞（2010 年）



■ 旭岳ビジターセンターと旭岳の四季

姿見石室 4月



姿見石室 6月

ヒグマの足跡



珍しい木の発見



スノーシューが使いやすく、無雪期には草木等でさえぎられて見えなかったものが観察しやすい時期になります。

ゴールデンウィークのころには動植物の動きも始まり、「大雪山」を深く知るには最適の時期といえるでしょう。

残雪の多い「裾合平」などは月末でもまだ数mの雪がおおう雪原ですが、夏山シーズンにむけ「山の祭り」が開かれる6月は、まず旭岳温泉で、ついで姿見で、つぎつぎ

開花していき、野鳥の種類も日を追って増加します。

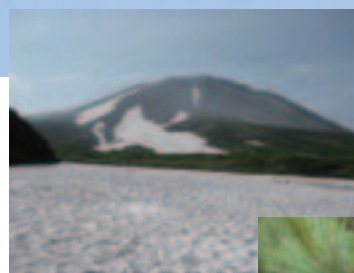
登山や自然、宿泊、交通などさまざまな情報を求める問い合わせが多い、賑やかな時期を迎えます。

7月、観光や登山がひとつのピークを迎えます。姿見がもっとも見栄えする花を揃える上中旬、多くの登山者が訪れます。しか

し夏の短い山では、花がピークを迎えると同時に早くも秋の気配が漂います。

8月は花も鳥も秋の様相です。湿地の蚊もトンボの群によって下旬に

旭岳周辺の大地は、約一年の半分、雪に覆われています。例年、暦の上で春を迎えるころ、積雪はもっとも深くなります。しかし、一日の長さが伸び、雪も締まっていく春は、スキーや



白鳥の雪渓



メアカシキンバイ

ギンザンマシコ





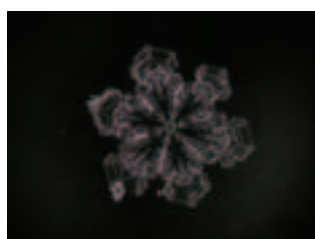
向け急速に減っていき、気の早い草木は葉に色づきが見られます。

9月の紅葉は多くの人を引き付けます。月初めから紅葉のピークを探る電話が急速に増えていきます。例年、秋分の日前後の好天日、旭岳は年間最多の人出を迎えます。

高山帯から雪が下るに従い、訪れる人は減りますが11月中旬からにかけての約1カ月、色鮮やかなウェアのノルディックスキー選手たちで賑わいます。



厳冬期は近年、外国人スキーヤーが大変増え、パウダースノーを楽しんでいます。世界的に有名な軽い雪は、美しく整った結晶構造の賜物といえるでしょう。



旭岳ビジターセンター

〒071-1472 上川郡東川町勇駒別

電話 /FAX : 0166-97-2153

【HP】 <http://www.welcome-higashikawa.jp/info/?c=16>

【e-mail】 visitor.center@town.higashikawa.hokkaido.jp

文献書誌の分類にあたって

文献書誌の分類については、専門家である清水敏一さん（岩見沢在住）にお願いしました。

本に関する基本的な情報は、①著者、編集者②発行者（社）③発行年④本の分類記号⑤内容の要約文（要約文中の人名敬称は略しました）－を基本としました。分類記号は、日本図書館協会が採用する「日本十進分類法（NDC）」です。図書や資料を収集、管理するときの基本的な分類記号で、図書の貸し出しや、目的の本を探すときに図書館の書棚のどこにあるかが分かり易くなります。分類記号を付ける作業にあたっては「文化交流館」のスタッフに協力いただきました。

なお、大雪山に関する本の収集の充実は継続していきますので、ご意見、情報を東川町へお寄せください。

ご協力いただいた方たち

東川町がふるさとの山、大雪山に関する本を集め、目録作りを進めていることに多くの方から賛同とお力添えをいただきました。貴重な本、研究書の情報をお寄せいただき、また、書籍、資料の寄贈もいただきました。お名前を書き残し、お礼とします。

東延江さん、小田島護さん、佐々木太一さん、鮫島惇一郎さん、清水敏一さん、高澤光雄さん、俵浩三さん、寺島一男さん、友田教章さん（株式会社ユウ・プリント）、邱大栄さん（台湾）

大雪山から育まれる文献書誌集

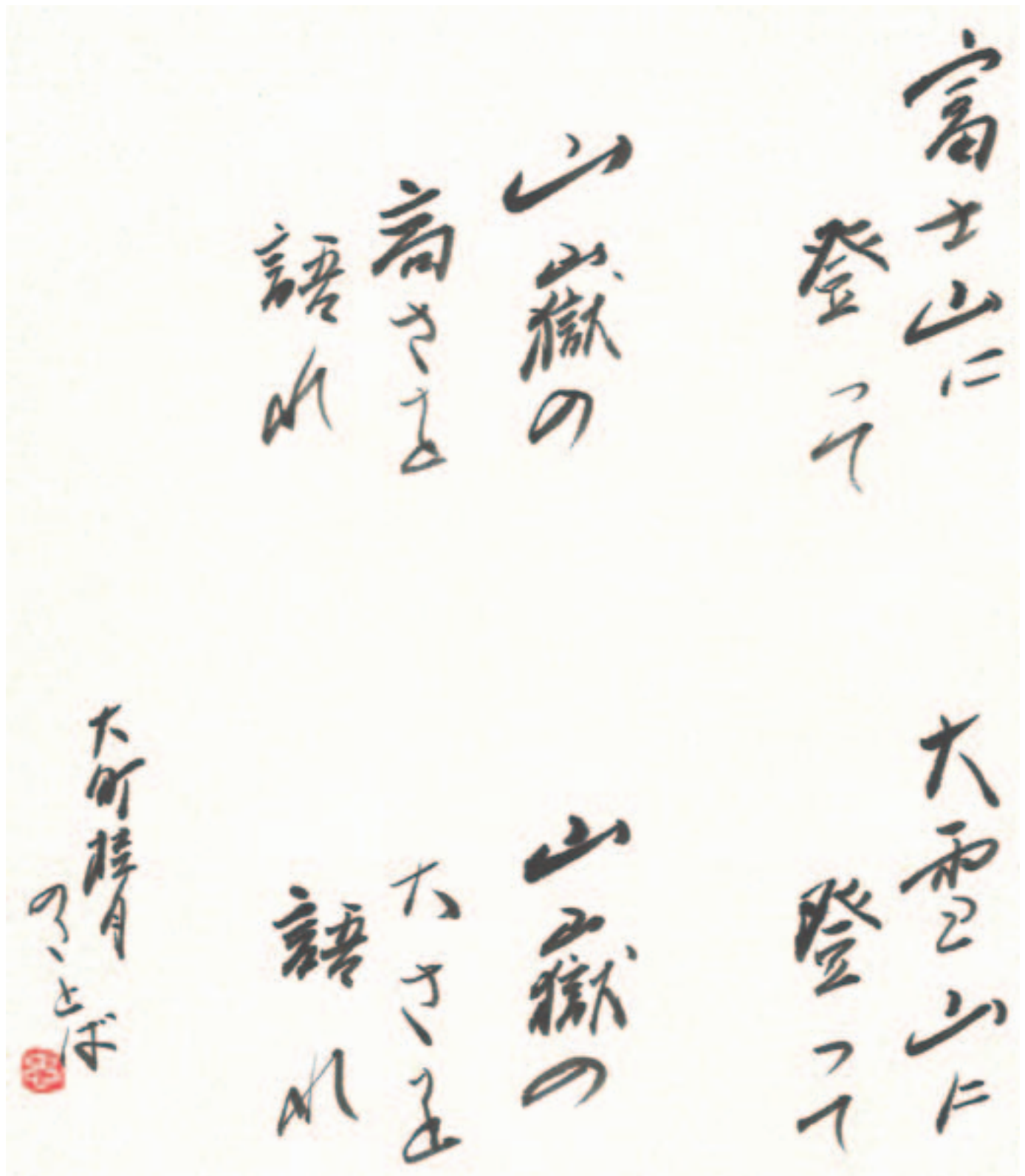
～豊かな自然・さまざまな生命・歴史文化の記録～

編集・発行／一般社団法人 ひがしかわ観光協会

〒071-1492 北海道上川郡東川町東町1丁目1番15号
TEL 0166-82-3761

企画・制作／株式会社 総合企画

発 行 日／平成26年3月



大雪山の文献書誌目録を作る打ち合わせのとき、担当者から、大町桂月の名文句を筆文字で載せたいという希望が出ました。異議なし。誰もが納得する大雪山の表現として、約 90 年前に書かれた一文が今も色あせることなく存在しています。「層雲峡より大雪山へ」の書き出しの一行がそれです。(桂月全集別巻 37 ページ)

富士山に登つて、山嶽の高さを語れ。大雪山に登つて、山嶽の大さを語れ。

作品は水野忠昭さんに書いていただきました。

